中等教育日本文典

全

370.5
Ot21
資料室

30351

教科書文庫

3
810
41-1897
20000
14259

M30
1897

中等教育日本文典

資料室
370.5
Ot21

廣島大學圖書之印

広島大学
教
14259
図書

中等教育日本文典例言

此書は、尋常中學教科中の國語文法の教課用に、こて作れるものなり。又、尋常師範學校の同科にも適用すべし。立案も、普通教育を目的としたれば、平易簡明なるを旨とせり。

此書と同時に、廣日本文典といふを發刊せり、此書を廣益敷衍したるものなり。又、廣日本文典別記といふをも發刊せり、考證餘論等を輯錄したるものなり。共に、此書の教師用として必讀すべく、授業の際、局部に應用し、敷衍伸縮して、可なり。(但、生徒には、迷ひを生ずべければ無用なるべし、)

全篇の紙數、稍、多きに過ぐるが如き批難もあるべけれど、教授の方法にて、自ら救ひ得べきなり。それらの事は、別記中に說きおけり。

鼻聲、……一五
促聲、……一六
轉呼音、……一六
連聲、……一六
音便、……一八
假名遣、……一九
漢字、……二一
畫、……二二
偏、旁、冠、……二二
楷、行、草、篆、隷、明朝、……二三
音、訓、……二四
字音ノ種類、……二四
呉音、漢音、唐音、……二五
單語篇、……二九

八品詞、……二九
名詞、(體言)……三一
固有名詞、普通名詞、……三二
代名詞、……三二
人代名詞、(自稱、對稱、他稱、不定稱、)……三三
指示代名詞、(近稱、中稱、遠稱、不定稱)……三五
數詞、……三六
動詞、(用言、作用言、)……三八
自動詞、(無對、有對)……三九
他動詞、(單對、複對)……四〇
語根、語尾、活用、……四一
第一表、(動詞ノ語尾、活用、法)……四三
正格活用、變格活用、……四三
四段活用、……四四

上二段活用……四五
下二段活用……四六
上一段活用……四六
下一段活用……四七
加行變格活用……四七
佐行變格活用……四八
奈行變格活用……四九
良行變格活用……四九
法……五〇
終止法……五一
連體法……五三
不定法……五四
中止法……五四
連用法……五五

名詞法……五六
命令法……五六
形容詞、(形狀言)……五七
第二表、(形容詞ノ語尾、活用、法)……五七
志幾活用……五八
志志幾活用……五八
法……五八
終止法……五九
連體法……六〇
中止法……六〇
副詞法……六一
語根……六二
助動詞……六三
第三表、(助動詞ノ語尾、活用、法)……六三

第四表、(動詞ト助動詞トノ連續、其一)……六三
第五表、(同、其二、能相、所相、使役相、敬相)……六三
第六表、(同、其三、現在、過去、未來)……六三
第七表、(助動詞ト助動詞トノ連續)……六三
能相、所相、(る、らる)……六四
勢相、(る、らる)……六六
使役相、(す、さす、ゑむ)……六七
敬相、(敬語)……六八
指定、(なり、たり、べし)……七〇
打消、(ず、まじ、じ)……七二
現在、過去、(半過去、大過去)未來、(四樣)……七三
過去、(つ、ぬ、たり、せり、けり、き)……七六
第八表、(四段活用ノ一種ノ半過去)……七八
未來、(む、けむ)……八〇

推量、(らむ、めり、まし、らし)……八〇
詠歎、(なり)……八一
比況、(ごとし)……八二
副詞、……八三
接續詞、……八五
豆爾乎波、……八六
第一類、名詞ニツクモノ、(が、の、の、が、つ、に、を、と、へ、より、から、まで)……八八
第二類、種々ノ語ニツクモノ、(は、ば、も、ぞ、なむ、し、こそ、だに、すら、さへ、のみ、ばかり、や、か)……九六
第九表、(動詞、形容詞、助動詞ト、や、か、トノ連續)……一〇四
第三類、動詞、形容詞、助動詞ニツクモノ、(ば、とも、ど、ども、に、を、が、て、(にて、して、にして、として)で、つゝ)……一〇五
第十表、(動詞、形容詞、助動詞トば、とも、ど、ども、トノ連續)……一〇五

感動詞、……一一二
他語ノ上ニ用ヰルモノ、(あ、あゝ、あら、あな、あはれ、や、やあ、やよ、いかに、いで、いざ、あはや、すは)……一一三
他語ノ中間、又ハ、下ニ用ヰルモノ、(や、も、は、を)……一一五
他語ノ下ニ用ヰルモノ、(な、よ、か、かも、かな、が、がも、がな、ね、なむ、かし)……一一七
熟語、……一二一
疊語、……一二四
接頭語、……一二七
接尾語、……一二八
名詞ニ接シテ名詞トスルモノ、(ら、など、ども、たち、ばら、かた、ぞち)……一二八
他語ヲ名詞トスルモノ、(げ、さ、み)……一二九
他語ヲ動詞トスルモノ、(めく、めかす、がる、ぶ、ぶる)……一二九

他語ヲ形容詞トスルモノ、(がまし、たし、らし)……一三〇
他語ヲ副詞トスルモノ、(ながら、ものから、ものゝ、ものゆゑ、すがら、がてら、がてに、からに、みづから、ごとに、まに〳〵、ばかり、がり、づゝ、など)……一三一
文章篇……一三七
主語、説明語、……一三七
客語、……一三八
修飾語、主部、客部、説明部、……一四〇
枕詞、……一四四
聯構文、……一四六
挿入文、……一四八
倒置句、……一四九
言掛、秀句、……一五一
結法、……一五二

尋常ノ結法、……一五二
「ぞ、なむ、や、か、」ノ結法、……一五四
「こそ、」ノ結法、……一五七
命令、及ビ、禁止ノ結法、……一五八
呼掛ノ結法、……一五九
挿入文ノ結法、……一六〇
聯構文ノ轉結、……一六〇
言掛、秀句、ノ轉結、……一六一
呼應、……一六一
自他ノ呼應、……一六二
能所ノ呼應、……一六二
時ノ呼應、……一六三
反語ノ呼應、……一六四
特性副詞ノ呼應、……一六八

署語、署句、……一七二
解剖、(文脈ノ解剖、語脈ノ解剖)……一七六
文中ノ符號、闕字、……一八四

上古文字有無ハ日下ノ部々落ノ長ホダ詞ニ中ル所無キトノ後勢ヲ以テ其文字ヲ日文（ひふみ）天名地祇（アマツナハチ）ニ義真等ト天

帝國大學圖書之印

中等教育

日本文典

◎總論

第一節　總論

言語

字、文字

文、文章

文法、文典

人ノ聲音ノ、意義アルモノヲ、言語トイフ。人ハ、言語ニ由リテ、其思想ヲ述ブ。言語ヲ述ブルニ、法則アリ、人々、其法則ニ由リテ、相語リテ、互ニ能ク其思想ヲ通ズ。

言語ヲ、物ニ書キツクル標（シルシ）ヲ、字、又ハ、文字トイヒ、書キツラネタルモノヲ、文、又ハ、文章トイフ。言語ニ法則アルガ故ニ、文章ニモ法則アリ、其法則ヲ、文法トイヒ、文法ヲ記シタル書ヲ、文典トイフ。

日本ノ言語ハ、古ヘヨリ、年代ヲ歴ルニ隨ヒテ、屢、變遷シキ。然レモ、今、常ニ文章ニ用ヰルハ、今ヨリ八九百年前ノ言語ナリ。

すべて、此書の例言にいふべき事にて、廣文典、又は、別記の例言序論中に讓れる多し、往きて見るべし。

文字篇

文字篇ハ、文字ノ形ト音トヲ講ズ。

○我ガ國ニテ用ヰル文字ニ、二類アリ。其一ヲ假名トイヒ、其一ヲ漢字トイフ。假名ハ、我ガ國ノ文字ナリ。漢字ハ、支那國ノ文字ナルヲ、借リテ用ヰルモノナリ。我ガ國ノ言語ハ、假名ノミニテモ、記スヿヲ得レドモ、古來、習慣トシテ、假名ト漢字トヲ雜ヘテ用ヰル。

假名

假名ノ數ハ、スベテ四十七アリテ、其體ニ、二種アリ、其一ヲ平假名トイヒ、其一ヲ片假名トイフ。

第四節

○平假名。平假名ノ形ヲ、左ニ以呂波歌ニテ記ス、小ク記シタルハ、別體ノモノナリ。

平假名以呂波歌

いろはにほへと
ちりぬるを
わかよたれそ
つねならむ
うゐのおくやま
けふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす

第五節

○片假名。片假名ヲ、左ニ、五十音圖ニテ記ス。

諸行無常
是生滅法
生滅滅已
寂滅為樂

五十音圖ハ元横ノ末ニ少ク帰ニ子ノ生ル

片假名五十音圖

阿行	アイウエオ	「アイウエオ」ノ縦ノ行ヲ、阿行ト名ヅケ、「カキクケコ」ノ行ヲ、加行ト名ヅク。其以下、佐行、多行、奈行、波行、末行、也行、良行、和行、皆、之ニ倣フ。「アカサタナハマヤラワ」ノ横ノ段ヲ、阿段ト名ヅケ、「イキシチニヒミイリヰ」ノ段ヲ、伊段ト名ヅク。其以下、宇段、衣段、於段、皆、コレニ倣フ。			
加行	カキクケコ				
佐行	サシスセソ				
多行	タチツテト				
奈行	ナニヌネノ				
波行	ハヒフヘホ				
末行	マミムメモ				
也行	ヤイユエヨ				
良行	ラリルレロ				
和行	ワヰウヱヲ				

阿段 伊段 宇段 衣段 於段

第六節　異類ノ假名

○異類ノ假名。假名、四十七ノ外ニ、尚、數個ノ假名アリ。

平假名。ん、づ、と、(こと)　ゟ、(より)　ゑ、(なり)

片假名。ン、ヅ、コ、(コト)　キ、(トキ)　モ、(トモ)　ノ、(シテ)

「ん」「づ」ノ事ハ、後ニイフベシ。其他ハ、一字ニテ、二音ヲ標スルモノニテ、書寫ノ便宜ニ用ヰラル、但シ、文句ノ中末ニノミ記シテ、首ニ用ヰルヿナシ。

第七節　符號字

○符號字。同ジ假名ヲ、一字、又ハ、二字以上重ネテ記ストキニ、下ノ假名ニ代用スル符號アリ、コレヲ送字、踊字、ナドイフ。

ちゝ、(父)　やま〳〵、(山々)　かへす〴〵、(返々)　くりかへし〳〵、(繰返)

ハヽ、(母)　カハ〴〵、(川々)　カハル〴〵、(代々)

第八節

○又、一音ノ韻ヲ延クニ用ヰル符號アリ。

アルコール、(酒精)　ピーター、(彼得)

第九節　聲音

○單純音。成熟音。母韻。發聲。氣息ノ、聲帶ニ觸レ、顫動シテ耳ニ聞ユルモノヲ「聲」トシ、聲ノ一氣息ニ成レルモノヲ「音」トス。

第一〇節　單純音

○阿行ノ五音ハ、口ヲ開キテ聲ヲ發スレバ、單純ニ出ヅ、因テ、コレヲ單純音ト名ヅク。口ヲ、廣ク開キテ聲ヲ發スレバ、「あ」トナリ、狹ク扁ク開キテ發スレバ、「い」トナリ、狹ク圓ク開キテ發スレバ、「う」トナル。「え」ハ、「あ」ト「い」トノ間ニ發シ、「お」ハ、「あ」ト「う」トノ間ニ發ス、而シテ、共ニ、口ヲ開クヿ、「い」、「う」、ヨリモ廣シ。

第一一節　發聲　成熟音

○加行以下、九行ノ諸音ハ、其行毎ニ、其行中ノ五音ヲ呼ビ起ス一種ノ聲アリ、コレヲ發聲ト名ヅク。發聲ハ、未ダ音ト成ラズ、單純音、其韻トナリテ、相熟シテ、始メテ音ト成ル。此ノ故ニ、加行以下ノ九行四十五音ヲ成熟音ト名ヅク。單純音ハ、斯ク、發

聲ノ韻トモナレバ、母韻ノ稱モアリ。

母韻

第一二節 發聲ノ別

○發聲ハ、氣息、又ハ、聲ノ、口內ノ諸機關ニ關係シテ起ルモノナリ。

加行ノ發聲ハ、喉頭ト舌根トニ激シテ發ス、而シテ、五母韻ト配合スレバ、此ノ行（ドヤウ）ノ五音ヲ成ス、口ノ開合ノ狀ハ、五母韻ニ同ジ。（下、皆、之ニ倣ヘ。）佐行ノ發聲ハ、舌尖、前齒ニ觸レテ發ス。多行ハ、舌尖、上齶ニ當リテ發ス、但シ、今世ノ發聲ニテハ、「ち、」「つ」ノ二ハ、上齶ニ當ル「弱シ。奈行ハ、舌尖、上齶ヲ撫デ、鼻ニ通ジテ發ス。波行ハ、喉戸ニ觸レテ發ス、但シ、今世ノ發聲ニテハ、「ふ、」獨リ、唇ニ觸ル。（奥羽、北陸、山陰、ノ土音ニテハ、五音、トモニ、唇ニ觸ル。）末行ハ、重ク唇ヲ閉開シテ、鼻ニ通ジテ發ス。也行ハ、喉頭ト舌面トニ關シテ發ス。良行ハ、舌尖、上齶ヲ摩擦シテ發ス。和行ハ、輕

ク唇ヲ開閉シテ發ス。

發聲＼母韻														
	w	r	y	m	p	b	(f) h	n	d	t (ts)	z	s	g	k
あ a	わ wa	ら ra	や ya	ま ma	ぱ pa	ば ba	は (fa) ha	な na	だ da	た ta	ざ za	さ sa	が ga	か ka
い i	ゐ (wi) i	り ri	い (yi) i	み mi	ぴ pi	び bi	ひ (fi) hi	に ni	ぢ (di) zi	ち (ti) tsi	じ zi	し (si) shi	ぎ gi	き ki
う u	う (wu) u	る ru	ゆ yu	む mu	ぷ pu	ぶ bu	ふ fu	ぬ nu	づ (du) zu	つ (tu) tsu	ず zu	す su	ぐ gu	く ku
え e	ゑ (we) e	れ re	え (ye) e	め me	ぺ pe	べ be	へ (fe) he	ね ne	で de	て te	ぜ ze	せ se	げ ge	け ke
お o	を (wo) o	ろ ro	よ yo	も mo	ぽ po	ぼ bo	ほ (fo) ho	の no	ど do	と to	ぞ zo	そ so	ご go	こ ko

成熟音　　單純音

假名ハ、一音、一字形ヲ成ス、(但シ、拗音、鼻聲、促聲ハ、然ラズ、後ニイフベシ)サレバ、發聲ト母韻トノ別ハ、無形ニテ說クヿトナリテ、曉リ難キヲ覺ユ、因リテ、今、羅馬字ヲ借リテ、右ノ表ニ示セリ(濁音、半濁音ヲモ、表中ニ加フ、後ノ第一六第一七節ニモ、此表ヲ參照スベシ)

各行ノ發聲ヲ概別スレバ、左ノ如シ。

(喉)k、g、h、y、(舌)s、z、t、ts、d、n、r、(唇)f、b、p、m、w、

各發聲、諸機關ニ關係ヲ起シテ、母韻ト合ヒテ音ト成ルヰハ、喉音、舌音、唇音、等ノ名アリ。

喉音、舌音
唇音

第一三節　半母韻

○半母韻。　五十音圖ノ中ニテ、阿行ノ「い、う、え」ト、也行ノ「い、え、」ト、和行ノ「う」ト、同形ノ假名、重出ス。　此ノ各二音ハ、各、相似通ヒタレバ、古來、同一ノ假名ヲ相通ハシテ用ヰ來タリ、サレド、其實阿行ノ音ハ、單純音ニテ、也行、和行ナルハ、發聲アル成熟音ナレバ、相異ナリ。

然レモ、也行ノ發聲ハ、甚ダ阿行ノ「い」ニ似、和行ノ發聲ハ、甚ダ阿行ノ「う」ニ似テ、更ニ、之ニ母韻ヲ添ヘテ、二母韻、相重ナリテ發スルモノ、如シ。サレバ、此ノ二行ノ音ハ、拗音ノ「きゃ、ぎゃ、ゆ、ちょ、」く、わ、」等(第一九、第二〇節ニ委シ)ノ韻トモナル。　此ノ故ニ、也行、和行ノ音ヲ、半母韻トモ名ヅク。

第一四節

○又、今世ノ發音ニテハ、和行ノ「ゐ、ゑ、を、」ハ、其發聲、默シテ、母韻ノミ發シ、阿行ノ「い、え、お、」ニ異ナラズ。

第一五節

○五十音ノ外ニ、尙、三種ノ成熟音アリ、濁音(ダクオン)ト、半濁音(ハンダクオン)ト、拗音(エウオン)(清、濁)トナリ。

第一六節　濁音　半濁音

○濁音。　半濁音。　此ノ二種ノ成熟音ヲ表スルニ、別ニ作ラレタル假名ナクシテ、他ノ假名ヲ借リテ用ヰル。　而シテ、濁音ニハ、其右肩ニ二點ヲ加ヘテ別ツ、其數、二十アリ。　半濁音ニハ、圈點ヲ加フ、其數、五アリ。　左ノ如シ。(平假名ノミニテ記ス、片假名

モ、之ニ倣フ、以下、例ヲ出スモノ、皆、同ジ、)

濁音。(が、ぎ、ぐ、げ、ご、ざ、じ、ず、ぜ、ぞ、だ、ぢ、づ、で、ど、ば、び、ぶ、べ、ぼ、

半濁音。ぱ、ぴ、ぷ、ぺ、ぽ、

濁音、半濁音ニ對シテ、標點ナキトキノ假名ノ音ヲ、清音(セイオン)トイフ。濁音ヲ發スルヲ、「濁(ニゴ)ル」トイヒ、ソレヨリシテ、清音ヲ發スルヲ、「清(ス)ム」トイフ。

第一七節

○加行、佐行、多行、ノ濁音ノ發聲ハ、其清音ノ發聲ヲ、鈍ク重ク發スルモノナリ。但シ、今世ノ發音ニテハ、多行ノ「ぢ、づ」ハ、變ジテ佐行ノ「じ、ず、」ノ如ク發ス。(四國、九州、ノ土音ニテハ、尚、其別ヲ存ス。)半濁音ノ發聲ハ、唇ヲ閉ヂテ、吹キ破ルガ如クシテ發ス。

第一八節　本濁、連濁

○濁音、半濁音ニハ、本濁(ホンダク)ト、連濁(レンダク)トノ別アリ。本濁トハ、此ノ音ノ自然ノモノニシテ、「くが、(陸)かぜ、(風)みづ、(水)かつば、(合羽)ナドノ「が、」ぜ、」づ、」ば、」ノ如シ。連濁トハ、二語ノ合シテ熟語トナレルキ、下ナル清音ノ濁ルコトアルニイフ、「やま(山)ト、「かは(川)ト連リ、「いし(石)ト、「はし(橋)ト連レバ、「やまがは、」いしばし、」トナリ、「おもひ(思)ト、「はかる(計)ト連リ、「なに(何)ト、「ひと(人)ト連レバ、「おもんばかる、(慮)なんびと、」トナルガ如シ。

第一九節　拗音

○拗音。此ノ音モ、一種ノ成熟音ニテ、亦、清、濁、半濁アリ、而シテ、亦、記スニ假名ナク、他ノ假名ヲ借リテ、二字、相連ネテ、一音ヲ表ハス。尋常ニ用ヰル拗音ハ、左ノ如シ。

きゃ、　きゅ、　きょ、
ぎゃ、　ぎゅ、　ぎょ、
ちゃ、　ちゅ、　ちょ、
じゃ、　じゅ、　じょ、
ちゃ、　ちゅ、　ちょ、　ぢゃ、　ぢゅ、　ぢょ、
にゃ、　にゅ、　にょ、「か、く、こ、」が、ぐ、ご、」又ハ「さ、す、そ、」ざ、
ひゃ、　ひゅ、　ひょ、　ず、ぞ、」等ノ音ヲ、直音ト稱ス。(他ハ、
びゃ、　びゅ、　びょ、　準ヘテ知ルベシ、)
びゃ、　びゅ、　びょ、
みゃ、　みゅ、　みょ、
りゃ、　りゅ、　りょ、

此ノ拗音ノ「きゃ、きゅ、きょ、」ぎゃ、ぎゅ、ぎょ、」又ハ、「ちゃ、ちゅ、ちょ、」じゃ、じゅ、じょ、」ト、相對セシメテ、

くゎ、
ぐゎ、

第二〇節

○拗音ハ、發聲ト、半母韻ト、成熟シテ發ス。而シテ、其各行ノ發聲ハ、其直音(清、濁、半濁、共ニ、)ノ發聲ニ同ジ。然ルニ、今、畿内、東海、關東、奥羽、等ニアリテハ、拗音ノ「くゎ、」ぐゎ、」皆、變シテ、直音ノ「か、」が、」トナレリ。拗音ハ、二音ノモノト紛ヒ易シ、因テ、下ノ假名ノ右肩ニ、標ヲ付シテ別ツ。

第二一節　鼻聲

○鼻聲。「ん」ハ、口ヲ閉ヂ、氣息ヲ鼻ニ通シテ壓シ出スガ如キ聲ナレバ、鼻聲ト名ヅク。此ノ聲、單獨ニハ出デズ、他ノ音ノ下ニ付キテ出ヅ。「ねんごろ、(懇)わらんべ、(童)ゆるん、(所以)ぶんてん、(文典)くわんおん、(觀音)ノ如シ。而シテ、斯ル場合ニハ「ねん、らん、るん、」ぶん、」くわん、」等、スベテ二字、或ハ、三字、相合シテ、一ノ成熟音

ナリ。

第二三節 促聲

○促聲。「つ」ハ、氣息ノ、口内ニ促ル聲ナレバ、促聲ト名ヅク。此ノ聲モ、單獨ニハ出デズ、他ノ二音ノ間ニ生ズ。此ノ聲ヲ表スルニ、字ナク、常ニ、成熟音ノ「つ」ヲ借ル、因テ、其右肩ニ、標ヲ付ケテ別ツ。「や-つこ、(奴)せ-つけ、(攝家)ゐ-ゆ-つせ、(出世)お-つと、(夫)ほ-つす、(欲)ぜ-づび、(是非)ノ如シ。

きちくつふ

第二三節 轉呼音

○轉呼音。假名ヲ、其本分ノ音ニ呼バズシテ、他ノ音ニ轉ジテ呼ブヿアリ、コレヲ轉呼音トイフ。

「は」ノ假名ヲ記シテ「わ」ノ如ク呼ブヿアリ。又「ひ」「ふ」「へ」「ほ」ヲ記シテ「い」「う」「え」「お」ノ如ク呼ブヿアリ、是レハ、發聲、默シテ、母韻ノミ發スルナリ。以上ノ轉呼音ハ、他ノ音ノ後ニアルトキニ發ス、首ニ發スルヿナシ。左ノ如シ。

第二四節

あは、(粟)　いひ、(飯)　くふ、(食)　はへ、(蠅)　ゐほ、(鹽)

かはる、(變)　あたひ、(價)　ゆふべ、(夕)　かなへ、(鼎)　おほし、(多)

いきほひ、(勢)　さいはひ、(幸)

○阿段ノ音ト、衣段ノ音トハ、(直、拗、清、濁、共ニ、)下ニ「う」又ハ「ふ」(轉呼音ノ)ヲ承クレバ、於段ノ音ノ如ク轉呼スルヿアリ、其中ノ成熟音ナルハ、發聲ヲ存シテ、母韻ヲ「お」ニ變ズルナリ。此ノ轉呼音ハ、開口ニモ發シ、他ノ音ノ後ニモ發ス。左ノ如シ。

あうむ、(鸚鵡)　あふみ、(近江)　……　えう、(要)　えふ、(葉)

かうべ、(首)　かふ、(買)　きやう、(京)　けうし、(教師)　けふ、(今日)

さうし、(草紙)　さふらふ、(候)　ゐやう、(商)　せうと、(兄人)　せふ、(妾)

たうげ、(峠)　たふとし、(貴)　ちやう、(町)　てうづ、(手水)　てふ、(ト云)

なう、(腦)　そなふ、(備)　……　ねうはち、(鐃鉢)　……

はうむる、(葬)　はふ、(這)　ひやう、(評)　へう、(瓢)　……

まうす、(申)　まふ、(舞)　みやう、(明)　めうが、(茗荷)　……

やうか、(八日)　もやふ、(舫)　……　……

まらうど、(客)　とらふ、(捕)　りやう、(兩)　れうり、(料理)　うれふ、(憂)

わう、(王)　……　くわう、(光)　……　ゐふ、(醉)

第二五節　連聲

○連聲。「阿」、「也」、「和」、三行ノ音ハ、「む」、「ぬ」、(鼻聲ニ變ジ)つ、(促聲ニ變ジ)ノ下ニ連ルトキ、上ノ發聲ニ連レテ、轉呼スルヿアリ、コレヲ連聲トイフ。

なむあみだぶつ、(南無阿彌陀佛)　おむやうじ、(陰陽師)　さむゐ、(三位)

ほんあみ、(本阿彌)　ゐんあい、(親愛)　ぜんあく、(善惡)　ぎんあん、(銀杏)

ゐんい、(瞋恚)　えんいん、(延引)　うんうん、(云々)　まんえふ、(萬葉)

いんえん、(因緣)　くわんおん、(觀音)　さんよう、(算用)　げんわ、(元和)

ゐんわう、(親王)　くわんゐん、(官員)　りんゐ、(輪廻)　あんをん、(安穩)

ほつい、(發意)　けついん、(厥陰)　けつえき、(闕腋)　ぜつおん、(舌音)

第二六節

「き」、「く」、ノ音ヲ、促聲ノ如ク轉呼スルヿアリ、亦、連聲ナリ。

せきこむ、(急込)　ひきばる、(引張)　ひきさぐ、(提)　せきけう、(石橋)

いくか、(幾日)　はくか、(薄荷)　がくかう、(學校)　かくけ、(脚氣)

ほくばう、(北方)　ろくべん、(六遍)　ごくぼ、(獨步)

第二七節　音便

○音便。二音ヲ連呼スルトキ、口ノ機關ノ便ニ隨ヒテ、原音ヲ他音ニ變ズルヿアリ、コレヲ音便トイフ。斯ル時ハ、原音ノ假名ヲ、其變ジタルモノニ書キ替フ。音便ハ、一語ノ首ニ發セズ。

今、左ニ、普通ニ變ズルモノヲ擧グ。

第二八節

○發聲ノ默シテ、母韻ノ存スルモノ。

ひらきて、(開)　ひらいて、(開)　つきて、(就)　ついて、(就)　あふぎて、(仰)　あふいで、(仰)　かぎて、(嗅)　かいで、(嗅)
をしきかな、(惜哉)　をしいかな、(惜哉)　ひさしきかな、(久哉)　ひさしいかな、(久哉)　ひとしくす、(齊)　ひとしうす、(齊)　おなじくす、(同)　おなじうす、(同)

第二九節

○發聲、默シテ、母韻存シ、更ニ、他ノ韻ニ變ズルモノ。

くらひて、(食)　くらうて、(食)　いひて、(言)　いうて、(言)　かひて、(買)　かうて、(買)　たゝかひて、(戰)　たゝかうて、(戰)

第三〇節

○促聲ニ變ズルモノ。

くらひて、(食)　くらつて、(食)　いひて、(言)　いつて、(言)　かひて、(買)　かつて、(買)　たゝかひて、(戰)　たゝかつて、(戰)
かちて、(勝)　かつて、(勝)　うちて、(擊)　うつて、(擊)　たちて、(立)　たつて、(立)　まちて、(待)　まつて、(待)
とりて、(取)　とつて、(取)　さりて、(去)　さつて、(去)　ありて、(有)　あつて、(有)　あたりて、(當)　あたつて、(當)

第三一節

○鼻聲ニ變ズルモノ。

やみて、(止)　やんで、(止)　とみて、(富)　とんで、(富)　よびて、(呼)　よんで、(呼)　およびて、(及)　およんで、(及)　死にて、(死)　死んで、(死)

第三二節

○上ノ音ノ發聲ノ、下ノ母韻ト合スルモノ。

よくあり、(善)　よかり、(善)　あしくあり、(惡)　あしかり、(惡)　まれにあり、(稀)　まれなり、(稀)　あきらかにあり、(明)　あきらかなり、(明)
みずある、(不見)　みざる、(不見)　ゆかずある、(不行)　ゆかざる、(不行)

第三三節

假名遣

○假名遣(カナヅカヒ)。發音、同ジクシテ、假名ノ用法ノ異ナルモノアリ、其用法ヲ、假名遣トイフ。左ニ、其迷ヒ易キモノヲ擧グ。

ー	わ、	は、(わ)	お、	ぢ、	か、
い、	ゐ、	ひ、(い)	ず、	づ、	が、
う、	ー	ふ、(う)	おゝや、	ぢゝや、	
え、	ゑ、	へ、(え)	おゝゆ、	ぢゝゆ、	
お、	を、	ほ、(お)	おゝよ、	ぢゝよ、	

其他ハ、前ニイヘル轉呼音ノ「あう、」かふ、」ゐゝやう、」てう、」けふ、」ノ類、

及ビ連聲ノ「さむゐ」(三位)ぜんあく」(善惡)けつえき」(闕腋)せきけう」(石橋)はくか」(薄荷)ノ類ナリ。

凡ソ、假名遣ヒノ誤リ易カルベキハ、辭書ニ據リテ、語ヲ求メテ、其用法ニ從フベキナリ。

漢字

○漢字

第三四節　漢字ハ、古クヨリ、我ガ國ニ傳ハリテ、今、日用トスルモノ、其數、凡ソ、三四千アルベシ。

第三五節　○畫(クワクワ)。漢字ヲ書クニ、其一筆ヲ「畫」トイフ。例ヘバ、「一」ノ字ハ一畫ニ成リ、「人」ハ二畫ニ成リ、「上」ハ三畫ニ成ルガ如シ。此ノ「畫」トイフモノ、二十餘樣アリ、是等、種々ニ組合ヒテ、千萬ノ字體ヲ成ス。

第三六節　○偏(ヘン)。旁(ボウ)。冠(カムリ)。漢字ハ、字形ニ因リテ類別セラル。例ヘバ、字ノ左ニ、「松」、「杉」、「柳」、ナド、「木」ノ字アルヲ、「木」ノ部トシ、「吸」、「吹」、「呼」、ノ如キヲ、「口」ノ部トシ、「銅」、「銀」、「鐵」、ノ如キヲ、「金」ノ部トシ、此ノ類ヲ、總ベテ、「偏」トイフ。又、字ノ右ニ、「鳩」、「鶴」、「鷄」、ノ如ク、「鳥」ノ字アルヲ、「鳥」ノ部トシ、「新」、「斬」、「斷」、ノ如キヲ、「斤」ノ部トシ、「成」、「戒」、「戲」、ノ如キヲ、「戈」ノ部トシ、此ノ類ヲ、「旁」トイフ。又、字ノ頭ニ、「岩」、「岸」、「峯」、ノ如ク、「山」アルヲ、「山」ノ部トシ、「筒」、「笛」、「笠」、ノ如キヲ、「竹」ノ部トシ、「空」、「窓」、「突」、ノ如キヲ、「穴」ノ部トシ、此ノ類ヲ、「冠」トイフ。其他、「丁」、「上」、等ヲ、「一」ノ部トシ、「盆」、「盛」、等ヲ、「皿」ノ部トシ、「遠」、「近」、等ヲ、「辶」ノ部トスル等、凡ソ二百十四ニ別レテ、コレヲ部首トイフ。以上ノ類別ハ、字ヲ見テ音義ヲ知ラムトシテ、字書中ニ求ムル用トスルナリ。(委シクハ、字書ノ部首ニ就キテ知ルベシ。)

第三七節
楷、行、草
篆、隷、明朝

○楷。行。草。篆。隷。漢字ハ、一字ノ形ニ、種々ノ書様アリ、コレヲ書體トイフ。常ニ用ヰルヲ、楷書、行書、草書トシ、篆書、隷書、之ニ次グ。

此六種ノ書體ノ中ニ、亦、各、數樣アリ。今、左ニ、「天、地、」トイフ二字ニテ、其一樣ヅツヲ示ス。

天地（楷）　天地（行）　天地（草）
天地（篆）　天地（隷）

第三八節

○同字ヲ連ネテ記スヰハ、亦、送字ヲ用ヰル、楷書ニハ、「々」ヲ用ヰ、行書、草書ニハ、「〻」ヲ用ヰル、例ヘバ「海々、度〻、敬服々々、多治〻〻」ノ如シ。

第三九節
音、訓

○音。訓。漢字ハ、一字ニテ、一語ノ意義ヲ成シ、其字ノ音ハ、即チ、支那ノ語ナリ、コレヲ漢語トイフ。我ガ國ニ傳ハリテヨリ、稍、本國ノ原音ヲ變ジタル所アリテ、別ニ、自ラ、一種ノ音ヲ成セリ、コレヲ、漢字音、略シテハ、字音トイフ。

第四〇節

漢字ヲ、音ノマヽニ讀ムヲ、音讀トイフ、「天、地、上、下、往、來、多、少、」甚、最、等ノ如シ。國語ニ譯シテ讀ムヲ、訓讀、又ハ、「よみ」トイフ、「天、地、上、下、往、來、多、少、甚、最、」ノ如シ。斯ク、漢字ノ旁ニ、假名ヲ添ヘテ記スヲ、振假名トイフ。

第四一節

漢語ノ、音讀ト、訓讀ト、紛レ易キモノ、又ハ、數樣ニ訓讀スベキモノ等ニハ、下ニ、別ニ、假名ヲ添ヘテ識別ス。例ヘバ、「往ク、往キ、來ル、來レ、多シ、多ク、少シ、少キ、甚ダ、最モ、暫シ、行ク、行フ、行ル、動ク、動カス、等ノ如シ。コレヲ送假名トイフ。

第四二節
字音ノ種類

○字音ノ種類。字音ニモ、單純音、成熟音、濁音、拗音、等ノ別アリ。其音ノ末ノ「ひゝき」ヲ、韻トイフ。字音ノ種類ハ、大要、二ニ分ル。

第四三節

一字、一音ノモノ。例ヘバ「阿、以、宇、於、支、微、歌、麻、馬、虞、模、語、沙、蛇、戈、主、壽、居、魚、」ノ如シ。

第四四節

一字二音ニ聞ユルモノ。但シ、韻ハ「い、ゐ、」う、」ぬ、む、」ふ、つ、く、ち、き、」ノ十樣ニ限ル。例ヘハ、「齊、灰、在、外、」垂、隨、追、類、」奥、豪、尤、」同、京、朝、」文、桓、」侵、嚴、」帖、合、業、」月、活、」屋、極、」質、罰、」昔、激、」ノ如シ。

第四五節

右ノ内ニテ、「垂、隨、」ナド、「ゐ」ノ韻ニ終ハルハ、宇段ノ音ノ下ニ限ル。又、「奥、京、朝、帖、合、」等ハ、「おう、」き、よう、」ち、よう、」ち、よう、」こう、」ノ如ク發音スルヿ、轉呼音ノ例ノ如シ。又、「文、」侵、」等ノ韻ノ「ぬ、」む、」ハ、今、常ニ、鼻聲ノ「ん」ニ發ス。

第四六節

○吳音。漢音。唐音。支那ニテハ、地方ニ因リテ、字音、異ニシテ、時代ニ因リテ、字音、變遷スルヿアリ。サレバ、字音ハ、傳來ノ地方ト、時代トニ因リテ、同字ニ、數樣アルモアリ。初メ、彼ノ國ノ南方ノ音ヲ傳ヘシヲ、吳音トイヒ、北方ノ音ヲ傳ヘシヲ、漢音トイヒ、後世、別ニ傳ヘシヲ唐音トイフ。今、左ニ、行、京、外、經、請、明、下、等ノ音ニテ、例ヲ示ス。

吳音。行狀、京都、外道、經文、起請、明日、上下、

漢音。孝行、京師、外聞、經書、請願、明白、天下、

唐音。行燈、南京、外郎、看經、普請、明朝、下火、

然レモ、字毎ニ、皆、三樣ノ音ヲ具スルニハアラズ、一字ニシテ、吳音、漢音、同一ナルモノ、固ヨリ多シ、又唐音ハ、甚ダ稀ナリ。(現在ノ清國ノ字音ノ入リ來レルハ、概シテ、支那音トイフ。)

○又、漢字ハ、音ヲ變ジテ、義ヲ變ズルヿアリ。例ヘバ、「數」ノ字ヲ、「すう」ト讀ムトキハ、「かず、」かぞふ、」ノ義ヲナシ、「さく、」ト讀ムトキハ、

第四七節

「ゐば〳〵」ノ義ヲナシ「出」ノ字ヲ「ゐゆつ」ト讀ムトキハ「いづ」ノ義ニテ「する」ト讀ムトキハ「いだす」ノ義トナルガ如シ。（委シクハ、字書ニ據リテ知ルベシ）

◎單語篇

第四八節　單語篇

言語ハ、一音、又ハ、數音ニテ成ル。「をり〳〵」に、あそぶ、いこま、は、ある、ひと、の、いこま、なし、こて、ふみ、よま、ぬ、かな。」トイフ歌ノ中ニテ、右ノ方ニ點ヲ付ケタルガ如ク、個々ニ別ツトキハ十四トナル。

第四九節　單語

斯ク分ケタル一ツヲ、單語（メシゴ）トイフ。單語篇ハ、其單語ノ種類、用法、等ヲ講ズ。

八品詞

○八品詞（ハツピンシ）。單語ノ種類ハ、名詞（メイシ）、動詞（ドウシ）、形容詞（ケイヨウシ）、助動詞（ジヨドウシ）、副詞（フクシ）、接續詞（セツゾクシ）、感動詞（カンドウシ）ノ八品ニ分ル。

をり〳〵（テニヲハ）に、遊ぶ（カヨウシ）、暇（イトマ）、は、ある、人、の、暇、無し、こて、書（フミ）、讀ま、ぬ、かな。（鈴屋集）

見、て、も、又、復、も、見まく、の、欲しかり、し、花、の、盛、は、過ぎ、や、し、ぬ、ら

む、(新古今、十六)

右ノ中ニテ、「暇」、「人」、「書」、「花」、「盛」、「過ぎ」、等ハ事物ノ名ヲイフ語ナレバ、名詞トイフ。「遊ぶ」、「ある」、「讀ま」、「見」、「爲」、(末ノ)等ハ、事物ノ動作作用ヲイフ語ナレバ、動詞トイフ。「無し」、「欲し」、等ハ、事物ノ形狀、情意ヲイフ語ナレバ、形容詞トイフ。「ぬ」、「て」、「まく」、「ぬ」、(末ノ)「らむ」、等ハ、動詞ノ意ヲ助クル語ナレバ、助動詞トイフ。「をり〳〵に」、「復」、ハ、動詞ニ副フ語ナレバ、副詞トイフ。「は」、「の」、「さて」、「も」、「や」、ハ、他ノ語ト語トノ關係ヲ示スモノニテ、豆爾乎波トイフ。「かな」ハ、感情ヲイフ語ニテ、感動詞トイフ。「又」ハ、「見ても」ト、「復も見まく」ト、ノ二句ヲ接ギ合ハスル語ニテ、接續詞トイフ。

以上八品ノ單語ノ中ニテ、動詞ノ「遊ぶ」、「ある」、ナドハ、其語ノ末「あそび」、「あそべ」、「あり」、「あれ」、ナドト變ハリ、形容詞ノ「無し」ハ、「なき」、「なく」、ナド變ハリ、助動詞ノ「ぬ」ハ、「ず」、「ね」、ナド變ハルヿアリ。其他ノ五品ノ單語ハ、其形ノ變ハルヿナシ。各單語ノ、各自ノ性質、用法等ハ、次ニ、委シク述ブベシ。

○名詞、體言

第五〇節

○凡ソ、アリトアル單語ハ、皆、八品詞ノ中ニ分屬ス、但シ、此ノ外ニ、接頭語、接尾語、ナドイフモノアリ、ソハ、篇末ニ說カム。

名詞

名詞(又、體言)ハ、有形、無形、ノ一切ノ事物ノ名ヲイフ語ニテ、且其下、が、の、に、を、と、へ、より、まで、等ノ豆爾乎波ニ接スベキモノヲイフ。

有形ノ「人」、「馬」、「山」、「川」、「草」、「木」、「雨」、「雪」、等ヨリ無形ノ「心」、「夢」、「聲」、「色」、「光」、「香」、「白」、「黑」、「禍」、「罪」、「上」、「下」、「縱」、「横」、「東」、「西」、「春」、「秋」、「晝」、「夜」、「喜」、「怒」、「哀」、「樂」、等ニ至ル

マデ、凡ソ、が、の、に、を等ノ辺爾乎波ニ接スルハ、皆、名詞ナリ。

第五一節
固有名詞
普通名詞

○固有名詞。　普通名詞。　有形、無形ノ名詞ノ中ニ、人名、地名、其他、一物、一事ノ固有ノ稱ナル者ヲ、固有名詞トイフ。　例ヘバ「頼朝、義經、」武藏、相模、」富士、」利根、」池月、」磨墨、」玄上、」牧馬、」髭切」膝丸、」古事記、」法華經、」(有形)元龜、」天正、」前九年之戰、」應仁之亂、」(無形)ノ如シ。

固有名詞ナラヌ其他ノ一切ノ名詞ハ、同種類ノ事物ニ通ジテ稱セラルレバ、普通名詞トイフ、人トハ、日本ニ住メルニモ、西洋ニ住メルニモイフベク、馬トハ仙臺産ナルニモ、薩摩産ナルニモイフベキガ如シ。

第五二節
○代名詞

○代名詞。　代名詞ハ、名詞ノ一種ニシテ、人、事、物、等ノ名ニ代ヘテイフ語ニテ、且多クハ、同一ノ名詞ノ連出スル時ニ、其煩ヲ省カムガ爲ニ用ヰルモノナリ。　例ヘバ、人、事、物、地位、方向、等ノ、各、其名アルニ代ヘテ、われ、(我)なむぢ、(汝)かれ、(彼)これ、(是)それ、(夫)こゝ、(此處)かなた(彼方)ナドイフガ如シ。

第五三節
人代名詞
自稱
對稱
他稱
不定稱

○人代名詞。　人ニ就キテ用ヰルヲ、人代名詞トイフ。　而シテ、指シテ稱スル人ノ位置ニ因リテ、三種ノ別ヲ成ス。　第一ナルヲ、自稱トイフ、話ス人、自ラ、己ガ名ニ代ヘテ用ヰルモノナリ、即チ、「我、行かむ。」ノ我ノ如シ。　第二ナルヲ、對稱トイフ、我ガ話シカクル人ノ名ニ代ヘテイフモノナリ、「我、汝ト、俱に行かむ。」ノ汝ノ如シ。　第三ナルヲ、他稱トイフ、對手トノ間ニ話出ス人、又ハ、我ト隔リタル人ノ名ニ代ヘテイフモノナリ、「我、汝ト俱に、彼を訪はむ。」我ト彼トの間に、」ナドイフ彼ノ如シ。　又、對稱、他稱、ノ中ニテ、其名ヲ知ラヌ人、又ハ、夫レト定メヌ人ノ名ニ代ヘテイ

フヲ不定稱トイフ。「汝は、誰なるか。」我、汝と共に、誰を訪はむ。」我、誰をか友とせむ。」ナドノ誰ノ如シ。又、名ヲ指サヌ衆人ヲイフ「アリ、「誰か思はむ。」誰も知る。」ノ如シ。

自稱	對稱	他稱	不定稱
あ、あれ、わ、われ、(我)	な、なれ、(汝)	か、かれ、あ、あれ、(彼)	た、たれ、(誰)

第五四節

人代名詞ノ尋常ナルモノハ、右ノ如シ、其他ニモ、古今、雅俗、尊卑、男女、等ニ用ヰ分クルモノ、尚甚ダ多シ。左ニ、其若干ヲ擧グ。

自稱。「麿、やつがれ、おのれ、それがし、余、身、自分、私、拙者、わらは、」(女ニ)

對稱。「いまし、みまし、上、(天子ニ)わぬし、(吾主)わどの、(吾殿)御身、御事、御邊、君、御前、殿、貴殿、貴所、貴公、貴樣、其許、おまへ、あなた、」ノ如シ。

他稱。「あやつ、かやつ、そやつ、」

不定稱。「それ、(某)それがし、なにがし、どなた、」

又、漢文ノ上ニハ、自稱ニ、「朕、(天子ニ)寡人、孤、(諸侯ニ)臣、(君ニ對シテ)拙生、小生、不佞、僕、弟、等アリ。對稱ニ、「陛下、上、(天子ニ)殿下、(王、太子、親王、攝政、關白、等)閣下、(高官ニ)卿、公、兄、吾子、足下、」ナドアリ。

第五五節　指示代名詞

近稱
中稱
遠稱
不定稱

○指示代名詞。又、事物、地位、方向、等ヲ指シ示スニイフ代名詞アリ、コレヲ、指示代名詞トイフ、亦、近稱、中稱、遠稱、不定稱、ノ別アリ。

近稱ハ、最モ近キニイフ、「これ、こゝ、こなた、」ノ如シ。中稱ハ、稍離レタルニイフ、「それ、そこ、そなた、」ノ如シ。遠稱ハ、遠キニイフ、「あれ、あしこ、あなた、」ノ如シ。不定稱ハ、名ヲ知ラヌ、又ハ、ソ

レト定メヌニイフ、「いづれ、」「いづた、」ノ如シ、又、博ク、諸事物、諸處ヲイフ「アリ、「いづく」にかあるべき。「いづれ」も同じ。」ノ如シ。

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	こ、これ、	そ、それ、	あ、あれ、か、かれ、	いづれ、なに、(ど)(どれ)
地位	こ、ここ、	そ、そこ、	あ、あしこ、か、あそこ、かしこ、	いづこ、いづく、(どこ)
方向	こ、こなた、	そ、そなた、	あ、あなた、か、かなた、	いづかた、(どなた)
	こ、こち、	そ、そちち、	あ、か、あち、	いづち、(どち)

○數詞。數詞モ、名詞ノ一種ニテ、事物ノ數ヲイフ語ナリ。其用法、位置、文中ニアリテ、正ニ名詞ニ同ジ。

ひとつ、ふたつ、みつ、よつ、いつゝ、むつ、
とを、はたち、みそぢ、よそぢ、いそぢ、むそぢ、
なゝつ、やつ、こゝのつ、
なゝそぢ、やそぢ、こゝのそぢ、

又、語末ノつ、ち、ヲ去テ、他ノ名詞ニ冠ラセテ用ヰルアリ。

一夜、二路、三筋、四時、五月、六言、
七草、八回、九返、十度、二十年、三十文字、
四十年、五十返、八十氏人、

又、「い」(五)そ、(十)い、」(五十)ほ、」(百)もゝ、」(百)ち、」(千)よろづ、」(萬)ナドモ、數詞ナレド、多クハ熟語ニ用ヰラレ、且、用法、甚ダ局ス。

五十、幾十、五十鈴川、五十日、百日、百年、

百千、　三千、　八千、　千種、　千萬、　五百枝、
八百萬、

又、漢字ヲ音讀スル「一」、「二」、「三」、「四」、「五」、「六」、「七」、「八」、「九」、「十」、「百」、「千」、「萬」、「億」、「兆」、等モ、皆、是レナリ。

○動詞、用言作用言

第五七節　動詞

動詞(又、用言、作用言)ハ、事物ノ、有意ノ動作、又ハ、無意ノ作用、ヲイフ語ナリ。例ヘバ、「人、行く。」「心、動く。」ノ「行く」ト、「動く」トハ、「人」ト、「心」トノ有意ノ動作ヲイヒ、「花、落つ。」「春、過ぐ。」ノ「落つ」ト、「過ぐ」トハ、「花」ト、「春」トノ無意ノ作用ヲイフガ如シ。又、稀ニハ、現象ヲイフモノアリ、例ヘバ、「此ニ、人あり。」「志、其父に似る。」ノ「あり」ト、「似る」トハ、「人」ト、「志」トノ現象ヲイフガ如シ。

第五八節　自動

○アラユル動詞ヲ、其動作ノ性質ニ由リテ、自動(シドウ)ト他動(タドウ)トニ二大別ス。

第五九節　自動

○自動。動詞ノ動作ノ、獨リ自ラスル性質ナルモノヲ、自動トイフ。例ヘバ、「花、飛ぶ。」「鳥、鳴く。」ノ、「飛ぶ、鳴く、」ノ如シ、其意、ソノマヽニテ通ズ。

又、自動ナレモ、其動作ノ係ルベキ標準ナケレバ、意ヲ全ウセザルモノアリ。例ヘバ、「鏡は、壁に懸る。」「顔は、前へ向ふ。」ノ「懸る、向ふ、」ノ如キ、唯「鏡は、懸る。」「顔は、向ふ。」トノミイヒテハ、其意、未ダ通ゼズ、必ズ、「何(ナニ)にか懸る。」「何方(イヅカタ)へか向ふ。」ト問ハルベシ、然ルトキハ、其標準ヲ擧ゲテ、「壁に、」又は、「前へ、」ナド、答ヘズハアルベカラズ、而ノ後ニ、其意、全シ、然レモ、「懸る、向ふ、」ノ動作ハ、尙、自ラスルナリ。

標準ニハ「に、」「と、」「へ、」「より、」「から、」「まで、」等ヲ要ス。

無對自動　飛ぶ、鳴く、ノ如キヲ、無對自動ト名ヅケ、懸る、向ふ、ノ如キヲ、有對自動ト名ヅケ、總稱シテハ、自動詞トイフ。自動詞トハ、自動性ノ動詞ノ畧ナリ。

有對自動

第六〇節　他動

○他動。動詞ノ動作ノ、他ノ事物ヲ處分スル性質ナルモノヲ他動トイフ。例ヘバ、「蠶は、絲を吐く。」「蜂は、蜜を釀す。」ノ吐く、釀す、ノ如キ、唯「蠶は、吐く。」「蜂は、釀す。」トノミニテハ、其意、更ニ通ゼズ、必ズ其處分スベキ絲、又ハ、蜜ヲ要ス、コレヲ、他動ノ動作ノ目的トイフ。目的ニハ、をヲ要ス。又、目的ノ外ニ、尙「有對自動」ト同ジク、其動作ノ係ルベキ標準ヲ要スルモノアリ。例ヘバ「朱を藍に雜ふ、」「水を湯となす、」トイフヲ、唯「朱を雜ふ、」「水をなす、」トノミニテハ、其意、未ダ通ゼズ、藍、湯、ノ標準ヲ得テ、意、始メテ全シ。

第六一節　單對他動　吐く、釀す、ノ如キヲ、單對他動ト名ヅケ、雜ふ、なす、ノ如キヲ、複對他動ト名ヅケ、總稱シテハ、他動詞トイフ。

無對自動。
- 花、飛ぶ。
- 鳥、鳴く。

單對他動。
- 蠶、絲を吐く。
- 蜂、蜜を釀す。

有對自動。
- 鏡、柱に懸る。
- 顏、前へ向ふ。
- 水、湯となる。
- 人、馬よりおる。
- 書狀、京まで屆く。

複對他動。
- 朱を藍に雜ふ。
- 使を都へ遣る。
- 鷺を鴉といふ。
- 教を師より受く。
- 貨物を港まで送る。

第六二節　○同語ノ、用法ニ因リテ、自動トモ他動トモナルモノアリ。

自。風、吹く。　數、增す。　戸、開く。　自ら愼む。

他。火を吹く。　數を增す。　戸を開く。　身を慎む。
自。夜、明く。　立ちて舞ふ。　波、岸に寄す。
他。戸を明く。　舞を舞ふ。　船を岸に寄す。

第六三節　語根　語尾　活用

○語根（ゴコン）。語尾（ゴビ）。活用（クワツヨウ）。動詞ハ、其動作ノ意ヲ、種々ニ表ハサムトシ、又ハ、他語ニ連續セムガ爲ニ、其語ノ末ヲ變化ス。例ヘバ、ゆく（行）ゆき、ゆけ、　まかす（任）まかせ、　たつ（立）たち、たて、　つかぬ（束）つかね、

右ノ「ゆ、まか、た、つか、」ノ如ク動カヌ部ヲ、語根トイヒ、「く、き、け、」「す、せ、」「つ、ち、て、」「ぬ、ね、」ノ如ク變化スル部ヲ、語尾トイヒ、其變化スルヲ、はたらくトイヒ、名詞トシテハ、はたらき、又、活用トイフ。

又、一音ノ動詞ハ、其全體ヲ變化ス。例ヘバ、

う（得）え、　く（來）こ、き、　す（爲）せ、し、

第一表　動詞ノ語尾活用……法

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第五活用	第六活用
第一終止法（終止言）		第二終止法（連體言）	第三終止法（已然言）	不定法（將然言）	連用法（連用言）	名詞法
正格活用　四段活用	(一)(行)ゆく (二)(押)おす (三)(分)わかつ (四)(飛)とぶ (五)(讀)よむ (六)(去)さる	ゆく おす わかつ とぶ よむ さる	ゆけ おせ わかて とべ よめ され	ゆか おさ わかた とば よま さら	ゆき おし わかち とび よみ さり	ゆけ おせ わかて とべ よめ され
正格活用　上二段活用	(一)(生)いく (二)(落)おつ (三)(強)あふ (四)(恨)うらむ (五)(報)むくゆ (六)(懲)おる	いく おつる あふる うらむる むくゆる おる	いくれ おつれ あふれ うらむれ むくゆれ おるれ	いき おち あひ うらみ むくい おり	いき おち あひ うらみ むくい おり	いきよ おちよ あひよ うらみよ むくいよ おりよ
正格活用　下二段活用	(一)(得)う (二)(受)うく (三)(任)まかす (四)(立)たつ (五)(兼)かぬ (六)(歷)ふ (七)(勤)つとむ (八)(覺)おぼゆ (九)(恐)おそる (十)(植)うう	うる うくる まかする たつる かぬる ふる つとむる おぼゆる おそる うう	うれ うくれ まかすれ たつれ かぬれ ふれ つとむれ おぼゆれ おそるれ ううれ	え うけ まかせ たて かね へ つとめ おぼえ おそれ うゑ	え うけ まかせ たて かね へ つとめ おぼえ おそれ うゑ	えよ うけよ まかせよ たてよ かねよ へよ つとめよ おぼえよ おそれよ うゑよ
正格活用　上一段活用	(一)(鑄)いる (二)(着)きる (三)(似)にる (四)(乾)ひる (五)(見)みる (六)(居)ゐる	いる きる にる ひる みる ゐる	いれ きれ にれ ひれ みれ ゐれ	い き に ひ み ゐ	い き に ひ み ゐ	いよ きよ によ ひよ みよ ゐよ
正格活用　下一段活用	(蹴)ける	ける	けれ	け	け	けよ
變格活用　加行變格	(來)く	くる	くれ	こ	き	こよ
變格活用　佐行變格	(爲)す (坐)おはす	する おはする	すれ おはすれ	せ おはせ	し おはし	せよ おはせよ
變格活用　奈行變格	(往)いぬ (死)あぬ	いぬる あぬる	いぬれ あぬれ	いな あな	いに あに	いね あね
變格活用　良行變格	(有)あり (居)をり (侍)はべり (在)いまそかり（いますかり）	ある をる はべる いまそかる	あれ をれ はべれ いまそかれ	あら をら はべら いまそから	あり をり はべり いまそかり	あれ をれ はべれ いまそかれ

此ノ表ハ、從來ノ用言活用圖トハ、名稱、順序、共ニ異ナル所アリ、又、舊圖ニハ、各活用ニ連續スベキ助動詞、互爾乎波等ヲ、一々、各欄内ニ分載セルヲ、此ノ表ニハ除ケリ、凡ソ、是等ノ事ハ、委シク、此ノ書ノ別記ニ辨ズベシ、後ノ形容詞、助動詞、ノ表モ然リ。

○第一表説明、

○表中、正格活用ノ各類中ニ、又、各、數種アル「(一)(二)(三)等ノ標ニテ知ルベシ。　而シテ、其各種ノ處ニ擧ゲタル動詞ハ、其同種中ノ一語ヲ採リテ、例トシテ擧ゲタルモノ、ト知ルベシ。　例ヘバ、四段活用ノ(一)ノ「ゆく」(行)ハ、其語尾、「く、く、け、か、き、け、」トナル、是レト同ジク、「おどろく」(驚)はく」(吐)さく」(聞)かく」(書)ふく(吹)等、枚擧スベカラズ、是等ノ語尾、皆「く、く、け、か、き、け、」トナル。　又、(二)ノ「おす」(押)トモ同ジキ、「うつす」(移)いなす(辭)かへす(返)けす」諸活用ヲ諳記セムニ、長クナラザラムヲ欲シテ、簡ニ從ヒテ、略キテ、一二三法ヲ、同段ニ當ツルヿトシタリ、且、其活用ノ形、正格、變格、ノ九類ニ亘リテ、連體法、第二終止法、共ニ、各、相同シク、中止法、連用法、名詞法、亦、共ニ、各、相同ジクモアレバナリ。

○各動詞ノ語尾ノ活用ヲ、其語尾ノミヲ採リテ、左ノ如ク稱呼スベシ、且、各活用ヲ、此ノ稱呼ニ據リテ、諳誦シ居レバ、其則ヲ記憶シ易シ。

（加行四段、佐行四段、）　く、く、け、か、き、け、（す、せ、さし、せ、）

○第一表說明、

○表中、正格活用ノ各類中ニ、又、各、數種アルヿ、(一)(二)(三)等ノ標ニテ知ルベシ。　而シテ、其各種ノ處ニ擧ゲタル動詞ハ、其同種中ノ一語ヲ採リテ、例トシテ擧ゲタルモノ、ト知ルベシ。　例ヘバ、四段活用ノ(一)ノ「ゆく」(行)ハ、其語尾、「く、く、け、か、き、け」トナル、是レト同ジク、「おどろく」(驚)はく(吐)きく(聞)かく」(書)ふく(吹)等、枚擧スベカラズ、是等ノ語尾、皆「く、く、け、か、き、け」トナル。　又、(二)ノ「おす」(押)ト同ジキハ、「うつす」(移)いだす」(出)かへす」(返)けす」(消)ナド、皆、是レニテ、共ニ、其語尾ノ活用ハ、「す、す、せ、さ、し、せ」ナリ。　以下、上二段、下二段、上一段活用、等ニ亘リテ、皆、此ノ定ノナリト知ルベシ。(但シ、下一段ハ、一語ノミナリ)

○變格活用ハ、アラユル動詞ノ中ニ就キテ、僅ニ九語アルノミナレバ、表中ニハ、ソノアル限リヲ擧ゲタリ。　サレバ、正格活用ノ方ノ、各種中ニ就キテ、一語ヅヽ抽キテ擧ゲタルトハ、異ナル所アリ、ト知ルベシ。

○表中、各活用ノ中ニ、往々、同形ノモノヽ、重出セルアリ。　然レ𪜈、是等ハ、形ハ、同ジケレ𪜈、其意義ハ、異ナルモノナリ、其異ナル故ハ、同ジ段ノ、他類ノ活用ニ照シテ見バ、其形ヲ異ニスルモノアルニテ知ルベク、且、他ノ助動詞、豆爾乎波等ニ連續スル通則ニ至リテモ、各、異ナル所アルナリ。　尙、本文中ノ助動詞、其他ノ條ニ說クベシ。

○表ノ第二ノ段ニ、連體法ト、第二終止法ト、ノ二法ヲ併セ、又、第五ノ段ニ、中止法ト、連用法ト、名詞法ト、ノ三法ヲ併セテ當テタルハ、表ヲ省略シタルニ因ル、正シクハ、表ニ、更ニ、三段ヲ增シテ、全表ヲ九段トシテ、段毎ニ、一法ヅヽ當ツベキナリ。　然レ𪜈、今ハ、表ノ面ノ、袤大トナラザラムヲ欲シ、又、語尾ノ諸活用ヲ諳記セムニ、長クナラザラムヲ欲シテ、簡ニ從ヒテ、略キテ、二三法ヲ、同段ニ當ツルヿトシタリ、且、其活用ノ形、正格、變格、ノ九類ニ亘リテ、連體法、第二終止法、共ニ、各、相同シク、中止法、連用法、名詞法、亦、共ニ、各、相同ジクモアレバナリ。

○各動詞ノ語尾ノ活用ヲ、其語尾ノミヲ採リテ、左ノ如ク稱呼スベシ、且、各活用ヲ、此ノ稱呼ニ據リテ、諳誦シ居レバ、其則ヲ記憶シ易シ。

正格

- 加行四段、佐行四段、多行四段、波行四段、末行四段、良行四段、ノ活用。　く、く、け、か、き、け、す、す、せ、さ、し、せ、つ、つ、て、た、ち、て、ふ、ふ、へ、ば、び、へ、む、む、め、ま、み、め、る、る、れ、ら、り、れ、
- 加行上二段、多行上二段、波行上二段、末行上二段、也行上二段、良行上二段、ノ活用。　く、くる、くれ、き、きよ、つ、つる、つれ、ち、ちよ、ふ、ふる、ふれ、ひ、ひよ、む、むる、むれ、み、みよ、ゆ、ゆる、ゆれ、い、いよ、る、るる、るれ、り、りよ、
- 阿行下一段、加行下一段、佐行下一段、多行下一段、奈行下一段、波行下一段、末行下一段、也行下一段、良行下一段、和行下二段、ノ活用。　う、うる、うれ、え、えよ、く、くる、くれ、け、けよ、す、する、すれ、せ、せよ、つ、つる、つれ、て、てよ、ぬ、ぬる、ぬれ、ね、ねよ、ふ、ふる、ふれ、へ、へよ、む、むる、むれ、め、めよ、ゆ、ゆる、ゆれ、え、えよ、る、るる、るれ、れ、れよ、う、うる、うれ、え、えよ、
- 阿行上一段、加行上一段、奈行上一段、波行上一段、末行上一段、和行上一段、ノ活用。　い、いる、いれ、い、いよ、き、きる、きれ、き、きよ、に、にる、にれ、に、によ、ひ、ひる、ひれ、ひ、ひよ、み、みる、みれ、み、みよ、ね、ねる、ねれ、ね、ねよ、け、ける、けれ、け、けよ、ノ活用。

變格

- 佐行變格、奈行變格、良行變格、く、くる、くれ、こ、こよ、す、する、すれ、せ、せよ、ぬ、ぬる、ぬれ、な、なよ、り、りる、りれ、ら、らよ、ノ活用。

第六四節　動詞ノ諸活用

○動詞ノ諸活用ヲ、種々ニ使用スルニ、七樣ニ分ル、コレヲ法トイフ。　其七法ヲ說クニ先ダチテ、先ヅ、活用ヲ、七法ニ配當シテ說クヲ便ナリトス。

第六五節　正格活用　變格活用

○正格活用。　變格活用。　アラユル動詞ノ、語尾ノ活用ノ狀、亦、種々ナレド、其狀ノ異同ヲ類別スレバ、九類トナル。　其中ノ五類ニハ、所屬ノ動詞多クシテ、他ノ四類ニハ、極メテ少シ。　其多キ方ヲ、正格活用ト名ヅケ、少キ方ヲ變格活用ト名ヅク。　其別、左ノ如シ。

正格活用。

- 第一、四段活用。　六種
- 第二、上二段活用。六種
- 第三、下二段活用。十種
- 第四、上一段活用。六種
- 第五、下一段活用。一種

第六四節

○動詞ノ諸活用ヲ、種々ニ使用スルニ、七樣ニ分ル、コレヲ法ト(ハウ)イフ。其七法ヲ說クニ先ダチテ、先ヅ、活用ヲ、七法ニ配當シテ說クヲ便ナリトス。

第六五節

正格活用
變格活用

○正格(セイカク)活用。變格(ヘンカク)活用。アラユル動詞ノ、語尾ノ活用ノ狀、亦、種々ナレド、其狀ノ異同ヲ類別スレバ、九類トナル。其中ノ五類ニハ、所屬ノ動詞多クシテ、他ノ四類ニハ、極メテ少シ。其多キ方ヲ、正格活用ト名ヅケ、少キ方ヲ變格活用ト名ヅク。其別、左ノ如シ。

正格活用。

第一、四段(ヨダン)活用。六種　第二、上二段(カミニダン)活用。六種　第三、下二段(シモニダン)活用。十種
第四、上一段(カミイチダン)活用。六種　第五、下一段(シモイチダン)活用。一種

變格活用。

第一、加行變格。一種　第二、佐行變格　一種

第三、奈行變格。一種　第四、良行變格　一種

第六六節　四段活用

○四段活用。　正格活用ノ第一ヲ、四段活用トイフ、此ノ類ノ活用ニ屬スルモノハ、第一表ニ示セルガ如ク、六種ニ限ル。　此ノ各種ノ動詞ハ、表ニ據リテ、其語尾ノ活用ヲノミ唱フレバ、(下、之ニ倣ヘ)「く、くけ、か、きけ、す、す、せ、さ、し、せ、」つ、つ、て、た、ち、て、」ふ、ふ、へ、は、ひ、へ、」ナドトナリテ、其活用ノ語路、口調、相似タレバ同類トス。(濁音ナルモ同ジ、下、スベテ、之ニ倣ヘ)　而シテ、其活用ノ音ノ、七法ノ配當ニ因リテ重複シタルヲ除ケバ、「く、け、か、き、」す、せ、さ、し、」つ、て、た、ち、」ふ、へ、は、ひ、」ナドトナル、之ヲ五十音圖ノ各行ニ照セバ、皆、上ヨリ四段マデノ音ノ中ニテ活用ス、因テ、之ヲ四段活用ト名ヅク。

第六七節　上二段活用

○動詞ノ中ニテ、此ノ活用ニ屬スルモノ、最モ多シ、而シテ、加行ノ音ニテ活用スルヲ、加行四段活用トイヒ、佐行ノ音ニテ活用スルヲ、佐行四段活用トイフ、他ハ、推シテ知ルベシ。　凡ソ、正格ノ五類活用中ノ各種ノ稱、皆、之ニ倣フ。

○上二段活用。　正格活用ノ第二ヲ、上二段活用(又、中二段活用)トイフ。　此ノ類ノ活用モ、第一表ニ擧ゲタルガ如ク、亦、六種ニシテ、其語尾ノ活用ノ狀ハ、「く、くる、くれ、き、き、きよ、」つ、つる、つれ、ち、ち、ちよ、」ふ、ふる、ふれ、ひ、ひ、ひよ、」ナド、皆、其口調ヲ同ジウス。　而シテ、其活用中ノ「る、れ、よ、」ノ音ヲ除ケバ、「く、き、」つ、ち、」ふ、ひ、」ナド、ナル、之ヲ五十音圖ノ各行ニ照セバ、次ナル下二段ニ對シテ、圖中ノ上方ノ二段ノ音ニテ活用ス、因テ、之ヲ上二段活用ト名ヅク。

上二段活用ノ動詞、甚ダ多カラズ。

第六八節
下二段活用

○下二段活用。第三ノ活用ヲ、下二段活用ト稱シテ、十種アリ。其ノ活用ノ狀、上半ニアリテハ、「う、うる、うれ、」く、くる、くれ、」す、する、すれ、」つ、つる、つれ、」ナドニテ、前ノ上二段活用ニ似タレド、下半ハ「え、え、えよ、」け、け、けよ、」せ、せ、せよ、」て、て、てよ、」ナドニテ、異ナリ。而シテ、是レモ、「る、れ、よ、」ヲ除ケバ「う、え、」く、け、」す、せ、」つ、て、」ナドトナリテ、五十音圖、各行ノ下方ノ二段ノ音ニテ活用ス、因テ、下二段活用ト稱ス。下二段活用ノ動詞ハ、四段活用ニ次ギテ多シ。

第六九節
上一段活用

○上一段活用。此ノ類ノ活用ハ、(單ニ、一段活用トモ稱ス、)六種ニ限ル。此ノ活用、下半ハ、「い、い、いよ、」き、き、きよ、」ひ、ひ、ひよ、」ナドニテ、上二段活用ニ似タレド、上半ハ、「いる、いる、いれ、」きる、きる、きれ、」ひる、ひる、ひれ、」ナドニテ、異ナリ。是レモ、「る、れ、よ、」ヲ除ケバ、「い、」き、」ひ、」ナド、ナリテ、五十音圖、上方ノ一段ノ音ノミニテ活用ス。

因リテ、次ナル下一段活用ニ對シテ、上一段活用ト稱ス。此ノ活用ニ屬スル動詞ハ、僅ニ、十數語アルノミ。

第七〇節
下一段活用

○下一段活用。此ノ類ノ活用ハ、文章語ニアリテハ、「ける(蹴)」トイフ一語ニ限ル。其下半ハ、「け、け、けよ、」ニテ、下二段活用ニ似タレドモ、上半ハ、「ける、ける、けれ、」トナリテ、異ナリ。是レモ、「る、れ、よ、」ヲ去レバ、五十音ノけノ一段ナレバ、下一段活用ト名ヅク。

第七一節
加行變格

○加行變格。變格活用ノ第一ハ、唯、一種ニテ、且、「く(來)」トイフ動詞一語ニ限ル。其活用ハ、「く、くる、くれ、こ、き、こよ、」トナリテ、其狀、稍、上二段活用ノいく(生)ニ似タレド、下半ノ「き、き、きよ、」トハナラデ、「こ、き、こよ、」トナルガ異ナリ。是レモ、「る、れ、よ、」ヲ去レバ、加行ノ音ノ「き、く、こ、」ニ活用スレバ、加行變格ノ活用ト名ヅケ、畧シテハ、加變(カヘン)トモイフ。

第七二節　佐行變格

○佐行變格。　變格ノ第二ナル活用モ、唯、一種ニテ、す(爲)ト、おはす(御坐)ト、ノ二語ニ限ル。　此ノ活用ノ狀ハ、「す、する、すれ、せ、し、せよ、」ト、ナリテ、下二段活用ノまかす(任)ニ似タレド、下半ノ、「せ、し、せよ、」ニテ、「せ、せ、せよ、」ナラヌガ、異ナリ。　此ノ活用モ、「る、れ、よ、」ヲ除ケバ、佐行ノ音ノ、「し、す、せ、」ニ活用スレバ、佐行變格ト名ヅケ、畧シテハ、佐變(サヘン)ト云フ。

第七三節

但シ、す(爲)ハ、名詞(漢語ニモ)ニ添ヒテ熟語トナル「アリテ、ソレヲ一動詞ト見ルトキハ、此ノ活用ノ語、甚ダ多シ。「つみす、(罪)くみす、(與)たゝろす、(心)なみす、(無)おもんず、(重)ほゝつす、(欲)げす、(解)おうず、(困)けみす、(閲)ごらうず、(御覽)ごうず、(同)そんず、(存)ノ如シ。(す)ヲ濁ルハ、音便ナリ、)

第七四節

又、「かの元の國より、迎へに、人々參(マヰ)で來(コ)んず。」(竹取物語)さる所へまからんず

るも、いみじく侍らず。」(同)ナド用ヰタルモ、「來むとす、」、まからむとす、」ヲ約メテ、音便ニ濁ルニテ、佐變ノ活用ナリ。

第七五節　奈行變格

○奈行變格。　變格ノ第三ノ活用モ、唯、一種ニテ、いぬ(往)、たぬ(死)ノ二語アルノミ。　其活用ハ、「ぬ、ぬる、ぬれ、な、に、ね、」ト、ナリテ、上半ハ、上二段、下二段、等ノ活用ニ似タレド、下半ノ口調ハ、四段活用ニ似タリ。　コレヲ、奈行變格ト名ヅケ、畧シテハ、奈變(ナヘン)トモイフ。

第七六節　良行變格

○良行變格。　此ノ活用モ、唯、一種ニテ、あり(有)、をり(居)、はべり(侍)、いまそかり(又、いますかり)(在)ノ四語ニ限ル。　其語尾ノ活用ハ、「り、る、れ、ら、り、れ、」ト、ナリテ、其重複ノ音ヲ去レバ、「り、る、れ、ら、」ト活用シテ、良行四段活用ナルさる(去)ニ似タレド、其第一活用ニ於テ、さる(去)ハ、るノ音ナレド、此ノ活用ナルハ、りナルガ異ナリ。

因テ、此活用ヲ、良行變格ト名ヅケ、畧シテハ、良變(ラヘン)トモイヒ、或ハ、

此活用ニ屬スル二語ヲ採リテ、直ニ、「あり、をり、」ノ活用、トモイフ。又、後ノ助動詞ノ中ナル、「なり、」「せり、」「けり、」「めり、」等、其第一活用ノ、「り」ノ音ニ終ルモノハ、共ニ、此ノ活用ニ同ジ、尚、後ニイフベシ。

○以上變格活用ハ、四類、各、一種、合ハセテ、九語ナリ、アラユル動詞ノ中ニテ、變格ニ活用スルハ、僅ニ、此ノ九語ナリ、ト知ルベシ。

第七七節

○凡ソ、我國ノ動詞ハ、其第一活用、即チ、本體ノ、宇ノ段ノ音ナルヲ通則トシ、之ニ外ル、ハ、唯、良行變格ノ伊ノ段ノ音ナル「り」ニ終ルアルノミ。（第一表ノ第一活用ノ緯ヲ通覽セヨ。）

第七八節

○又、アラユル動詞ノ語尾ハ、スベテ、五十音圖ニ照シテ、同ジ行ノ音ニテ活用シテ、他ノ行ノ音ニハ活用セヌヲ、通則トス。

第七九節

○法。語尾ノ活用ニ因リテ、動詞ノ語氣ニ、種々ノ態度ヲ生ズ、コレヲ法トイフ。其法ニ、七樣アリ。

法

第一　終止法。（終止言、截斷言、斷止段、直說法）

第二　終止法。（連體言）

第三　終止法。（已然言、已然段）

（二）連體法。（連體言、續詞段）

（三）不定法。（將然言、未然言）

（四）中止法。（連用言）

（五）連用法。（連用言、續言段）

（六）名詞法。（假體言）

（七）命令法。（希求言）

今、左ニ、正格活用中ノ四類ヨリ、各、一語ヅヽ、出シテ、七樣ノ法ヲ說キ明スベシ、其他ノ活用ナルハ、準ヘテ知レ。

第八〇節

○終止法。動作ヲ、單純ニ言ヒテ、文章ノ終止トスル法ニシテ、

終止法

第一活用ヲ用ヰル、コレヲ動詞ノ本體トス。例ヘバ、

書を讀む。　事を勤む。　花、落つ。　月を見る。

第一終止法

尋常、文ヲ結ブキハ、スベテ、第一活用ヲ用ヰルヿ、此ノ如シ、コレヲ第一終止法トス。

第八一節

第二終止法

然レモ、若シ、動詞ノ上ニ、豆爾乎波ノぞ、なむ、や、か、ノ加ハレルキハ、第二活用ヲ用ヰテ結ブヲ、通則トス、コレヲ、第二終止法トス。

書をぞ讀む。　事をぞ勤むる。　花ぞ、落つる。　月をぞ見る。

書をなむ讀む。　事をなむ勤むる。　花なむ、落つる。　月をなむ見る。

書をや讀む。　事をや勤むる。　花や、落つる。　月をや見る。

何をか讀む。　何をか勤むる。　何か、落つる。　何をか見る

第八二節

第三終止法

又、或ハ、豆爾乎波ノおそノ加ハレルキハ、第三活用ヲ用ヰルヲ、通則トス、コレヲ、第三終止法トス。例ヘバ、

書をおそ讀め。　事をこそ勤むれ。　花おそ、落つれ。　月をおそ見れ。

第八三節

連體法

右ノ三種ノ終止法ノ事ハ、後ノ文章篇ニ於テ、委シク說クベシ。

㊀連體法。　他ノ名詞(體言)ノ上ニ連リテ、其名詞ノ性質狀態等ヲ形容スル法ニシテ、第二活用ヲ用ヰル。(連體)トハ、體言ニ連ルトイフ意ナリ、)例ヘバ、

我が讀む書。　人の勤むる事。　花の落つる時。　月を見る人。

或ハ、獨立ニモ用ヰテ、

讀む書。　勤むる人。　落つる花。　見る月。

第八四節

此ノ法ハ、其下ニアルベキ名詞ヲ含ミテ、直ニ、名詞ノ如ク用ヰラルヽヿアリ。

讀む(事)と、書く(事)とを學ぶ。　人の勤むる(狀)に倣ふ。

花の開く(頃)より、落つる(頃)まで、見る(事)を好まず。

第八五節 不定法

○不定法。動詞ノ第四活用ヲ用ヰテ、他ノ助動詞、且爾乎波、等ニ連續セシメムガ爲ノ一法ナリ、其用、定マラズ、故ニ、不定法トイフ。其用法、意義、共ニ、後ノ助動詞、且爾乎波、ノ條ニ說クベシ。（第四表ヲモ參見セヨ。）

第八六節 中止法

○中止法。此ノ法ハ、文ノ中間ニテ、中止シ、即チ、其意ヲ、暫シ言止シ置キテ、末ニアル他ノ動詞ノ法ニ照應シテ、其法ノ意ニ從フモノナリ、第五活用ヲ用ヰル。例ヘバ、

書を讀み、字を記す。　事を勤め、功を成す。

花、落ち、鳥鳴く。　月を見、故郷を懷ふ。

コレヲ、句毎ニ分チテ言ハヾ、「書を讀む、」又、「字を記す、」「事を勤む、」又、「功を成す、」ナド、各自ニ、終止トスベキヲ、暫シ「讀み」「勤め」ト言止シ置キテ、末ノ「記す、」「成す、」等ノ動詞ニ照應シテ、終止ノ意ヲ終フ。

第八七節

此ノ法、數語、連用スルヿアリ、數語ヲ隔テ、照應スルヿアリ。而シテ、スベテ、末ノ照應スベキ語ノ意ニ從フ。例ヘバ、

學を務め、（務む、又、）業を習ひ、（習ふ、又、）公益を廣め、（廣む、又、）世務を開く。身を立て、（たる）道を行ひ、（たる）名を後世に揚げたる人。夙に起き、（て）夜に寐ねて、財に富み、（たれば）且、學に長けたれば、

第八八節 連用法

○連用法。他ノ動詞（用言）ニ連リテ、熟語トナル法ニテ、第五活用ヲ用ヰル。（連用）トハ、他ノ用言ニ連ルトイフ意ナリ。）例ヘバ、「讀む」ト、「果つ」ト、連ナルトキ、「讀む果つ、」トハナラデ、「讀み果つ、」トナルガ如シ。

讀み果つ。　勤め行ふ。　落ち入る。　見返る。

又、稀ニ、形容詞ト連ナルヿアリ。

讀み好し。勤め難し。落ち易し。見苦し。

第八九節

但シ、佐行變格ノす(爲)ト、良行變格ノあり(有)トハ、連用法ヲ承ケズ。例ヘバ、「釣りす、狩りす、」喜びあり、」隔てあり、」ナド連ルキハ、上ナルハ、名詞法ニテ、「釣りをす、狩りをす、」喜びのある、」隔てのある、」ノ意トナル。

第九〇節
名詞法

○名詞法。動詞ノ、變ジテ名詞トナル法ニテ、第五活用ヲ用ヰル。例ヘバ、

讀みを覺ゆ。勤めを怠る。落ちを拾ふ。花見に行く。

第九一節
命令法

○命令法。他ニ、動作ヲ命ジ、又ハ、請ヒ願フ意ヲイフ法ニテ、第六活用ヲ用ヰル。例ヘバ、

書を讀め。業を勤めよ。花、落ちよ。月を見よ。

此ノ法、四段活用、奈行變格、良行變格、ノ外ハ、皆、末ニ、よ、ノ音アリ。

第二表　形容詞ノ語尾活用……法

	語根	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用
志幾活用	(善)よ	よし	よき	よけれ	よく
志志幾活用	(悪)あし	あし	あしき	あしけれ	あしく

第一終止法　第二終止法　第三終止法　連體法　中止法　副詞法

舊圖ニハ、「よく」ト「あしく」トヲ、各二段ニ重出セシメタレド、今ハ併セタリ、說、別記ニアリ。

○形容詞

形容詞

第九二節　形容詞(又、形狀言)ハ、事物ノ狀態、性質、情意、等ヲ形容シテイフ語ナリ。例ヘバ「山、高シ。」「海、深シ。」ノ「高シ、「深シ」ハ、狀態ヲ形容シ、「是れ、善し。」「彼れ、惡し。」ノ「善し、「惡し」ハ、性質ヲ形容シ、「逢ふは、嬉し。」「別るゝは、悲し。」ノ「嬉し、「悲し」ハ、情意ヲ形容スルガ如シ、因テ形容詞トイフ。

第九三節　○活用。形容詞モ、動詞ノ如ク、語尾ニ、活用アリ、法アリ。但、其活用ノ狀、甚ダ動詞ニ異ナリテ、二類ニ分ル。

第一、志幾(シキ)活用。一種、

第二、志志幾活用。一種、

○形容詞

第九二節　形容詞

形容詞(又、形狀言)ハ、事物ノ狀態、性質、情意、等ヲ形容シテイフ語ナリ。例ヘバ、「山、高シ。」「海、深シ。」ノ「高シ、「深シ」ハ、狀態ヲ形容シ、「是れ、善シ。」「彼れ、惡シ。」ノ「善シ、「惡シ」ハ、性質ヲ形容シ、「逢ふは、嬉シ。」「別るゝは、悲シ。」ノ「嬉シ、「悲シ」ハ、情意ヲ形容スルガ如シ、因テ形容詞トイフ。

第九三節

○活用。形容詞モ、動詞ノ如ク、語尾ニ、活用アリ、法アリ。但、其活用ノ狀、甚ダ動詞ニ異ナリテ、二類ニ分ル。

第一、志幾(シキ)活用。一種、

第二、志志幾(シシキ)活用。一種、

第九四節
志幾活用

○志幾活用。　此ノ活用ハ、第二表ニ示セルガ如ク、唯、一種ニテ、其語尾ノミヲ唱フレバ「し、き、けれ、く、」ト活用ス、因テ、其初ノ二活用ヲ採リテ、志幾活用ト名ヅク。

第九五節
志志幾活用

○志志幾活用。　此ノ活用モ、表ニ示セルガ如ク、唯、一種ニテ、其語尾ハ「し、しき、しけれ、しく、」ト活用ス。亦、其初ノ二活用ヲ採リテ、志々幾活用ト名ヅク。

第九六節

○法。　形容詞ノ法ハ、動詞ノ法ト、相似テ、稍、異ナリ。不定法、連用法、名詞法、命令法、無クシテ、別ニ、副詞法アリ。

(一)終止法。三種、　(二)連體法。
(三)中止法。(連用言)　(四)副詞法。(連用言)

左ニ形容詞ノ四樣ノ法ヲ、大畧ニ說カム。ソノ動詞ノ法ト同ジキモノハ、相準ヘテ知ルベシ。(第二表、參見、)

第九七節
終止法

○終止法。　文章ノ末ヲ結ブ法ニテ、第一活用ヲ用ヰル、コレヲ形容詞ノ本體トス。例ヘバ、

心、善し。　名、惡し。

コレヲ、第一終止法トス。

若シ、又、上ニ、豆爾乎波ノ「ぞ、」なむ、や、か、」又ハ「こそ、」ノアルトキハ、第二活用、又ハ、第三活用ヲ用ヰテ、第二終止法、第三終止法、トスル「、動詞ノ例ノ如シ。例ヘバ、

心ぞ、善き。　心なむ、善き。
名ぞ、惡しき。　名なむ、惡しき。
心や、善き。　心か、善き。
名や、惡しき。　名か、惡しき。
心こそ、善けれ。

第三活用　第二活用

名こそ、悪しけれ。

第九九節　連體法

○連體法。他ノ名詞(體言)ノ上ニ連ル法ニテ、第二活用ヲ用ヰル。

心の善き人。　名の悪しき者。

或ハ獨立ニモ用ヰテ、

善き心。　悪しき名。

第一〇〇節

又、下ニアルベキ名詞ヲ含ミテ、直ニ、名詞ノ如ク用ヰルコトモアリ。

善き(物)を取る。　悪しき(物)を捨つ。

第一〇一節　中止法

○中止法。文章ノ中間ニテ、中止シテ、末ノ語ノ法ニ照應スルヿ、動詞ノ中止法ニ同ジ、但シ、第四活用ヲ用ヰル。

性質、善く、品行、修まる。

心、悪しく、行ひ、卑し。

是レモ、句毎ニ別タバ、「性質、善し。」品行、修まる。」心、悪し。」行ひ、卑し。」トイフベク、或ハ、「品行、修まり、性質、善し。」行ひ、卑しく、心、悪し。」トモイフベシ。

第一〇二節

數語、相連リ、又、數語ヲ隔テヽ、他ノ種々ノ語ニ照應スルヿアルモ、動詞ノ中止法ニ同ジ。例ヘバ、

心、善く、(善し、又)行ひ、正しく、(正し、又)功も高し。

丈、高く、(高き人)骨、逞しき人。

幅、廣く、(ければ)丈、長ければ、

第一〇三節　副詞法

○副詞法。形容詞ノ、變ジテ副詞トナルモノナリ。

善く改まる。　悪しく變る。

全く無し。　甚しく寒し。

第一〇四節　○副詞法ハ、良變ノ動詞ノ「あり」ト連リテ、「善くあり」、惡しくある、」善くあらむ、無くあれ、」ナド用ヰラルヽトキ、「く」ト「あ」ト約マリテ、「よかり」、あしかる、」よからむ、」なかれ、」ナドトナルヿ、常ナリ。

第一〇五節　其語尾ノ活用ハ、粗「あり」ニ同ジ。

第一〇六節　又、其「善からむ」、無からむ」ナドノ、更ニ約マリテ、「善けむ」、無けむ」、ナドヽナルヿモアリ。

語根　○語根。「志幾活用」ニテハ、其第一活用ノ「し」ヲ去テタルモノヲ語根トシ、「志々幾活用」ニテハ、其第一活用ヲ、直チニ語根ト見ルナリ。

第一〇七節　語根ニ、接尾語ノ「み」、「げ」、「さ」ヲ添フレバ、名詞トナル。

高み。深み。重げ。惡げ。善さ。遠さ。

嬉しげ。樂しげ。惡しさ。悲しさ。

○助動詞

第一〇八節　助動詞

助動詞ハ、動詞ノ活用ノ、其意ヲ盡サヾルヲ助ケムガ爲ニ、其下ニ付キテ、更ニ、種々ノ意義ヲ添フル語ナリ。例ヘバ、「行き、たり、」眠り、ぬ、」語らず、」言はむ、」打たむ、」ナドノ「たり、」ぬ、」ず、」む、」むず、」ノ如シ。又、他ノ助動詞ノ下ニ付クコトモアリ、「行き、たり、き、」打ため、らる、」ナドノ「き、」らる、」ノ如シ。

又、名詞、形容詞、副詞、ニモ付キ、稀ニハ、豆爾乎波、ニ付クモノモアリ、例ヘバ、「月なり、」花なり、」善きなり、」惡しきなり、」連體法ヲ、名詞トシテナリ、父たり、」子たり、」殿造せり、」時雨せり、」強くせり、」詳にせり、」衣笠にせり、」山のごとし、」聞くがごとし、」ナドノ「なり、」たり、」

せり、」ごとし、」ノ如シ。

○助動詞ハ、其形、多クハ短小ナレモ、亦、語尾ニ、活用アリ、法アリテ、文ノ末ヲ結ブ。而シテ、其活用ト法トノ狀ハ、動詞ニ似タルアリ、形容詞ニ似タルアリ。其數、凡ソ、二十七アリ、第三表ニ載セテ、其意義ト活用ト法トノ狀ヲ示セリ。其活用ト法トノ趣ハ、畧、動詞、形容詞、ノトニ異ナラザレバ、名稱ノ、相同ジキモノハ、相準ヘテ知ルベシ。但シ、其意義ハ、次ニ、逐條ニ詳說スベシ。

○又、動詞ト助動詞ト連續シ、助動詞ト助動詞ト連續スル法則ハ、第四、五、六、七表ニ就キテ知ルベシ。

第一〇九節　能相、所相

○所相ノ助動詞。「押す、」「報ゆ、」「受く、」ナドハ、我ガ能クスル動作ナリ。然ルニ、他ノ、此ノ動作ヲ起シテ、我レコレヲ受クルトキハ、「る、」又ハ「らる」トイフ助動詞ヲ用ヰテ「押さ、る、」「報い、らる、」「受け、ら

る、」ナドイフ。(漢字ニテハ、「被」押、「所」報、」ナド、)我ガ能クスル動作ヲ、能相、又ハ、働掛トイヒ、之ニ對シテ、我ガ受クル動作ヲ、所相、又ハ、受身トイフ。

第一一〇節

(1)る。　上ノ二語、所相ノ意ヲイフ「、相同ジク、共ニ、諸動

(2)らる。　詞ノ第四活用ニ連ル。但シ、「る」ハ、四段活用ト、奈變ト、良變ト、ニ連リ、「らる」ハ、其餘ノ諸活用ニ連ル「、第五表ニ示セルガ如シ。

第一一一節

所相ニハ「母、子に泣かる。」我、他に恩を報いらる。」ノ如ク、「子に、」他に、」ナドイフ標準ノ語ヲ要ス。

「言はれ侍り、」報いられ候ふ、」ナドハ、連用法ナリ。「西光が切られの事、」(平家)ことはれ(四)となる、」其謂はれ、無きにあらず、」ナドハ、名詞法ナリ。

第一一二節　勢相

○勢相ノ助動詞。「押す、」「報ゆ、」「受く、」ナドイフ動作ヲ、更ニ、己ガ力、能ク爲スニ足ル意ニイフトキハ、亦「る、」又ハ「らる」ヲ用ヰテ「押さ、る、」「報い、らる、」「受け、らる、」ナドイフ。其意ハ「押すことを得、」「報ゆることを得、」ト言ハムガ如シ、コレヲ、勢相ノ助動詞トス。(漢字ニテハ、「得押、」「可報、」「能受、」ナド)

第一一三節　自然相　自発相

(3) る。　上ノ二語、共ニ、勢相ノ意ヲイヒ、而シテ、諸動詞ノ(4) らる。　諸活用ニ連ル規定ハ、前條ノ所相ノ「る、」「らる、」ニ同シ。(第五表ヲ見ヨ、)　然レトモ、所相ニハ、「何に」トイフ標準ノ語ヲ要スレトモ、勢相ニハ、要セズ、是レ、異ナル所ナリ。(第一一一節、參見、)

第一一四節　勢相一轉　自発相

又、勢相ノ意ヨリ轉ジテ、唯、動作ノ、自ラ起リテ、遏メラレヌガ如キニイフ「アリ。例ヘバ「昔、懷ば、る、」「然、思は、る、」ひぐらしの、鳴く夕暮は、立ち待たれ、つゝ」(古今、十五)待たるゝものは、鶯の聲、(拾遺、

第一一五節　使役相

○使役相ノ助動詞。他ヲ使役シテ「押す、」「報ゆ、」「受く、」ナドイフ動作ヲ爲サシムルニハ、「す、」「さす、」「ゐむ、」等ノ助動詞ヲ用ヰテ、「押さ、す、」「報い、さす、」「受け、ゐむ、」ナドイフ、(漢字ニテハ、「爲押、」「爲報、」「令受、」「使押、」ナド、)此ノ「す、」「さす、」「ゐむ、」ヲ、使役相ノ助動詞トス。

(5) す。　上ノ三語ノ意、相異ナラズ、共ニ、動詞ノ第四活用ニ連ル。但シ、「ゐむ、」ハ、アラユル動詞ニ連レトモ、「す、」「さす、」ハ、其餘

(6) さす。

(7) ゐむ。　ハ、四段活用ト、奈變ト、良變ト、ニ連リ、「さす、」ハ、其餘ニ連ル。第五表ノ如シ。

第一一六節

自動詞モ、使役相トナルトキハ、略、他動(即チ、使役)ノ意トナル、「母、子を眠らす。」「騎兵、馬を走らす。」「父、子をして、學校ニ入らゐむ。」ノ如シ。

第一一七節

他動詞ヲ、使役相トスルトキハ、「甲、乙に、物を取らす。」「教師、生徒に、課

一筆を取れば物書かゐれ、(徒然草)行末のみ案ぜらるれて、」ノ如シ。

本節に有り

第一一八節

業を受けさす。」頼朝、義経をして、義仲を攻めしむ。」ノ如ク、「乙に、」生徒に、」義経をして、」ナドイフ標準ノ語ヲ要ス。

「受けさせ給ふ、」書かしめ畢んぬ、」ナド用ヰルハ、連用法ナリ。

使役相ニ、所相ヲ連ヌレバ、亦、能相、所相ヲ成ス。「行かしむ、」(使行)

第一一九節

敬相

撃たしむ、」(使撃)ハ、能相ナリ「行かしめらる、」(被使行)「撃たしめらる、」(被使撃)ハ、所相ナリ(以上ノ「らる」ハ、勢相ニモ適用スベシ。)又、所相ニ、使役相ヲ連ヌルトキハ、「撃たれしむ、」(使被撃)トモナル。

凡ソ、右等ノ用法ハ、第七表ノ、助動詞ト助動詞トノ連續圖ニ據リテ知ルベシ、各助動詞、互ニ、連用法ヲ以テ、相重疊ス、幾語、重疊ストモ、個々ニ分解シテ、語毎ニ、固有ノ意ヲ求メバ、解セラレム。

○敬相。　勢相、使役相、ノ助動詞ハ、全ク其意義ヲ變ジテ、他ノ動作ヲ敬ヒ言フ語トナルヿアリ、コレヲ、敬相、又、敬語トイフ。而シテ、使役ノ方ハ、大抵、給ふ、おはす、」ナドイフ語ト、連ヲテ用ヰ、且、斯ク變ズルトキハ、必シモ使役相ニ要スル標準ノ語ヲ要セズ。(第一一七節ヲ見ヨ。)例ヘバ、勢相ナルニハ、「君も、殊に喜ばれて、」釋尊の、目連に教へらるゝやうは、」ナドイヒ、使役ナルニハ、「琵琶を、善く彈かせ給へど、」帝、かくれさせおはしまし、」位に即かしめ給ふ。」只今の北野の宮と申して、云々。おほやけも、行幸せしめ給ふ。」(大鏡)令聽門下祇候給。」(東鑑)ナドイフガ如シ。是等ハ、「喜ぶ、」教ふ、」彈く、」かくる、」即く、」行幸す、」聽す、」ノ動作ヲ敬ヒイフマデナリ、書狀ノ文ニ、「被遊、」被下、」ナドイフモ、是レナリ。又、使役ニ、勢相ヲ重ネテ用ヰルヿアリ、一層重キ敬語ナリ。「書かせらる、」受けさせら重ク敬ヒイフノミ。

「書狀文ニ、「被爲書、」被爲受、」ナド、)是レモ、「書く、」受く、」ヲ

第一二〇節

又「人々に、齋(イツ)かれ、させ給ひ、御馬より落ちさせ(敬相)給ひ、御首取ら、れ、させ給ふ。」(盛衰記、以仁王)あはや、法皇の流さ、れ、させ、おはしますぞや。」(平家物語、三)ナドハ、上ノ一語ハ、眞ノ所相ニテ、下ハ、皆、敬相ナリ。　又「上東門院、云々、人々に、歌、詠(ヨ)ま、せ、させ給ひける時、」(玉葉、五)「伸正が女、皇后宮に、始めて參りたりけるに、琴(コト)彈(ヒ)くと聞かせ(敬相)給ひて、彈(ヒ)か、せ、させ給ひければ、」(金葉、九)御笛賜(タマ)びて、吹か、せ、られける。」(宇治、十)ナドハ、上ハ、眞ノ使役相ニテ、下ハ敬相ナリ。

第一二一節

○指定ノ助動詞。　次ニ擧グル「なり、」「たり、」「べし、」等ハ、事物ヲ指シ定ムル意アレバ、指定ノ助動詞トス。

指定助動詞

第一二二節

(8)　なり。　指定解說スル語ニテ、語原ハ「に、あり、」ノ約ナルベク、意義ハ、「にて、あり」ナリ。　此ノ語、動詞ニ連ルキハ、其第二活用ニ連ルヲ則トス。　例ヘバ、「押すなり、」「報ゆるなり、」「受くるなり、」「爲るなり、」ノ如シ。(後ノ詠歎ノ「なり」ト異ナリ、)

此語、又、獨立動詞ノ如ク、直ニ、名詞、又ハ、副詞、豆爾乎波、ニモ伴ヒテ、指定解說ノ意ヲイフ、「月なり、」「花なり、」「我れなり、」「人なり、」「宜(ソベ)なり、」「これば、かりなり、」「それのみなり、」ノ如シ。　又、形容詞ノ第二活用ニモ連ル、「善きなり、」「惡しきなり、」ノ如シ。

第一二三節

(9)　たり。　語原ハ「と、あり、」ノ約ニテ、意義ハ亦「にて、あり、」ト指定スル語ナリ。　此ノ語ハ、名詞ノ下ニノミ付キテ、動詞ニハ付カズ、例ヘバ、「あくれば、五日のあかつきに、兄(セウト)人たる人、外より來て、」(蜻蛉日記、下ノ下)住みとげむ、庵たるべくも、見えなくに、」(六帖、物名)其他、「父たり、」「子たる、」「君たり、」「臣たる、」ナド、常ニ用ヰル。(漢字ニテハ、「爲父、」「爲子、」ナド、)　又、「峨々たり、」「寂莫たる、」ナドイフモ、「と、あり、」ノ約ニテ、コレニ同ジ。(後ノ半過去ノ「たり」ト異ナリ、)

第一二四節　(21) べし。　心ニ推シ量リテ指定スル意ノ語ナリ。例ヘバ、「斯くあるべし、」「我、行くべし、」ノ如シ。(漢字ニテハ、「可」有、「可」行、ナド、)又、強ク指定シテ、命令スル意ヲモナス、「疾く行くべし、」「速に來べし、」ノ如シ。此ノ語ハ、諸動詞ノ第一活用ニ連ルヲ規定トスレド、良變ニノミハ、其第二活用ニ連ル。

第一二五節　○打消ノ助動詞。「押す、」「報ゆ、」「受く、」ナドハ、動作ヲ、正面ニ說クナリ、コレヲ、反面ヨリ說キテ打消スニハ、「押さず、」「報ゆまじ、」「受けじ、」ナド用ヰル。此ノ「ず、」「まじ、」「じ、」等ヲ、打消ノ助動詞トス。

打消助動詞

第一二六節　(10) ず。動作ヲ、ソノマヽニ打消ス語ナリ、「押さず、」「報いず、」ノ如シ。(漢字ニテハ、「不」押、「不」報、ナド、)　諸動詞ノ第四活用ニ連ル。又、「絶えず行く、」「飽かず思ふ、」「筑波の山を、戀ひずあらめかも。」(万葉、二十)ナド用ヰルハ、連用法ナリ、「親知らず、」「月足らず、」ナドハ、名詞法ナリ。又「問はず語、」「知らず顔、」ナド、名詞ト熟語トモナル。

第一二七節　此ノ條ノ「ず」ト、動詞ノ「あり」ト、約マリテ、「ざり」トナル「常ナリ、」「押さざる、」「報いざる」ナドアルハ、「押さずある、」「報いずある」ナリ。

第一二八節　(23) まじ。推シ量リテ打消ス語ニテ、「ず」ノ豫定ナリ、「押すまじ、」「報ゆまじ、」ノ如シ。此ノ語、諸動詞ノ第一活用ニ連リ、唯、良變ニノミハ、其第二活用ニ連ル。

第一二九節　(24) じ。前條ノ「まじ」ニ同ジクシテ、其意、稍強キガ如シ、而シテ、諸動詞ノ第四活用ニ連ル、「押さじ、」「報いじ、」「受けじ、」ノ如シ。

第一三〇節　○過去、未來、ノ助動詞。「押す、」「報ゆ」ハ、其動作ノ最中ナルニイフ。

時　扱、其動作ヲ、既往ニ就キテイフトキハ、「押したり、」「報いき、」ナドイヒ、未然ニイフトキハ、「押さむ、」「報いむ、」ナドイフ。此ノ如キ動作ノ差違ヲ動詞ノ時トイヒテ、其差違、現在、過去、未來ノ三樣ニ分ル。

第一三二節　現在

現在。　現在トハ、現ニ、今、動作スルヲイフ、「押す、」「報ゆ、」「受く、」「着る、」ノ如シ。（以下、スベテ、第六表ト參照セヨ、）

第一三三節　半過去

過去。　過去ハ、更ニ、半過去ト過去ト、大過去ト、ノ三樣ニ分ル。

半過去ハ、動作ノ方ニ終リタルヲイフニテ、「つ、」「ぬ、」「たり、」ノ三助動詞ヲ用ヰル。　即チ、「押し、つ、」「押し、ぬ、」「押し、たり、」「報い、つ、」「報い、ぬ、」「報い、たり、」「受け、つ、」「受け、ぬ、」「受け、たり、」「着、つ、」「着、ぬ、」「着、たり、」ノ如シ。　此ノ「つ、」「ぬ、」「たり、」ノ意義、共ニ同ジ。

又、名詞、又ハ、副詞ニ添ヒテ、「罪せり、」「詳にせり、」ナド用ヰル助動詞アリ。　又、四段活用ノ動詞ノ「行く、」「押す、」ナドヲ、「行けり、」「押せり、」ナドト用ヰルヿアリ。　是等モ、共ニ、半過去ノ意義ヲ成ス、尙、後ニ言フベシ。

第一三三節　過去

過去ハ、動作ノ、過ギテ程歷シヲイフニテ、助動詞ノ「けり」ト「き」トヲ用ヰル。　即チ、「押し、けり、」「押し、き、」「報い、けり、」「報い、き、」ノ如シ。　此ノ「けり、」「き、」ノ意、共ニ同ジ。

第一三四節　大過去

大過去ハ、過去ヨリ一層程歷タリシヲイフニテ、半過去ト過去トノ助動詞ヲ重用ス。　即チ、半過去ノ「つ、」「ぬ、」「たり、」ノ第五活用ナル「て、」「に、」「たり」ニ、過去ノ「けり、」又ハ「き」ヲ重ネテ、「押し、て、」「けり、」「押し、に、」「けり、」「押し、たり、」「けり、」「押し、て、き、」「押し、に、き、」「押し、たり、き、」ノ如シ、而シテ、其意、何レモ同ジ。（他ハ、準ヘテ知ルベシ、）

第一三五節　未來

未來。　未來ハ、未ダ起ラザル動作ヲ、豫メイフニテ、助動詞ノ「む」ヲ用ヰル、「押さ、む、」「報い、む、」「受け、む、」「着、む、」ノ如シ。

第一三六節

又、半過去、過去、大過去、共ニ、其動作ハ、過去ニ屬スレド、未ダ分明ナラヌヰ、未來ニイフヿアリテ、亦、三樣ニ分ル。　即チ、

第一三七節

半過去ニテハ、「つ、」「ぬ、」「たり、」ノ第四活用ナル「て、」「な、」「たら、」ニ、未

第一三八節　來ノ「む」ヲ重ネテ「押し、て、む、」押し、な、む、」押し、たら、む、」報い、て、む、」報い、な、む、」報い、たら、む、」ナドイフ。

第一三九節　過去ノ「けり、き、」ニハ、別ニ、助動詞ノ「けむ」アリテ、「押し、けむ、」報い、けむ、」受け、けむ、」着、けむ、」ナド用ヰル。

第一四〇節　大過去ニテハ、「つ、」ぬ、」たり、」ノ第五活用ナル「て、」に、」たり」ニ、前ノ「けむ」ヲ重ネテ「押し、て、けむ、」押し、に、けむ、」押し、たり、けむ、」報い、て、けむ、」報い、に、けむ、」報い、たり、けむ、」ナドイフ。

第一四一節　(11)つ。　動作ノ果テヽ止マル意ヲイフ語ナリ、此ノ語、諸動詞ノ第五活用ニ連ル。

第一四二節　(12)ぬ。　動作ノ往キ畢レル意ヲイフ語ニテ、其意、畧、「つ」ニ同ジ。諸動詞ノ第五活用ニ連ナレド、奈變ノ「往に」死に」ニノミハ、連ナラズ。　命令法ハ「押しね」、受けね」、ナド用ヰルモノナリ。

第一四三節　(13)たり。　「て、あり、」ノ約マレルニテ、「て」ハ、前々條ノ「つ」ノ活用ナレバ、亦、動詞ノ第五活用ニ連ル。

第一四四節　(14)せり。　「爲てあり、」ノ意ニテ、「爲」トイフ動詞ノ、半過去ノ意ヲナス語ナリ。　此ノ語ハ、獨立動詞ノ如キ力アリテ、他ノ動詞ニハ付カズ。　例ヘバ、「蓋にせり、」(萬葉三)殿造せり、」(古今)團居せる夜は、」(同)野邊近く、家居しせれば、」(同)ナド用ヰ、其他「罪せり、」寇せり、」歎息せり、」勉强せり、」烈しくせり、」明にせり、」ナド用ヰル。

○又、一種ノ半過去アリ。　四段活用ノ動詞ノ「咲く、」指す、」勝つ、」等ヲ、常ニ「咲けり、」指せり、」勝てり、」ナド用ヰル、是等ノ意義ハ、「咲き、て、あり、」指し、て、あり、」勝ち、て、あり、」ナド解スベクシテ、其動作ヲ、半過去ニイフモノナリ。　此ノ語尾活用ヲ成スハ、四段活用ニ限リ、其活用ノ狀ハ、「畧、あり」ニ同ジ。

第一終止法。　連體法。　中止法。
第二終止法。　第三終止法。　不定法。　名詞法。　命令法。

第八表

第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第五活用	第六活用
咲けり	咲ける	咲けれ	咲けら	咲けり	咲けれ
指せり	指せる	指せれ	指せら	指せり	指せれ
勝てり	勝てる	勝てれ	勝てら	勝てり	勝てれ
思へり	思へる	思へれ	思へら	思へり	思へれ
澄めり	澄める	澄めれ	澄めら	澄めり	澄めれ
降れり	降れる	降れれ	降れら	降れり	降れれ

第一四五節　(15) けり。　過去ノ意ヲイヒテ、亦、諸動詞ノ第五活用ニ連ル。

第一四六節　此ノ語ハ、過去ノ意無クシテ、唯、語氣ニ、念ヲ推シテ言フ意ヲナスコトアリ、「秋ハ來にけり。」天つ星かと、あやまたれける。」(古今、五)ナドヲ、口語ニテ言ヘバ、「秋が來たわい。」まちがへられるわい。」ノ意ナリ。殊ニ、「心なりけり。」我が身なりける。」ナド、「なりけり」ト用ヰタルハ、唯、說明スル意ヲナス。

第一四七節　(25) き。　過去ノ意ヲイフ、常ニ、「き、し、しか、」ノ活用ト呼ビ、亦、動詞ノ第五活用ニ連ル。然ルニ、加變、佐變、ニテハ、「き、し、しか、」ノ三活用、相別レテ、其第四活用ニモ連ル異則アリ。(第四表、參見、)

第一四八節

	第四活用	第五活用
加變	來(コ)し　しか	來(キ)し　しか
佐變	爲(セ)し　しか	爲(シ)き

「來(キ)き、」「來(コ)き、」ノ例ナシ。
「爲(シ)し、」「爲(シ)しか、」「爲(セ)き、」ノ例ナシ。

「人ふるす、里を厭ひて、こしかごも、奈良の都も、うき名なりけり。」（古今、十八）都出でゝ「君に逢はむと、こしものを、」（土佐日記）きし方、行くする、思ひつゞけられて、」（總角）ノ如シ。

第一四九節

（16）む。　未來ノ意ヲ成ス。　諸動詞ノ第四活用ニツク、「行かむ、」「落ちむ、」「受けむ、」「見む、」ノ如シ。（漢字ニテハ、「將」行、「將」落、」ナド）

第一五〇節

（17）けむ。　過去ノ「けり、」「き、」ヲ未來ニイフ語ニテ、諸動詞ノ第五活用ニ連ル、「行きけむ、」「落ちけむ、」「受けけむ、」「見けむ、」ノ如シ。

第一五一節

○推量（スヰリヤウ）ノ助動詞。「らむ、」「めり、」「まし、」「らし、」等ハ、物ヲ推量スル意アリ、コレヲ推量ノ助動詞トス。

第一五二節

（18）らむ。　未然ヲ推量スル語ナリ、「押すらむ、」「受くらむ、」ノ如シ。此ノ語ハ、諸動詞ノ第一活用ニ連リ、唯、良變ニノミハ、其第二活用ニ連ル、「有るらむ、」「居（ヲ）るらむ、」ノ如シ。

第一五三節

（19）めり。　語原ハ、「見え」ト「あり」トノ約マレルニテ、事物ノ狀態、然（シカ）見ユ、ト推量スル意ヲイフ語ナリ。此ノ語ハ、諸動詞ノ第一活用ニ連ル、「立田川、もみぢ亂れて、流るめり。」（古今、五）あはれ今年の、秋も往ぬめり。」（千載、十六）浪の花、沖から咲きて、散り來（ク）めり。」（古今、十）ノ如シ。但シ、良變ニノミハ、「あるめり、」ノ如ク、其第二活用ニ連ル。

第一五四節

（26）まし。　未來ヲ推シ定メ、又ハ、然（シカ）セムトスル意ノ助動詞ニテ、動詞ノ第四活用ニ連ル、「押さまし、」「報いまし、」ノ如シ。

第一五五節

（27）らし。　輕ク推量スル語ナリ、「押すらし、」「報ゆらし、」ノ如シ。此ノ語、諸動詞ノ第一活用ニ連レド、良變ニノミハ、其第二活用ニ連ル、「あるらし、」「居（ヲ）るらし、」ノ如シ。

○詠歎ノ助動詞。

第一五六節　詠歎助動詞

(20) なり。　動作ヲ言ヒ終ヘタルニ、感情ヲ添フル語ナリ、動詞ノ第一活用ニ連ル、「秋風に、初雁がねぞ、聞ゆなる。」(古今、四)秋の野に、人まつ蟲の、聲爲なり。」(同、十四)藻刈舟、今ぞ渚に、來寄すなる。」(拾遺、八)谷の鶯、春を告ぐなり。」(堀川百首)ノ如シ。

○比況ノ助動詞。

第一五七節　比況助動詞

(22) ごとし。　比ブル意ヲイフ語ニテ、動詞、形容詞、助動詞、ノ第二活用ニ添ヒ、又、或ハ、亘爾乎波ノ「の、が、」ノ下ニモ用ヰル「、他ノ助動詞ト異ナリ、「世の中を、何に譬へむ、朝びらき、漕ぐなる舟の、痕なきごとし。」(萬葉、三)年月は、流るゝごとし。」(同、五)まことも君に、逢へりしごとし。」(同、十二)我がごとく、物や悲しき、時鳥、」(古今、十二)「山のごとき、海のごとく、斯くのごとき、聞くがごとく、空しきがごとし、」ノ如シ。(漢字ニテハ「如」山、如海、若斯、若聞、」ナド、)

○副詞

第一五八節

副詞ハ、動詞ニ副ヒ、或ハ、形容詞、又ハ、他ノ副詞ニモ副ヒテ、其意味ヲ種々ニ修飾スル語ナリ。

例ヘバ、「只管考ふ、」「暫し留る、」「甚だ高し、」「いと、遙に見ゆ、」ナドノ「只管」ハ、「考フル」狀態ヲイヒ、「暫し」ハ、「留ル」程ヲイヒ、「甚だ」ハ、「高キ」度ヲイヒ、「いと」ハ、「遙に」ノ距離ヲイヒテ、其意ヲ修飾スルガ如シ。

○「遙に、明に、靜に、」ナド「に」ニ終ル副詞ハ、動詞ノ「あり」ト連ルキ、「に」ト「あ」ト約マリテ、「遙なり、明なり、靜なり、」トナル「、常ナリ、而シテ、其語尾ノ活用ハ、畧「あり」ニ同ジ。

○名詞ヲ、副詞ニ用ヰル「アリ、「昔、男ありけり。」今日來ずば、今來むと、」一年過きて、」ノ如シ。　數詞ナルハ、「梨を、ひとつ取る、」盃

を、とを重ねて、「世の中、よろづ好し、」ノ如シ。又、名詞ノ下ニ「に」ヲ添ヘテモ用ヰル「常に、時に、誠に、日に、」ノ如シ。漢語ナルハ、「大抵成れり、」「一切知らず、」「終日勤む、」「再三問ふ、」ノ如シ。其下ニ、「に」ヲ添フルハ、「切に、別に、丁寧に、專一に、」ノ如シ。形容詞ノ副詞法モ、副詞ニ用ヰラル「善く改まる、」「惡しく考ふ、」「疾く走る、」「久しく止まる、」ノ如シ。

第一六一節

○「尙、暫し、待つ、」「夙に、早く、起く、」「嘗て、屢、見たり、」ナド重用スルハ、二ツノ副詞、共ニ、下ノ動詞ヲ修飾ス。

第一六二節

禁止ノ副詞

間ニ、他ノ語句ヲ隔テ、修飾スルアリ、「つらく、事の由を考ふるに、」「暫し、時の移るを待ちて、」ノ如シ。

○禁止ノ意ヲナス副詞ニテ、動詞ノ下ニ居ルモノアリ、「心、隔つな、」「色に出づな、」ノ如シ。此ノ「な」ハ、必ズ、動詞ノ第一活用ノ下ニ連ル、但シ、良變ニノミハ、第二活用ニテ、「あるな、」「居るな、」ナド連ル。

第一六三節

或ハ、「な」ヲ上ニ置キ、下ニ、「そ」トイフ語ヲ添ヘテ、中ニ動詞ヲ挾ミテ、禁止ノ意ヲ成スアリ、「な隔てそ、」「な出でそ、」「な行きそ、」ノ如シ。

接續詞

○接續詞

第一六四節

接續詞ハ、並ビタル同趣ノ文、又ハ、句ノ間ニ入リテ、上下ヲ續ギ合ハスル語ナリ、「山を越え、又、水を渉る、」「書を讀み、且、字を記す、」ノ如シ。

漢籍讀ニ用ヰルハ、「求之與抑與之與。」（論語、學而）秦歟、漢歟、將、近代歟。」（弔古戰場文）ナドアリ。書狀ノ文ニ、「尤、旁、但し、」「將又、」ナド用ヰルモ、是レナリ。

○動詞ヨリ來レルニハ、「及び、幷に、尋で、」ナドアリ、亦、漢籍讀ノ

用法ナリ。書狀ノ文ニ、「就テ、」「隨テ、」「依テ、」ナドモアリ。熟語ヲ用ヰルハ、「或は、」「斯くて、」「然して、」「(而)若しくは、」ノ如シ。

第一六五節　○豆爾乎波

豆爾乎波（テニヲハ）

豆爾乎波ハ、畧シテ、豆爾波トモイフ。「君が代は、千代に八千代に、さゞれ石の、いはほとなりて、苔のむすまで。」(古今、七)見わたせば、柳櫻を、こきまぜて、都ぞ春の、錦なりける。」(古今、一)ナドイフ歌ノ中ノ「が、」「は、」「に、」「の、」「と、」「て、」「まで、」「ば、」「を、」「ぞ、」ノ如キモノ、是レナリ。

豆爾乎波ハ、其形、多クハ、短小ニシテ、且、獨立シテハ、用ヲ成サズ。而シテ、言語ノ中間ニアリテ、上下ノ語ヲ承接連絡シ、互ニ呼應シテ、其ノ意ヲ通ジ、他語ノ方向ヲ示シ、意義ヲ導キ、自他ヲ區別シ、彼此ヲ分合シ、言語ノ位置、顚倒ストモ、其所在ニ就キテ、指示

ノ任ヲ盡スナド、關節ノ筋ノ如ク、門戸ノ樞ノ如シ。

○アラユル豆爾乎波ヲ、其用法ニ因リテ、三類ニ大別ス。

第一類。名詞ニノミ屬クモノ。

(1)が。の。　(2)の。が。つ。
(3)に。　(4)を。
(5)と。と。　(6)へ。
(7)より。より。から。　(8)まで。

第二類。種々ノ語ニ屬クモノ。

(9)は。ば。　(10)も。
(11)ぞ。なむ。なも。し。　(12)ぞ。
(13)だに。すら。　(14)さへ。
(15)のみ。ばかり。　(16)や。か。

第三類。動詞ニノミ屬クモノ。

(17)ば。　(18)と。とも。ど。ども。
(19)に。を。が。　(20)て。みて。さて。して。
(21)で。　(22)つゝ。

第一六七節　○第一類。此ノ類ノ豆爾波ハ、名詞ニノミ屬ク、コレヲ「名詞ノ豆爾波」ト稱スベシ。

第一六八節　(1)が。の。　共ニ、上ニハ、名詞ヲ承ケ、下ハ、動詞ニ係リ、其動作ヲ起ス名詞ヲ、特ニ擧ゲ示ス豆爾波ナリ。例ヘバ、

斯くと、誰がいふ。　我をば君が、思ひ隔つる。
稻葉そよぎて、秋風の吹く。　ゐぐるゝ空に、雁の鳴くなり。

○又、下、形容詞ニ係ルモアリ。

書見るが樂し。　智無きが多し。

第一六九節　(2)の。が。　共ニ、名詞ト名詞トノ關係ヲ示ス豆爾波ナリ、而シテ、其意義ニ、種々アリ。

(い)所有ノ意ヲ示スモノハ、「人の物、君が世、」ノ如シ。

第一七〇節　(ろ)二語ノ係屬ヲノミ示スモノハ、「櫻の花、梅が香、世の中、天が下、」ノ如シ。

第一七一節　(は)「に、ある、」なる、」ナドノ意ヲ成スハ、「葛城の高間の山、春日の三笠の山、越の白山、蝦夷が千島、」

第一七二節　(に)「といふ、」ナドノ意ヲ成スハ、「富士の山、佐渡が島、」

第一七三節　(ほ)「の如き、」ノ意ヲ成スハ、「塵泥の、數にもあらぬ、我故に、」(萬葉、十五)

第一七四節　昔物語のこゝちもする哉。」(手習)「花の顏、露の命、父が俤あり。」

第一七五節　○「つ。」「の」ニ似テ、上下ノ語ノ係屬ヲ示スモノナリ。然レ

ヒ、用法、古ク、且、慣用ニ局レル所アリテ、一般ニ用ヰ難シ。例ヘバ、「天つ風、國つ神、上つ毛野、下つ總、中つ國、外つ國、沖つ風、」ノ如シ。

第一七六節　(3)　に。　動詞ノ動作ノ移ルベキ名詞ヲ示ス豆爾波ナリ。

第一七七節　而シテ、其意義、用法、亦、種々アリ。

第一七八節　(い)相對スルモノヲ指スハ、「人に與ふ、師に問ふ、」ノ如シ。

第一七九節　(ろ)地位ヲ示スモノハ、「机に載す、都に住む、山に近し、水に遠し、」ノ如シ。(以上、常ニ、漢字ノ于、於、ヲ當ツ、)

第一八〇節　(は)差抑フル意ナル「と」ノ如キハ、「木、石に爲る。水を湯になす、」花を雪に見て、」ノ如シ。

(に)添フル意ナルハ、「月に叢雲、花に風、雨、尾花が風に、庭の月影、」(玉葉、四)ノ如シ。又、重用スル動詞ノ間ニ入リテ、「また」ノ意ヲナス、「降りに降る、」ゐさりにのみゐさる、」聞きに聞き、語りに語る、」

第一八一節　(ほ)「にて」ノ意ナルハ、「仁和の帝の、皇子におはしましける時、」(古今、七)丈夫に、あらましかばと、」道に聽きて、途に說く、」

第一八二節　(へ)「の爲に、」に因りて、」ナドノ意ナルハ、「淋しさに、宿を立出て、眺むれば、」(後拾遺、四)花見に行かむ、」人手に死ぬ、病に惱まさる、」人に擊たる、」ノ如シ。(第一一一節、參見)

第一八三節　(と)比ブル意ニテ、「より」ノ如キハ、「人に劣る、我に優る、昨日に增して、」ノ如シ。

第一八四節　(4)　を。　他動詞ノ動作ノ目的タル名詞ヲ示スモノナリ、「書を讀む、紙を裂く、」水を飲む、」ノ如シ。

第一八五節　○又、自動詞ニ係ルモノハ、其意義、異ナリ、「家を離る、境を出づ、」國を去る、」山を下る、」ナドハ、「より」ノ意、「路を行く、門を過ぐ、」家

を繞る、」ナドハ、其動作ノ行ハルヽ地位ヲ示スマデナリ。

(5) と。　差抑ヘテイフ意ノ豆爾波ニテ、其意、亦種種ナリ。

第一八六節　(い)指シ定ムル意ナルハ、「これと定む、それと思ふ、」ノ如シ。

第一八七節　(ろ)「とて」ノ意ナルハ、「暮ると明くと、目離れぬものを、梅の花、

第一八八節　いつのひとまに、うつろひぬらむ。」(古今、一)起くとは歎き、寐とは思ばむ。」(同、十一)ノ如シ。

第一八九節　(は)「と共に、」ノ意ナルハ、「能く、世と推し移る、」「我、汝と彼を訪はむ、ひとり見むより、人と見む、」ノ如シ。

第一九〇節　(に)「と化りて、」又ハ「の如く、」ナドノ意ナルハ、「雪と降る、」霜と消ゆ、」泣く涙、雨と降らなむ、」(古今、十六)月日のみ、流るゝ水と、早けれは、」(夫木、十八)ノ如シ。

第一九一節　(ほ)重用スル動詞ノ間ニ入テ、「また」ノ意ヲナスハ、「ありとある、」

第一九二節　秋風の、吹きと吹きぬる、」山の端に、入りと入りぬる、月なれば、」

第一九三節　○此ノ豆爾波ノ、動詞、形容詞、助動詞、ヲ承クルキハ、其終止法、或ハ、命令法等ノ、意ノ切ルヽ所ヲ承クルヲ通則トス、即チ、上ノ一句一文ヲ、名詞ト見ルナリ。

第一終止法ナルハ、「木の間より、風にまがひて、降る雪も、春來、といへば、花かとぞ見る。」(躬恒集)都出づ、とか、人の告げける。」(後拾遺八)憂し、と見し世ぞ、今は戀しき。」(新古今、十九)我落ちにき、と、人に語るな。」(古今、四)人目も草も、枯れぬ、と思へば、」(同、六)ノ如シ。

第一九四節　第二、第三終止法ナルハ、「來宿る人や、ある、と待つかな。」(後撰、三)春や疾き、花や遲き、と、聞きわかむ、」(古今、二)幾代か歴し、と、問はましものを。」(同、十七)それにぞあるなる、とは聞けど、」(伊勢物語)かくこそ思しか、と言ひけるを、」(同)共にこそ、花をも見め、と、待つ人

第一九五節　の、」(後撰、三)、命令法ナルハ、「誰れ見よ、と」、疾く行け、と」ノ如シ。

○　と。　此ノ「と」ハ、前項ノ「と」ト、指定スルガ如キ意ハ、相似タレド、用法、甚ダ異ニシテ、相並ブ同趣ノ語句ヲ接續スル「、接續詞ノ如シ。(漢字、與ノ字ニ當ル)而シテ、全ク、上ノ語ニ附着シテ、下ニ、更ニ、「名詞ノ豆爾波」ヲ履ム。「吹く風と、谷の水とし、なかりせば、みやまがくれの、花を見ましや。」(古今、二)白き鳥の、嘴と脚と赤きが、水の上に遊び、」(伊勢物語)流れ木と、立つ白波と、焼く鹽と、いづれかからき、わたつみの底。」(新古今、十八)　「鄒と魯と戰ふ、」月と花との遊び、」内と外とにあり、」かれとこれとを比べて、」京と難波と、へ行かむ、」

第一九六節　(6)　へ。　方向ヲ示ス豆爾波ナリ。例ヘバ、「前へ進む、」左へ向ふ、」ノ如シ。此ノ「へ」ハ、方向ヲ示スモノニテ、前ノ「に」ノ、地位ヲ示スモノト別ツ、「深草の里に住みはべりて、京へまうで來て、」(古今、詞)住む館より出でゝ、舟に乘るべき處へわたる。」(土佐日記)ナドノ如シ。

第一九七節　(7)　より。　から。　共ニ、二ツノ間ニ移リ行ク意ヲ示ス豆爾波ニテ、地位ニモ、時ニモイフ。(漢字、自、從、等ノ字ニ當ル)

第一九八節　「人より受く、」かなたより來る、」天より落つ、」それより程歴て。」

第一九九節　「今からの御もてなしの、おぼつかなう侍らむは、」(松風)我身からら、うき世の中と、なげきつゝ、」(古今、十八)明日からは、若菜摘まむと、」(新古今、一)

第二〇〇節　○　より。　是ハ、兩間ニ移ル意ヨリ轉ジテ、專ラ、相比ベテ科ヲイフモノナリ。

「かれより後る、」山より高し、」これより善し、」命より惜し、」紅葉、

紅於(ナリコリモ)二月花。」

第二〇一節 (8) まで。至リ及ブ意ノ豆爾波ナリ。(漢字、迄(マデ)ノ字ニ當ル)

「筑紫までまかる、都まで送る、行くさきの事まで、おぼし知らして、」

第二〇二節 第二類 ○第二類。此ノ類ノ豆爾波ハ、上ニ、各種ノ語ヲ承ケテ、其意ヲ、下ナル動詞、形容詞、助動詞ニ通ズ、其承クル所ノ語、一定セザレモ、亦、慣用ノ用法アリテ、妄ニ承クベキニアラズ。左ニ、其用例ヲ、若干掲グベシ。

第二〇三節 (9) は。事物ヲ、各自ニ差別スル意ノ豆爾波ナリ、(常ニ、漢字ノ者ヲ當ツ、)但シ、一ヲ擧ゲテ、其他ヲ曉ラシムルモアリ、次ナル「も」モ、然リ。

「人は去り、我は留る。」柳は緑に、花は紅なり。見るは善し、行きはせず、善きは取らむ、樂しくは思ふ、學ばむは好し、行かずはあらず、せずはあるべからず、取りては見む、」斯くまではなし、然(シカ)はあれど、いかゞはせむ、是よりは優る、我こそは見め、京へは行かむ、我のみはあり、花こは見む、」ノ如シ。

第二〇四節 ○ば。前項ノ「は」ヲ、音便ニテ、濁ルモノナリ。

「茶をば飲めど、酒をば飲まず、」これをば取らむ、かれをば捨てむ、行かずんばあらず、せずんばあるべからず、」ノ如シ。

第二〇五節 (10) も。同狀ノ事物ヲ并列スル意ノ豆爾波ニテ、接續詞ノ如シ。(漢字ノ亦ノ字ニ當ル)「我も行く、人も行く、」「行くもあり、歸るもあり、」行きもせず、歸りもすまじ、」長きもあり、短きもあり、」善くもあらず、悪しくもなし、」人をも身をも、恨みざらまし、」父とも思ひ、師とも仰ぐ、」寐ても思ふ、我にも許せ、」家へも

歸らず、東よりも來る、水だにも飲まず、ノ如シ。

第二〇六節

(11) ぞ。　なむ。　ある。　共ニ、多クノ中ニテ、一ッヲ指ス意ノ豆爾波ナリ。(「ぞ」ハ「其」ノ濁レルナリ。)

第二〇七節

此ノ「ぞ」、又ハ「なむ」「なも」ノ、文中ニアルトキハ、其末ヲ結ブ動詞、形容詞、助動詞ハ、第二終止法ヲ用ヰル。「花ぞ落つる。」「月ぞ澄める。」「行くぞ善き。」「早くぞ過ぐる、」「去年よりぞ見し、」ノ如シ。(「なむ」ノ例ハ、次ニ擧ゲム。)

第二〇八節

○「ぞ」ハ、又、指シ示ス意ニテ、文句ノ末ニ着クヿアリ、而シテ、動詞、形容詞、助動詞、ノ下ニ着クトキハ、其第二活用ニ着クヲ法トス。「命、生くるぞ、」「然(シカ)おぼゆるぞ、」「斯くするぞ、」「あるぞ、」「無きぞ、」「ありしぞ、」「あらぬぞ、」「書きつるぞ、」「讀みたるぞ、」

第二〇九節

○「なむ」ハ、「ぞ」ニ似テ、指ス意、稍緩シ。

第二一〇節

「柿本人麻呂なむ歌の聖(ヒジリ)なりける。」(古今、序)無きなむまされる、」

第二一一節

かくなむある、」「人をなむ恨むる、」文章篇ノ結法ノ條ニ委シ。

○「なも」ハ、「なむ」ニ同ジクテ、古シ、「神になもありける、」ノ如シ。

○し。　コレモ、指ス意アリテ、力アル豆爾波ナリ、但シ、用法、局スル所アリ、且、其ノ末ヲ結ブ動詞、形容詞、助動詞ノ終止法ニ關係ヲ及ボサズ。

第二一二節

「吹く風と、谷の水とし、なかりせば、」(古今、二)「神し知らなむ。」「花といしいへば、」「いつしかこのみ、待ちわたるべき、」「其謂はれ、なきにしもあらず。」「必ずしも、然らざらむ、」

(12) こそ。　多クヲ捨テ、一ッヲ取ル意ノ豆爾波ナリ。(常ニ、社ノ字ナド當ッ、)此ノ豆爾波ノ、文中ニアルトキハ、其末ヲ結ブ動詞、形容詞、助動詞ハ、第三終止法ヲ用ヰル。

「花こそ咲け、見るこそ善けれ、」斯くこそ思へ、「月をこそ見れ、」

尙、文章篇ノ結法ノ條ニ、詳ニイフベシ。

第二一三節 (13) だに。すら。二語、意、粗、同ジ、事物ノ輕キヲ擧ゲテ、其餘ノ重キヲ、言外ニ引證スル豆爾波ナリ。

第二一四節 「深山には、松の雪だに、消えなくに、都は野邊の、若菜摘みけり。」(古今、二) 露にだに、御笠といひし、宮城野の、木の下暗き、五月雨の頃。」(新千載、三) 糟糠にだに、飽くこと能はず、まして、美食をや。」

第二一五節 可以人而不如鳥乎。(大學) ノ如シ。

「言問はぬ、木尙妹と兄、ありとふを、たゞ獨子に、あるが苦しさ。」(萬葉、六) とけてすら、寐るほどもなき、五月雨を、寐覺がちにて、明かす頃かな。」(曾丹集) 「我躬不閱、遑恤我後。」(詩經、小弁) 亂世にてすら然り、まして、太平の時に於てをや。」

第二一六節 (14) さへ。重キガ上ニ、又、添ヒ加ハル意ヲイフ豆爾波ニテ、「だに」トハ、引證スル輕重ノ主客ニ、交互ノ差アリ。

「橘は、實さへ花さへ、その葉さへ、枝に霜降れど、彌常葉の樹。」(萬葉、六) 梓弓、おして春雨、けふ降りぬ、あすさへ降らば、若菜摘みてむ。」(古今、一) 月をだに、あかず思ひて、寐ぬものを、郭鳥さへ、鳴きあきる哉。」(六帖)

第二一七節 (15) のみ。ばかり。一アリテ、二無キ意ヲイフ豆爾波ニテ、二語ノ意、粗、同ジ。

「我れのみ知る、」思ふのみなり、「善きのみ取る、」悲しくのみ思ふ、」

第二一八節 斯くのみあらば、「家にのみ居て、」人をのみ思ふ、」

「身につもる、年の暮にもまさりけり、けふばかりなる、春の惜しさは。」(新拾遺、十八) 今こむと、いひしばかりに、長月の、有明の月

を、待ちいでつるかな。」（古今、十四）

第二一九節

（16）や。か。二語、共ニ、指シテ疑フ意ヲイフ豆爾波ナリ。（常ニ、耶、哉、乎、歟、等ノ字ヲ當ツ、）

此ノ二語ノ、文中ニアルトキハ、其末ヲ結ブ動詞、形容詞、助動詞、皆、第二終止法ヲ用ヰル。

「春や來る、」「行きやする、」「行かでやあるべき、」「花をや見つる、」

「いづくにかある、」「何とかすべき、」「いかでか知らむ、」

尙、文章篇ノ結法ノ條ニ、委シクイフベシ。

第二二〇節

○二語、共ニ、文句ノ末ニ屬キテ、疑ヒ、又、問フ意ヲナスコトアリ。

「名にし負はゞ、いざ言問はむ、都鳥、我が思ふ人は、ありやなしやと。」（伊勢物語）來むや來じやの、さだめなければ、」（後撰、十四）

秋風の、吹上に立てる、白菊は、花かあらぬか、浪の寄するか。」（古今、

五）いきたるか、死ぬるかいかに、おもほえず。」

第二二一節

○二語、共ニ、一種ノ用法ニ因リテ、疑フ意ノ、裏反リテ、確定ノ意トナルコトアリ、コレヲ反語トイフ。

「見てのみや、人に語らむ、山櫻、手毎に折りて、家苞にせむ。」「そこひなき、淵やはさわぐ、山川の、淺き瀨にこそ、あだ波は立て。」「咲かざらば、櫻を人の、折らましや、櫻の仇は、櫻なりけり。」「いかで人に劣らむやは。」「悅バシカラズヤ、我レ、豈ニ敢テセムヤ。」

第二二二節

「誰が誠をか、我は賴まむ。」「いつかは雪の、消ゆる時ある。」「あすもありとは、賴むべき身か。」「かはるは人の、心のみかは。」「焉（イヅクンゾ）カ存セム、」「爭（イカデ）カ取ラム。」「委シクハ、文章篇ノ呼應ノ條ニイフベシ。

○此二語ノ、動詞、形容詞、助動詞、ヲ承クルトキハ、「や」ハ、其第一活用ニ着キ、「か」ハ、第二活用ニ着クヲ、定則トス、第九表ノ如シ。

第三節

助動詞モ、第三表ニ就キテ、其第一、第二活用ニ連ネテ、知レ。

○又「や」か、」共ニ、疑フ意ノ豆爾波ナレド、上ニ、他ノ疑辭アルキ、例ヘバ、「幾何か」ある、「何をか取る、」「誰なるか、」「何とすべきか、」「いづくにあるか、」ナド、下ニ、更ニ、「か」ヲ置クハ、常ナレド、斯ル場合ニ、「や」ヲ置クヿナシ。

第九表

	第一活用	第二活用
四段	(押)おす	おす
上二段	(生)いく	いくる
下二段	(受)うく	うくる
上一段	(着)きる	きる
下一段	(蹴)ける	ける
加變	(來)く	くる
佐變	(爲)す	する
奈變	(死)ぬ	ぬる
良變	(有)あり	ある
志幾	(善)よし	よき
志志幾	(惡)あし	あしき
	や	か

第十表

動詞、形容詞、助動詞ト、豆爾波ノこも、ご、ども、ば、トノ連續。

	動詞								助動詞																		形容詞		助動詞			
	四段	上二段	下二段	上一段	下一段	加變	佐變	奈變	良變	所相	勢相	使役相	指定	打消	過去	未來	推量	詠歎	志幾	志々幾	指定	比況	打消	過去	推量
	(押)おす	(生)いく	(受)うく	(着)きる	(蹴)ける	(來)く	(爲)す	(死)ぬ	(有)あり	1 る	2 (4)らる	5 す	6 さす	7 ふむ	8 なり	9 たり	10 ず	11 つ	12 ぬ	13 たり	14 せり	15 けり	16 むむ	17 けむ	18 らむ	19 めり	20 なり	(善)よく	(惡)あしく	21 べく	22 ……	23 まじく	25 ……	26 ……
第一活用	ども																											ども					
第三活用	おせ	いくれ	うくれ	きれ	けれ	くれ	すれ	ぬれ	あれ	る れ	らるれ	すれ	さすれ	ふむれ	なれ	たれ	ねれ	つれ	ぬれ	たれ	せれ	けれ	めめ	けめ	らめ	めれ	なれ	よけれ	あしけれ	べけれ	……	まじけれ	しか	……
	ば																											ど ども		ど ども				
第三活用	おせ	いくれ	うくれ	きれ	けれ	くれ	すれ	ぬれ	あれ	る れ	らるれ	すれ	さすれ	ふむれ	なれ	たれ	ねれ	つれ	ぬれ	たれ	せれ	けれ	……	……	……	めれ	なれ	よけれ	あしけれ	べけれ	……	まじけれ	しか	ましか
	ば																											ば		ば				
第四活用	おさ	いき	うけ	き	け	よ	せ	な	あら	れ	られ	せ	させ	ふめ	なら	たら	て	ず	なた	たら	せら	……	……	……	……	……	……	よく	あしく	べく	ごとく	まじく	……	……
	ば																											ば		ば				

未定　既定

既定　未定

説明、第三表ニ比ベテ、助動詞ノ(24)「じ」、(27)「らし」ノ脱シタルハ「ども」、「ど」、「ば」ニ接セザルニ因ル。

		形容詞	助動詞							
		志幾	指定	比況	打消	過去	推量			
		志々幾								
第四活用		(善)よく (悪)あしく ……	(21)べく (22)…… (23)まじく (25)…… (26)……							
		ども	ども							
第三活用		よけれ あしけれ ……	べけれ …… まじけれ しか ……							
		ど ども	ど ども							
第三活用		よけれ あしけれ ……	べけれ …… まじけれ しか ましか							
		ば	ば							
第四活用		よく あしく ……	べく ごとく まじく ……							
		ば	ば							

説明、第三表ニ比ベテ、助動詞ノ(24)「じ」、(27)「らし」ノ脱シタルハ「とも」、「ども」、「ば」ニ接セザルニ因ル。

第二二四節　○第三類。此ノ類ノ互爾波ハ、上、下、共ニ、動詞、或ハ、形容詞、助動詞、ニ接ス、コレヲ、「動詞ノ互爾波」ト泛稱スベシ。

第三類

第二二五節　(17)ば。　甲ノ語句ト、乙ノ語句ト、ヲ連絡セシムルニ用ヰル互爾波ニテ、甲、原因トナリテ、乙、其當然ノ結果ヲ成ス意ヲイフ。(漢字、則ノ字ニ當ル)

然シテ、其用法ニ、二樣アリ。動詞、形容詞、助動詞、ノ第三活用ニ接スルトキハ、「既定」ノ意ヲ成シ、第四活用ニ接スルトキハ、「未定」ノ意ヲ成ス。(第十表ヲ、右方ヘ開キテ見ヨ)

第二二六節　○既定ノ例。「年歴れば、齡は老いぬ、然はあれど、花をし見れば、物思ひもなし。」(古今、二花見れば、心さへにぞ、移りける。」(同、二)

一度ニ、パーット放セバ、敵、三百餘人、ヤニハニ打殺サレ、」(太平記、七)

水至りて清ければ、大魚接まず。「人衆ければ、天に勝つ。」ノ如シ。

第十表

動詞、形容詞、助動詞ト、豆爾波ノごも、ご、ども、ば、トノ連續。

動詞		第一活用	第三活用	第三活用	第四活用
四段	未定	おす（押） いく（生） うく（受） きる（着） ける（蹴） く（來） す（爲） ぬ（死） あり（有）	おせ いくれ うくれ きれ けれ くれ すれ ぬれ あれ	おせ いくれ うくれ きれ けれ くれ すれ ぬれ あれ	おさ いき うけ き け こ せ ぬな あら
上二段	既定				
下二段	既定				
上一段	未定				
下一段	未定				
加變		ども	ど ども	ば	ば
佐變					
奈變					
良變					
所勢相	未定	(1)(3)る	るれ	るれ	れ
	既定	(2)(4)らる (5)す	らるれ すれ	らるれ すれ	られ

第二二四節　○第三類。此ノ類ノ豆爾波ハ、上、下、共ニ、動詞、或ハ、形容詞、助動詞、ニ接ス、コレヲ、「動詞ノ豆爾波」ト泛稱スベシ。

第三類

第二二五節　(17)　ば。　甲ノ語句ト、乙ノ語句ト、ヲ連絡セシムルニ用ヰル豆爾波ニテ、甲、原因トナリテ、乙、其當然ノ結果ヲ成ス意ヲイフ。(漢字、則ノ字ニ當ル。)

然シテ、其用法ニ、二樣アリ。動詞、形容詞、助動詞、ノ第三活用ニ接スルキハ、既定ノ意ヲ成シ、第四活用ニ接スルキハ、未定ノ意ヲ成ス。(第十表ヲ、右方ヘ開キテ見ヨ。)

第二二六節　○既定ノ例。「年歷れば、齡は老いぬ、然はあれど、花をし見れば、物思ひもなし。」(古今、二花見れば、心さへにぞ、移りける。」(同、二)

一度ニ、パーット放セバ、敵、三百餘人、ヤニハニ打殺サレ、」(太平記、七)

水至りて清ければ、大魚接まず。「人衆ければ、天に勝つ。」ノ如シ。

第二二七節　○未定ノ例。「櫻花、散らば散りなむ。」(古今、二)待つこし聞かば、今歸り來む。」(同、八)鶯の、谷より出づる、聲なくば、春來ることを、誰か知らまし。」(同、一)戀しくば、來ても見よかし。」ノ如シ。

第二二八節　○又、既定ノ方ヲ、「風吹けば、え出でたゝず。」(土佐日記)波、風、止まねば、同じ處にあり。」(同)てる月を、弓張とし、いふことは、山の端さして、いればなりけり。」(忠岑集)ナド用ヰルキハ、「吹くに因りて、」止まぬに因りて、」いるに因りて、」ノ意ヲ成ス、然レモ、尙、原因、結果ヲイフ。

第二二九節　(18)と。　ども。　ど。　ども。　此ノ四語モ、亦、共ニ、甲乙ノ語句ヲ連絡スル豆爾波ナリ。　但シ、甲ノ語句、原因ヲ成シテ、乙ノ語句ハ、其反對ノ結果ヲ成スヲイフ。(共ニ、漢字ノ雖ノ字ニ當ル、)而シテ、亦、未定、既定、ノ二樣ニ分レ、清音ナルハ、動詞ニテハ、其

第二二九節　第一活用ニ接シ、形容詞ニテハ、其第四活用ニ接シテ、未定ノ意ヲ成シ、濁音ナルハ、動詞、形容詞、共ニ、其第三活用ニ接シテ、既定ノ意ヲ成ス「、第十表ノ如シ。　助動詞ニテモ、其活用ノ、動詞ニ似タルモノハ、動詞ト同ジ狀ニ接シ、形容詞ニ似タルモノハ、形容詞ト同ジ狀ニ接スル「、亦、第十表ノ如シ。

第二三〇節　○　どノ例。「風吹くど、枝を離れて、落つまじく、花どちつけよ、青柳の絲。」(山家集)繪にかくど、筆も及ばじ。」(堀川後百首)ノ如シ。

第二三一節　○　ともノ例。「けふ來ずば、あすは雪とぞ、降りなまし、消えずはありとも、花と見ましや。」(古今、二)梅が香を、袖に移して、とゞめてば、春は過ぐとも、形見ならまし。」(同、二)難くとも遂げむ、」惜しくとも捨てむ、」ノ如シ

第二三二節

○　ど、　ども、ノ例。「春立てど、花も匂はぬ、山里は、」(古今、二)忍ぶれど、色に出でにけり、」(拾遺、十二)問へど、答へず、」逐へど、去らず、」酌めども盡きず、飲めどもかはらぬ、秋の夜の盃、」(謠曲、猩々)惜しけれど捨つ、」長けれども切らず、」ノ如シ。

第二三三節

(19)に。　を。　が。　此ノ三語、共ニ、亦、甲乙ノ語句ヲ連絡スルニ用ヰル豆爾波ニテ、事ノ裏返ル意、又ハ、案外ニ出ヅル意ヲイフ、其意、稍、前條ノ「ど、」ども、」ニ似タリ。而シテ、三語、共ニ、動詞、形容詞、助動詞、ノ第二活用ニ接ス。

第二三四節

○　に　ノ例。「秋の野の、錦のごとも、見ゆる哉、色なき露は、染めじと思ふに。」(後撰、七)庭の面は、まだ乾かぬに、夕立の、空さりげなく、すめる月哉。」(新古今、三)郭公、一聲ここそ、思ひしに、待ちえてかはる、我が心かな。」(續千載、三)日暮れかゝるに、宿るべき處遠し。」(十六夜日記)畿内ノ軍、イマダ靜ナラザルニ、又、四國、西國、日ヲ追ヒテ亂レケレバ、」(太平記)ノ如シ。

第二三五節

○　を　ノ例。「夏の夜は、まだよひながら、明けぬるを、雲のいづこに、月宿るらむ。」(古今、三)つひに行く、道とはかねて、聞きしかど、きのふけふとは、思はざりしを。」(同、十六)ノ如シ。

第二三六節

○　が　ノ例。「その時は、わびあう堪へがたく覺え候ひしが、おくれまゐらせて後は、なごさおぼえ候ひけむ、悔しう候ふなり、といふ。」(宇治拾遺)大物(ダイモツ)の浦より、船にて下られけるが、折節、西の風、烈しう吹きければ、判官の船は、住吉の浦へ打上げられ、」(平家物語、判官都落)今ノ朝家ニハ、只、藤房一人ノミニテ候ヒツルガ、未然ニ凶ヲ鑒ミテ、隱遁ノ身ト成リ、」(太平記)說諭シタリシガ、聽カザリキ。」屢、訪ヒタルガ面會ヲ得ズ。」ノ如シ。

第二三七節　(20)　て。　事、終リテ、後ニ移ル意ヲ成ス豆爾波ナリ。(常ニ、而ノ字ヲ當ツ。)「春、過ぎて、夏、來たるらし。」「雨、降りて、地、固まる。」「日、暮れて、路、遠し。」ノ如シ。動詞、助動詞、ノ第五活用ニ連ル。

第二三八節　○左ノ數語ハ、此ノ條ノ「て」ヲ、他語ト重用スルモノナルガ、慣用久シクシテ、一ノ豆爾波ノ如クナレリ、類ヲ以テ、此ニ擧グ。

第二三九節　○　にて。　名詞ノ豆爾波ノ「に」ト、此ノ條ノ「て」トニテ、間ニ略語アルナリ。「に於て、」ナドノ意ナルハ、「京にて遇ふ、」「田舍にて見る。」「に因て、」ナドノ意ナルハ、「筆にて書く、」「水にて洗ふ。」「にありて、」ナドノ意ナルハ、「家は昔にて、人はあらず。」「頭は人にて、身は魚なり。」「になして、」ナドノ意ナルハ、「月影を、色にて咲ける、卯の花は、」(後拾遺、三)ノ如シ。

第二四〇節　○　とて。　「といひて、」ナドノ意ナルハ、「さりとて、あればと

て。」「と思ひて、」ナドノ意ナルハ、「花見にとて、出で立つ。」「書を讀まむとて、机に凭る。」

第二四一節　○　して。　「爲」ノ「て」ニツキタルナレド、其意、失セタルナリ。「ありて、」「て、」ノ意ナルハ、「幼くして賢し、」「斯くして別る、」「巧にして速なり、」「答へずして去る、」「もて、」「にて、」ナドノ意ナルハ、「米して、返り事す、」(土佐日記)「飯粒して、鯛釣る、」(同)「人をして送らしむ、」「ひとりして物を思へば、」(古今、十二)

第二四二節　○　にして。　「にありて、」「にて、」ノ意ナリ、「京にて生れたりし女子、おいにして、俄に失せにしかば、」(土佐日記)「都にして遇ひける人、」

第二四三節　○　として。　「とありて、」ナドノ意ナリ、「一人として、背く者なし、」「人として、信なくば、」

第二四四節　(21)で。打消ノ助動詞ノ「ず」ト、前條ノ「て」トヲ、一語ニ約メテイフモノナリ。サレバ、動詞、助動詞、ノ第四活用ニ接スル「ず」ニ同シ。「人に知られで來る由もがな。」(後撰、十二)行かでありし、歸らであらむ、」ノ如シ。

第二四五節　(22)つつ。半過去ノ助動詞ノ「つ」ヲ重用スルモノナリ、「行きつゝ見る、讀みつゝ書く、」ノ如キ、「且行き、且見る、」且讀み、且書く、」トイハムガ如シ。

○感動詞

感動詞

第二四六節　○感動詞(又、詠歎ノ詞)ハ、喜、怒、哀、樂、等、凡ソ、人情、感動スル所アルニ發スル聲ナリ。例ヘバ「あな喜ばし、」最も畏し、樂しきかな、」ナドノ「あな、」も、」かな、」ノ如シ。而シテ、泛ク、種々ノ感情ニ通ジテイフアリ、專ラ、一感情ニ局リテイフアリ。又、其用法モ、言語ノ上ニ立ツアリ、中間ニ入ルアリ、下ニ添フアリ、而シテ、他語ニ連續スルニ就キテ、亦、各、一定ノ慣用法アリ。左ニ、感動詞ノ著キモノヲ擧ゲテ、其用例ノ若干ヲ示サム。

第二四七節　○他語ノ上ニ用ヰルモノ。

あ。(噫)ああ。(嗚呼)「あゝ、かしこし・や、」

あら。「あら、熱や、」あら、無慚なりや、」

あな。「あな、羨まし、」あな、苦し、」あな、かしこ、」

あはれ。「あはれ、今年の、秋も往ぬめり。」(千載、十六)「あはれ、都の、花を見る哉、」(拾遺、十六)

第二四八節　や。呼ビ掛クル聲。「はやく、左の目に、いたつき立ちにけり、海

賊、や、といひて、扇を投げすてゝ、のけざまに、倒れぬ。」(宇治拾遺、十五)

第二四九節

やあ。前項ノ「や」ノ韻ヲ引クモノ。「やあ、正綱、頼將が十四歳に遇ふこと、再びやあるべき。」(藩翰譜、紀伊)

やよ。「や」ト、「よ」トヲ重用シテ呼ビ掛クルモノ。「わがさかり、やよいづかたへ、行きにけむ、知らぬ翁に、身をばゆづりて。」(夫木集)

やよや待て、」

いかに。亦、呼ビ掛クルニ發ス。「判官、いかに、與一、あの扇のまんなか射て、敵に見物せさせよ、かし、と宣へば、」(平家、十一)

いで。思ヒ起ス時ニ發ス。「いで、御消息聞えむ、」いで、何ぞ、とて取りて見れば、」

いざ。誘ヒ立ツル時ニ發ス。「鏡山、いざ立寄りて、見て行かむ、」いざ汲み見てむ、山の井の水、」

第二五〇節

あはや。事ノ爲リナムトスルヲ見テ發ス。「あはや、法皇の流されさせおはしますぞや。」(平家、三)

すは。警メ告グルニ發ス。「四方ノ寄手、関ノ聲ヲ聞キテ、スハヤ、城ノ中ヨリ打出デタルハ、」(太平記、七)

第二五一節

○他語ノ中間、又ハ、下ニ用ヰルモノ。

や。「年はや歴なむ、鳥とかや見む」。いなや思はじ、思ふかひなし。」(古今、十九)

○「恨みずや、恨みつべしや、なか〳〵なりや、いとやすらかなる御ふるまひなりや。」(帚木)耳馴れ侍りけりや、(若紫)あぢきなし(シ)や、ありがた(シ)や、」

いみじくぞあるや、おぼしやる方ぞなきや。にほひぞ人に似ぬや、と打ちさゝめきて、(柏木)心こそ、心をころす、ものなれや。」

第二五二節　（堀川百首）「行けや、打てや、行きけるぞや、」

も。「移りも行くか、人の心の。」（古今、十五）からくも我は、老いにけるかな。」（同、十七）知らずもあるかな、」いともかしこし、」またも來む、」時しもあれ、」無きにしもあらず、」必しも然らざらむ、」

第二五三節　○「山のまに〳〵、鶯鳴くも」（六帖）忘れかねつも、」ゆくへ知らずも、」春立つらしも。」

は。「世の中は、昔よりやは、憂かりけむ。」（古今、十八）誰かは訪はむ、春の古里。」（新古今、二）

第二五四節　○「さるさがなき夷心（エビスゴヽロ）を見ては、いかゞはせむは。」（伊勢物語）「夜中も、過ぎにけむかし、風あら〳〵しう吹きたるは。」（夕顔）「これ見よ、まことにおはしたるは、こいへば、」（宇治拾遺、一）

を。古キ感動詞ナリ。「昔も今も、知らずとをいはむ。」（古今、十三）香をだに匂へ、人の知るべく。」（同、六）

第二五五節　○他語ノ下ニ用ヰルモノ。

な。「蟬の聲、聞けばかなしな、」恨みつべしな、」忘れじな、」知らずな、」契りきな、」移りにけりな、」惡しとおそ思ひたれな、」心憂くておそおはしたれな、」いくそこ問へな、」老いにけるよな、」去りたるよな、」

第二五六節　よ。呼ビカクル聲。「月よ、」花よ、」おゝろぼそさよ、」行けよ、」鳴けよ、」忘れずよ、またかはらずよ、」物を思ふよ、」人の知らぬよ、」人のつらきよ、」行きけるよ、」契りしよ。」

第二五七節　か。かも。かな（哉）此ノ三語ノ、動詞、形容詞、助動詞、ニ添フキハ、必ズ、其第二活用ニ添フ。名詞ニ着キタルアルハ、間ニ、助動詞ノ「なる」ナドヲ畧シタルナリ。

第二五八節　○「淺みどり、絲よりかけて、白露を、玉にもぬける、春の柳か。」(古今、一)行く人を招くか、野邊の花薄、」(金葉、三)　スベテ「哉」ノ意ナリ、疑ヒノ「か」ト紛フベカラズ。

第二五九節　○「吾が宿の、冬木の上に、降る雪を、梅の花かと、打見つるかも。」(萬葉、八)三笠の山に出でし月かも。」(古今、九)

第二六〇節　○「夜はの月かな、水の聲かな、年を歴るかな、見ゆるかな、」樂しきかな、」のごかなるかな、思はるゝかな。」

第二六一節　が。　がも。　がな。　共ニ、希望ノ意ヲイフ感動詞ナリ。但シ、「も、」し、」て、し、」に、し、」ノ下ニ限リテ用ヰラル、其「も」モ、感動詞ナリ、「し、」て、」に、」ハ、助動詞ノ過去ノ「き、」「ぬ、」つ、」ノ活用ニテ、未來ヲ、豫テ過去ニ言做シテ、願フナリ。但シ、が、がもハ、用法、古シ。

第二六二節　○「老いず死なずの、藥もが、君が八千代を、わかえつゝ見む。」(古今、長歌)甲斐が嶺を、亮にも見しが、心なく、横り臥せる、佐夜の中山。」(古今、二十)

第二六三節　○「常にもがもな、常處女にて、」(萬葉、二)甲斐か嶺を、ねこし山ゑし、吹風を、人にもがもや、言づてやらむ。」(古今、二十)

第二六四節　○「無くもがな、見る由もがな、思はずもがな、飛ふが如くに、都へもがな、」(土佐日記)みよし野の、山に入りけむ、山人と、成りみてしがな、花に厭くやと。」(續千載、二)

第二六五節　ね。　な。　なむ。　三語、共ニ、亦、希望シ、又ハ、吩咐フル意ヲイフ感動詞ニテ、共ニ、動詞、助動詞、ノ第四活用ニ添フ。

第二六六節　○ねハ、用法古シ。「榮えいまさね、尊き吾が君。」(萬葉、十九)舟出はしぬと、親にまうさね。」(同、二十)櫻花、いまだ含めり、一目見に來ね。」(同、十八)

第二六七節　○なモ古シ。「遊びくらさな、」(萬葉、五)山橘を苞(クト)に摘み來(コ)な。」(同、二十)衆生(モロモロ)濟(スク)ひ、わたしたまはな、救ひたまはな。」(佛足石歌)

第二六八節　○なむ。「もえいづる春に逢ひ給はなむ、と念じ、」(蜻生)はや、御馬にて、二條院へおはしまさなむ。」(夕顏)行かなむ、押さなむ、報いなむ、受けなむ、あらなむ、比べざらなむ、任せたらなむ、」

第二六九節　かし。完結シタル文句ノ後ニ、餘情ニ添ヘテ、念ヲ推ス意ノ感動詞ナリ。

「さばかりぞ、かし、見ゆるぞ、かし、」

第二七〇節　「見ゆ、かし、聞ゆ、かし、」あはれなり、かし、」斯くぞおぼえ侍る、かし、」えおそせざれ、かし、思ひ知れ、かし、疾く行け、かし。」三樣ノ終止法、命令法等、スベテ、語句ノ完結シタル後ニ添フ。感動詞ニハ、重用スルモノ多シ。「や、よ、」や、よ、や、」か、な、」が、な、」が、も、」等ハ、前ニ擧ゲタルガ如シ。其他、「あな、や、」いざ、や、」いで、や、」行けよ、や、」いつはな、も、」見せばや、な、」老いにけるよ、な、」かへりみしは、や、」ナド、擧グルニ勝ヘズ。

尋常ノ語モ、感情ニ發シテ、感動詞トナル「アリ。「こは、」こは、そも、」こは、いかに、」さて、も、」いや、こよ、」ノ如シ。

○熟語
○疊語

熟語　疊語

第二七一節　熟語トハ、數語ノ、合ヒテ一語トナリテ、一義ヲ成スモノナリ。

第二七二節　而シテ、八品詞、互ニ、用法アリテ、相合フ。左ノ若干ノ例ニテ、其用法意義ノ種々ナル「ヲ知ルベシ。

○熟語ノ名詞。

「松山、谷川、酒樽、船歌、牡牛、牝馬、淺瀨、黑雲、一年、五月、唐織、京染、教草、讀物、天津風、沖津浪、加賀絹、陸奥紙、木綿付鳥、數珠掛鳩、行合兄弟、絲卷人手、」(介名)豐葦原中津國、三吉野之吉野山、陸奥出羽、按察使、太皇太后宮大夫、」

第二七三節

右等ノ熟語ハ、下ノ語ヲ主トシ、上ノ語ヲ從トシ、上ハ、下ノ種類、性質等ヲ形容スル語トナル。

第二七四節

「月日、山川、露霜、草木、上下、右左、西東、春秋、善惡、勝負、和漢、忠孝、」

第二七五節

右等ハ、各自獨立ニシテ、共ニ主ナリ。

「丈長、端近、車返、豆廻、請取、賣捌、親不知、從弟違、」

右等ニハ、主從ナシ。

「未曾有、不可思議、傍若無人、以心傳心、」

第二七六節

右等ハ、句ノ熟語ニテ、名詞ノ如ク用ヰラル、モノナリ。

○熟語ノ動詞。

「罪す、與す、吟ず、感ず、周旋す、探索す、奴隷視す、爪突く、」(躓)心指す、(志)請願ふ、」(冀)落入る、」(陷)返見る、」(顧)物語る、豐榮昇る、」大殿籠る、飛立去る、打連立行く、成りなむとす、」(垂)

第二七七節

○熟語ノ形容詞。

「心好し、(快)目映し、」(眩)物憂し、」(懶)胸苦し、細長し、薄暗し、逸早し、愛らし、鬱陶し、」

第二七八節

○熟語ノ副詞。

「恐らくは、請願はくは、」(冀)思ふに、」(顧)亂りに、」(妄)案ずるに、」詮ずるに、敢へて、返りて、」(却)言はむや、」(況)稍もすれば、」(輙)一方に、」(偏)殊更に、」(故)元より、」(固)餘りさへ、」(剩)何處にぞ、」(焉)身づ

から、」(自)無いが代(シロ)に、」(蔑)欲しい儘に、」(恣)短兵急に、」居丈高(ヰタケダカ)に、」

高手小手に、」

第二七九節

○熟語ノ接續詞。

「或は、」(有謂(アルイヒ)ハ)然(シカ)うして、」(而)かるがゆゑに、」(故)なかんづく、」(就中)

然のみならず、」(加之)

第二八〇節

○疊語ハ、同語ヲ重用スル熟語ナリ。而シテ、其用法、意義、各、定

疊語

マル所アリ。左ニ、其用例ノ若干ヲ示ス。

第二八一節

○名詞ノ疊語。

「山々、」川々、」木々、」草々、」津々、」浦々、」島々、」人々、」我々、」夫々(シレ)、」下々(シモ)、」種

々、」狀(サマ)々、」

第二八二節

右等ハ、事物ノ數多キヲ示シ、或ハ、共ニ然ルヲ示ス。

「日々(ヒビ)、」月々(ツキヅキ)、」年々、」度々、」心々に、」口々に、」一人(ヒトリ)々々に、」

第二八三節

右等ハ、副詞ニ變ジテ、物毎ニ、事毎ニ、然ル意ヲ示ス。

○動詞ノ疊語ハ、スベテ、副詞ニ變ジテ、其動作、作用ヲ繰返ス

意トナリ、或ハ、其意ヲ深クス。

「行く〳〵、」代る〴〵、」增す〳〵、」(益)次ぎ〳〵、」思ひ〳〵よ、」絶え〳〵

よ。」あり〳〵と、」たどり〳〵て、」知らず〳〵、」繰返し〳〵、」行けど

も〳〵、」

第二八四節

○形容詞ノ語根ニ成レル疊語モ、其意ヲ深クス。

「長々し、」重々し、」輕々し、」遠々し、」

他語ノ疊語ヨリ成レルアリ、生來、疊ミタルガ如キアリ。

「事々し、」物々し、」めゝし、」をゝし、」馴れ〳〵し、」付き〳〵し、」賑(ニギ)々

し、」初(カヒ)々し、」「おごろ〳〵し、」うや〳〵し、」いま〳〵し、」くだ〳〵

し、」

第二八五節　語根ヲ疊ミテ副詞トシ、副詞法ヲ疊ミテ副詞トシ、スベテ其意ヲ深クス。

「青々と、長々と、疾く〳〵、善く〳〵、」

第二八六節　○副詞ノ疊語モ、其意ヲ深クス。

「ゆめ〳〵、いと〳〵、たゞ〳〵、なほ〳〵、げに〳〵、さら〳〵に、」

かならず〳〵、赫々と、寂々と、蕭々と、徐々と、」

又、繰返ス意ヲ成スアリ、生來疊ミタルガ如キアリ。

第二八七節　「かく〳〵、ゑか〴〵、そも〳〵、また〳〵、」「やゝ、やう〳〵、」ほと〳〵、うつら〳〵、なか〳〵に、さめ〴〵と、から〳〵と、こと〴〵く、」

○感動詞ノ疊語モ、其意ヲ深クス。

「あゝ、あはれ〳〵、いで〳〵、いざ〳〵、」

○接頭語
○接尾語

接頭語　接尾語

第二八八節　接頭語

○八品詞ノ外ニ、接頭語、接尾語、等アリ。

○接頭語ハ、他語ノ頭ニ接シテ、熟語トナリテ、其意義ヲ添フル語ナリ。サレバ、固ヨリ、獨立ニハ用ヰラレズ。接頭語ノ數、甚ダ多カラズ、且、一定ノ慣用法アリテ、何レノ語ニモ冠ラスベキニアラズ。左ニ、其著キモノヲ擧ゲテ、用例ノ一斑ヲ示サム。

「初春、初音、初學、初立つ、新參、新墾、小川、小暗し、小松、小高し、」御代、御燈、大御、御、御眞心、眞直中、素肌、素顏、生紙、生藥、僻目、」僻讀、異國、異人、曲者、曲事、えせ者、えせ法師、幾世、幾久し、諸人、諸共に、彌增す、彌高し、」

第二八九節　接尾語

○接尾語ハ、他語ノ尾ニ接シテ、熟語トナルモノナリ。而シテ、他語ヲ、名詞トスルアリ、又、動詞トシ、形容詞トシ、副詞トスルモアリ、亦、漫用スベカラズ、スベテ、慣用ノ例ニ據ルベシ。

第二九〇節　○名詞ニ接シテ、尚、名詞トスルモノ。

ら。(等)　物事ノ數アルヲ、統ベテイフ、次ノ五語、同ジ。「我ら、汝ら、」是れら、夫れら、少女ら、範頼、義經等、」

第二九一節　なご。(拯)　「月、花、なごのながめ、貴き、賤しき、なご、さま〳〵にて、物なご、もてまゐり、」

第二九二節　ども。(共)　「物ども、事ども、男ども、船ども、馬ども、」

第二九三節　たち。(達)　專ら「人」ニイフ、次ナル三語モ同ジ。「皇子たち、親たち、大臣だち、公だち、友だち、」

ばら。(儕)　「殿ばら、法師ばら、女ばら、奴ばら、」

第二九四節　がた。(方)　「宮がた、殿がた、華族がた、」

ごち。互ニ伴侶ナル意ニイフ。「友ごち、女ごち、我れごち、言ふ事も、何事ならむ、とおぼゆ。」(枕草子、二)

第二九五節　○他語ニ接シテ、名詞トスルモノ。第一〇七節、參見、

げ。(氣)　事物ノ形狀、情態、ヲイフ。「人げ、外げ、心ありげ、物思ひげ、思はずげ、思ひ得たりげ、惡げ、重げ、嬉しげ、惜しげ、」

第二九六節　さ。(狀)　事物ノ形狀、程度、ヲイフ、形容詞ノ語根ニノミ着ク。「遠さ、深さ、善さ、惡しさ、悲しさ、嬉しさ、」

第二九七節　み。　程ヲイヒ、其程ノ處ヲモイフ、形容詞ノ語根ニノミ着ク。「深み、高み、青み、赤み、重み、」

第二九八節　○他語ニ接シテ、動詞トスルモノ。

めく。　自動詞トシテ、「ソノ如ク成ル、」ヲドイフ意ヲナス、四段活

用ナリ。「今めく、時めく、春めく、唐めく、上手めく、ほのめく、」めかす。「めく、ノ他動ニテ、亦、四段活用ナリ。「今めかす、時めかす、ほのめかす、」

第二九九節

がる。「ト思フ、」ナドノ意ヲナス、亦、自動ニテ四段活用ナリ。「嬉しがる、ゆかしがる、賢(カシコ)がる、執念(シフネン)がる、あはれがる、」

第三〇〇節

ぶ。「ソノ如ク成ル、」意ヲナス自動ニテ、上二段活用ナリ。「大人(オトナ)ぶ、古(フル)ぶ、田舎ぶ、鄙(ヒナ)ぶ、」よのつねびたり、ことさらびたり、」

第三〇一節

ぶる。「ソノ風(フリ)スル、」意ヲナス、自動ニテ四段活用ナリ。「學者ぶる、」利口(リコウ)ぶる、」

○他語ニ接シテ、形容詞トスルモノ。

がまし。志々幾活用ニテ、「ノ如シ、」ニ似ル嫌ヒアリ、」ナドノ意ヲナス。「隔てがまし、」かごとがまし、」烏滸(オコ)がまし、」

たし。希フ意ヲ成ス志幾活用ナリ。「見たし、」行きたし、」ありたし、」

第三〇二節

らし。「ソノ狀ヲアラハス、」意ヲナス、志志幾活用ナリ。「男らし、」女らし、」學者らし、」

○他語ニ接シテ、副詞トスルモノ。

第三〇三節

ながら。「ソノママ、」ソレゴヤニ、」(隨)ノ意ナリ、「一年は、春ながらにも、暮れななむ、花の盛を、飽くまでも見む。」(兼盛集)右の大臣(オトド)も、御子共、六人ながら、引連れて、おはしたり。」(竹川)御簾(ミス)の内ながら宣ふ、」(夕顔)

第三〇四節

意義、一轉シテ、「つつ」(且)ナドノ意ヲ成ス、「讀みながら考ふ、」歩みながら見る、」

又、一轉シテ、「なれども」(乍)ノ意ヲ成ス、「思ひながら、」さりなが

第三〇五節　「ら、」をかしながら、」

ものから。ものの。　前條ノ「ながら」ノ、末項ノ意ニ同ジク、「ものなれども」ノ意ナリ。（「もの」ハ、添ヘタル語ナレド、斯クノミ用ヰラルレバ、添ヘッ、）「待つ人に、あらぬものから、初雁の、今朝鳴く聲の、めづらしき哉。」（古今、四）身に寒く、あらぬものから、わびしきは、人の心の、あらしなりけり。」（後撰、十七）空蟬の、世の人言の、をげければ、忘れぬものの、離れぬべらなり。」（古今、十四）

第三〇六節　すがら。「さながら」ノ約マレル語ナリ。「路すがら、心も空に、ながめやる、都の山の、雲隠れぬる。」（千載、八）秋霧の、立ちぬるすがら、心當てに、」（夫木、卅三）夜すがら、寢をねず、」夜もすがら思ふ、」

第三〇七節　がてら。　事ノ、彼此ニ渉ル意ヲナス、「秋の野も、見たまひがてら、雲林院に詣でたまへり、」（榊）けしきも見がてら、雪を打拂ひつゝ、」（箒木）

第三〇八節　がてに。「難クアル」意ヲナス、「人々、まかりかへりがてにして、別れを惜みけるに、」（古今、八）我宿に、咲ける藤波、立ちかへり、過ぎがてにのみ、人の見るらむ。」（同、二）難波潟、汀の雪は、跡もなし、溜ればがてに、涙やかくらむ。」（風雅、十五）

第三〇九節　からに。「故ニ、」ノ意ヲ成ス、「浮きて行く、紅葉の色の、濃きからに、川さへ深く、見えわたる哉。」（貫之集）取りしからに、」さるからに、」

第三一〇節　み。　其意、前條ノ「からに」ニ似テ、「が故に、」ノ意ヲ成ス、但シ、形容詞ノ語根ニノミ着ク。

「我が門の、板井の清水、里遠み、人し汲まねば、水草生ひにけり。」（古今、二十）秋の田の、假庵の庵の、苫を粗み、我が衣手は、露に濡れつゝ。」（後撰、六）瀬を速み、岩に塞かるゝ、瀧川の、」（詞花、七）散りなば

惜しみ、折れる秋萩、(後撰、六)春深み、越路に雁の、かへる山、(拾遺愚草、上)ナドナリ、(苦をあらみ、)瀬をはやみ」ナドノ「を」ハ、スベテ感動詞ナリ、其意ハ、「里遠きからに汲まず、苦粗きが故に濡る、」ナド言ハムガ如シ、他モ、推シテ知ルベシ。但シ、此ノ用語ハ、多クハ、和歌ノ上ニアリ。

第三一一節　ごとに。(毎)物事ノ、重ネテ然ル意、各、然ル意ヲナス、「人ごとに語る、」國ごとに然リ、年ごとに咲く、咲くごとに見る、」

第三一二節　まにまに。「元ト「まに」トノミイフ語ヲ重ネテイフニテ、「隨に」トイフニ同ジ、「聲のまに〳〵尋ぬれば、」語るまに〳〵聞く、」欲しきまに〳〵取る、」するがまに〳〵、」

第三一三節　ばかり。程ノ意ヲナス、「比叡の山を、二十ばかり、重ねあげたらむ程して、」(伊勢物語)我ばかり、物思ふ人は、またもあらじ。」(同)三年ばかり歴て、かくばかり、いかばかり、」泣きぬばかりに言へば、」(帚木)いみじう、死ぬばかり思へるが、いとほしければ、」(東屋)

第三一四節　又、「頃」ノ意ヲ成ス、「宵打過ぎて、子の時ばかりに、」その日ばかりに、御迎へにまゐり來む。」八月十五日ばかりの月に、」入相ばかりに、いつばかり、」

第三一五節　がり。「ノ許へ」ノ意ナリ、「文ハ大輔がりやれ、と宣ふ。」(浮舟)紀の有恒がり行きたるに、」(伊勢物語)伊豆守の女にて居たりけるがりに、文やる。」(落久保、一)

第三一六節　づつ。(宛)「各宛」ノ意ヲナス、「鶏卵を、十づゝ十は、かさぬども、」(伊勢物語)一人づゝ、少しづゝ、」

第三一七節　など。(抔)一ニ定メズ、大畧ニ指シ示ス意ヲナス、「何事ぞ、など問ふ、」行くべし、など言ふ、」馬になど乘りて、」

第三一八節　以上、其著キモノナリ。又「夜ノ明クルおろ起キ出デテ」、「元祿十年ごろ起リタル」、「牛ほど大ナル」、「馬ぐらゐ捷シ」、「出來タルだけ送ル」ナド用ヰル「頃」、「程」、「位」、「丈」ナドモ、名詞ヲ、直ニ副詞ニ用ヰルニテ、此ノ類ノ用法ナリ。

文章篇

第三一九節　言語ヲ書ニ筆シテ、其思想ノ完結シタルヲ、「文」、又ハ、「文章」トイヒ、未ダ完結セザルヲ、「句」トイフ。文章篇ハ、個々ノ單語ノ相關係スルヨリ起ル法則、及ビ、其法則ニ據リテ、文、又ハ、句ヲ構成スル法則ヲ講ズ、從來、コレヲ、「てにをはのかけあひ」トモイフ。

○主語
○説明語

主語　説明語

第三二〇節　主語（シュゴ）。説明語（セツメイゴ）。人ノ思想ノ上ニ、先ヅ、主トシテ浮ブ事物アリテ、次ニ、コレニ伴フハ、其事物ノ動作、作用、形狀、性質、等ナリ。「花、

咲く。」志、堅し。」ナドイフニ、「花」又ハ、「志」ハ、先ヅ、心ニ浮ブ事物ニテ、次ニ、「咲く、」(或ハ、「落つ、」ナドイヒテ、「花」ノ作用ヲ述ベ、又ハ、「堅し、」(或ハ、「薄し、」ナドイヒテ、「志」ノ性質ヲ述ブ。「花、」又「志、」ハ、其作用ヲ起シ、又ハ、其性質ヲ呈スル主タル語ナレバ、主語(又ハ文主(ブンシュ))ト稱シ、「咲く、」又ハ、「堅し」ハ、其ノ主ノ作用、性質、ヲ説明スル語ナレバ、説明語ト稱ス。

主語　説明語
花、　咲く。

主語　説明語
志、　堅し。

主語、上ニ居リ、説明語、下ニ居ルヲ、正則トス。主語ト説明語トヲ具シタルハ、文ナリ、文ニハ、必ズ、主語ト説明語トアルヲ要ス。

○客語

客語

客語(カクゴ)。説明語ノ、「有對自動詞」又ハ、「單對他動詞」、「複對他動詞」ナルキハ、各、其標準ノ語、又ハ、目的ノ語ヲ要ス。其標準、又ハ、目的ノ語ヲ、客語トイフ。客語ハ、主語ト説明語トノ間ニ居ルヲ、正則トス。

主語　客語　説明語
水は、低きに　就く。

主語　客語　説明語
火は、物を　乾(カワ)かす。

主語　客語　説明語
風は、波を　岸に　寄す。

○左ノ如キハ、二ツノ名詞、共ニ主語ナレド、下ナルヲ、姑ク、客語トモ見、或ハ、「なり、」「たり、」ト合ハセテ、説明語トモ見ル。

主語　客語　説明語
水は、流動物　なり。

主語　客語　説明語
正成は、忠臣　なり。

主語　説明語
鈴屋の翁は、宣長なり。

主語　説明語
君、君たり。

主語　説明語
臣、臣たり。

修飾語　主部　客部　説明部

○修飾語

第三十三節

主部
客部
説明部

修飾語。主部。客部。説明部。主語ニ、他語ヲ添ヘテ、其意義ヲ、種々ニ修飾スルコトアリ、客語、説明語、ニ於ケルモ、然リ、其語ヲ、修飾語トイフ。修飾語ハ、其添フベキ語ノ上ニ居ルヲ、正則トス。

主語ト、其修飾語トヲ合セテ、客部トシ、説明語ト、其修飾語トヲ合セテ、説明部トス。此ノ三部、多クハ、各、句ヲ成シ、部ノ長キモノハ、更ニ、數句ニ分ル。

修飾語　主語
梅の　花、
主部―句

修飾語　説明語
早く　咲く。
説明部―句

修飾語　主語
勉むる志、
主部―句

修飾語　説明語
愈、　堅し。
説明部―句

第三十四節

○修飾語ハ、幾語ヲモ重ヌ。

修飾語　主語
燻りなる火は、
主部―句

修飾語　客語
濡れたる物を、
客部―句

修飾語　説明語
忽に　乾かす。
説明部―句

修　修　主
我が園の梅の花、
主部―句

修　修
雪の中に、
句

修
逸早く、
句

説
咲き出でぬ。
句

説―明―部

○呼掛ニ用ヰル名詞モ、主語ニテ、命令、禁止、ノ語モ、説明語ナリ。
(命令、禁止、ノ主語ハ、多クハ、呼掛ノ名詞ナリ、)

主　客
皆人は、花の衣に、
説
なりぬなり、

主
苔の袂よ、
客
乾きだに
説
せよ。

修　客　説
今更に、山へ　歸るな、
主　修
時鳥、聲の限りは、
修
我が宿に
説
鳴け。

説―明―部

第三二五節

○主語、客語、説明語、無クトモ、意ノ、分明ニ解セラルベキハ、省カル、「アリ」、左ノ如シ。(括弧ノ内ナル語ハ、補塡セルナリ、)

(我等、)かくて、宇多の松原を行き過ぐ。その松の數、
(主)(客)(説)(主)(説)(説)(説)

(アラム、)幾そばく幾千年歴たり、こ(イフ「コヲ」)(我等、)
(説)(説)(説)(説)(説)(説)

知らず。(土佐日記)
(説)

第三二六節

○接續詞ノ、全句、全文、ヲ接續スルモノハ、主部、客部、説明部、ノ外ニ立ツ。

志、堅し、且、望、遠し。
(説)(説)(説)(説)

雨、俄に降り出でぬ、加之、(シカノミナラズ)烈しき風、逆巻く浪を打寄せたり。
(主)(説)(説)(説)(説)(説)(説)(説)(説)(説)

感動詞ノ意ノ、全句、全文、ニ係ルモノモ、然リ。

あはれ、今年の秋も往ぬめり。
(修)(主)(説)(主)(説)

あはや、法皇の、流されさせおはしますぞ、や。
(主)(説)(説)(説)

風、あら〳〵しう吹きたる、は。思ふ心の、殘るらむ、かし。
(主)(修)(説)(説)(説)(説)(説)(説)

花の色は、移りにけり、な。月の、さむけく見ゆる、かな。
(主)(説)(主)(修)(説)(説)(説)(説)

第三二七節　○主語ト客語トハ、名詞(代名詞、數詞)ニテ成リ、說明語ハ、動詞、形容詞、助動詞ニテ成ル(共ニ、熟語ナルモアリ)

主語、客語、ノ修飾語ハ、連體法(動詞、形容詞、助動詞ノ)ノ意ヲ成シ、說明語ノ修飾語ハ、副詞ノ意ヲ成ス。

○枕詞

枕詞

第三二八節　枕詞。(マクラコトバ)　修飾語ノ一種ニ、枕詞トイフモノアリ。名詞ヲ修飾スルハ、「ひさかたの、天、(アメ)」「あらがねの、土、」「あしひきの、山、」「あらたまの、年、」「ちはやぶる、神、」ナドノ如ク、動詞ヲ修飾スルハ、「刈菰(カリコモ)の、亂るゝ、」「梓弓(アヅサユミ)、引く、」「玉櫛笥(タマクシゲ)、明(ア)く、」ノ如ク、形容詞ニハ、「ぬばたまの、黑き、」「眞木柱(マキバシラ)、太き、」「菅(スガ)の根の、長き、」ノ如ク、副詞ニハ、「をのゝめの、ほがら〳〵と、」「つがの木の、いやつぎつぎに、」ノ如シ。(修飾スルハ、以上、四樣ニ限ル、)而シテ、某(ソレ)ノ語ニハ、某ノ枕詞ヲ冠ス、ト局(カギ)レル所アリテ、用ヰラル。

第三二九節　枕詞ハ、古代ノ用語ニシテ、其數、數百アリ、其用ハ、專ラ歌文ノ口調(クチデウ)ノ足ラザルヲ、調ヘムトスルニ起リ、且ハ、言辭ヲ飾ルモノナリト云フ。今世ニアリテハ、和歌ニハ、常ニ用ヰレモ、文章ニハ、其體ノ古キモノニノミ用ヰル。又、用ヰルト、用ヰヌトハ、其場合ニ因ルノミニテ、一定ノ則アルニアラズ。而シテ、古代ノ用語ナルガ故ニ、其意義ノ解セラレヌモノモアリ、唯、某(ソレ)ノ枕詞ハ、某ノ語ニ用ヰルモノトノミ知リテアルベシ。

○枕詞ハ、一語、五音ノモノ、最モ多シ、上ニ列擧セルモノニ就キテ知ルベシ、又、四音、ナルモアリ「空見(ソラミ)つ、大和(ヤマト)、」「不知火(シラヌヒ)、筑紫、」「押照(オシテ)る、難(ナニ)

波、」ノ如シ。

○聯構文

第三三〇節

聯構文

聯構文。二文ヲ聯絡セシメテ、一文ニ構成スルヲ聯構文トイフ。然ルキハ、上ナル文ノ説明語ニ、中止法ヲ用ヰ、或ハ、豆爾波ヲ添ヘテ、聯絡セシメ、文ヲ變ジテ句トス。三文以上ナルモ、然リ。

主説 花、咲き、主説 鳥、鳴く。　主説 志、堅く、主説 望、遠し。

主説 水、清ければ、主説 大魚、棲まず。　主説 春、過ぎて、主説 夏、來たるらし。

主説 君、君たれども、主説 臣、臣たらず。　主説 日、暮れかゝるに、主説 宿るべき所、主説 遠し。

第三三一節

修 櫻散る、主 木の下風は、説 寒からで、主部 修 空に知られぬ、主 雪ぞ、主部 説 降りける。

○一個ノ主語ニ、數個ノ客語、説明語、アルアリ。數個ノ主語ニ、一個、若シクハ、數個ノ客語、説明語、アルアリ。亦、聯構文ノ一體ニテ、別テバ、數個ノ文ヲ成ス。

主 重盛は、客 君に、客 忠を 説 致し、客 父に、客 孝を 説 竭せり。

主 第一軍は、客 平壤を 説 陷れて、客 九連城を 説 取り、主 第二軍は、客 金州城を 説 拔きて、客 旅順口を 説 占めたり。

主 主 客 説
忠、孝は、國體の精華なり。

主 主 客 説
我も、人も、歴史をも、地理をも、學びたり。

○挿入文

第三十一節

挿入文

挿入文。一文中ニ、他文ヲ挿ムヲ、挿入文トス。其文ヲ、豆爾波、又ハ、接尾語等ニテ承ケテ、他ノ説明語ノ修飾語、又ハ、客語トスルモ、挿入文ト見ル。

主 説 主 説 主 説
肴こそ、無けれ、『人は、おづまりぬらむ。』『さりぬべき物や、ある。』と、

索めノ修飾語

主 客 修
(君、肴ヲ)

説 明 部
いづくまでも 索めたまへ。(徒然草)

修 主 説
影おほる、霜夜の月ぞ、『秋をおきて、時おそあれ。』と、

修 主 説
あれノ修 さやけかりノ修飾語

主 部
る。(新葉、六)

○倒置句

第三十二節

倒置句

倒置句。主語、客語、説明語、修飾語等ノ、正當ノ位置ヲ顚倒セシメテ用ヰルヿアリコレヲ倒置句トイフ。

「人には告げよ、海人の釣舟。」(古今、九)移りも行くか、人の心の。」同、

十五）かねてぞ見ゆる君が千歳は。」（同、二十）見せばや、人に夜の
けしきを。」（金葉、七）訪へかし、人の、花の盛りを。」（續古今、二）思ひきや、
君なき宿を、行きて見むとは。」（後撰、二十）
「此の歌は、ある人、ならの帝の御歌なり、こなむ申す。」（古今、五）「宜
も、昔の男は、棹はうがつ、波のうへの月を、舟はおそふ、海のう
ちの空を、とは言ひけむ。」（土佐日記）
「サテモ、競ヲ、宗盛、年來ノ主ヲ捨テ、他人ノ門蹈マムズル者、ト
思ヒケムコノ、アウナサヨ。」（盛衰記、三位入道入寺）望み、かなはねば、
恨みもあれ、をかじ、うき世をいとひ、誠の道に入りなむには、
とぞ宣ひける。」（平家、少將請受）安ンゾ知ラム、其事アルヲ。我窃ニ
聞ク、敵國ニ内亂アリト。知ラズ、其事ノ成就セムヤ否ヤヲ。請
フ、君ガ、分明ニ、説明セラレムコヲ。」

○言掛、秀句

第三三四節

言掛　秀句

言掛。秀句。同音、異義、ノ語ヲ、同時ニ、二樣ノ意ニ用ヰ、又ハ、上、
下、二樣ノ用ヲ兼ヲシムルコアリ、コレヲ、言掛、又ハ、秀句、トイフ。
但シ、和歌、謠物、風流文、紀行文、ナド、流麗婉轉ヲ旨トスルモノニ
用ヰル、記事、叙事、ノ文ニハ、用ヰ難シ。
「いつか我が身の、をはり（終、尾張）なる、熱田の八劍、伏し拜み、汐干
に今や、（成）鳴海潟、傾く月に、道見えて、明けぬ暮れぬと、行く道
の、末はいづくと、（遠）遠江、濱名の橋の、夕汐に、引く人もなき、捨
小舟、沈みはてぬる、身にしあれば、誰かあはれと、（云）夕暮の、晩
鐘鳴れば、今はとて、池田の宿に、着き給ふ。」（太平記、二）

「立ちわかれ、いなば(往、因幡)の山の、峯に生ふる、まつ(松、待)とし聞かば、今歸り來む。」(古今、八)世の中を、そむきにては、來しかども、なほ憂き事は、おほ(多、大)原の里。」(新古今、十七)陸奥の、いはでおもふは、(岩手、信夫、不言而忍)えぞ(得、蝦夷)知らぬ、かきつくしてよ、坪の石文。」(同、十八)淵瀬とも、いさや(知ラズ)白波、立ちさわぐ。」(後撰、九)

○結法

結法

第三節五節　結法。動詞、形容詞、助動詞ノ、一句、一文、ノ末ヲ結ブニ、三樣ノ法アリ。「尋常ノ結法」ぞ、なむ、や、か、ノ結法、おそノ結法、」是レナリ。

第三節六節　○尋常ノ結法。尋常、文句ヲ結ブニハ、第一活用、即チ、第一終止法ヲ用ヰル。

尋常ノ結法

「戌の時に門出す、」其由、いさゝか、物に書きつく、」和泉の國まで、たひらかに、と願ひ立つ、」大津より、浦戸をさして、漕ぎ出づ、」宇多の松原を行き過ぐ、」米、酒、あば〳〵與る、」黑鳥といふ鳥、巖の上に集り居り。」その巖の下に、波、白く打寄す。」海賊、追ひ來、といふおと、絶えず聞ゆ。」かぢ取、黑き雲、俄に出で來ぬ、風も吹きぬべし、御舟、返してむ、と言ひて歸る。」此の間に、雨、降りぬ、いとわびし。」かぢ取等の、北風惡し、と言へば、船出さず。」(以上、土佐日記)忘れ草、植うとだに聞く、ものならば、」(伊勢物語)女、打ち泣きて、寐て、」(同)おのれが許に、めでたき琴、侍り、それにかへさせ給へ。」(枕草紙)我れ落ちにき、と人に語るな。」(古今)空しく一年を歴、專斷するおとを得、」月、立ちにけり。」夜、明けたり。」日を暮らしつ、」名を成さず、」功を立てさず、」書を讀まじむ、」人に擊たる、」世に

捨てらる、」

第三三七節

○ぞ、なむ、や、か、ノ結法。若シ、文句中ニ、第二類豆爾波ノ「ぞ、」なむ、」又ハ、「や、」か、」ノアルトキハ、其末ヲ結ブニ、第二活用、即チ第二終止法ヲ用ヰル、コレヲ、「ぞ、なむ、や、か、ノ係、」ぞ、なむ、や、か、ノ結、」トイフ。

第三三八節

ぞノ結法

「我ぞ行く。」行きぞわづらふ、」雨さへぞ降る。」我が世とぞ思ふ、」花ぞ落つる。」命ぞ生くる。」早くぞ過ぐる、」教をぞ受くる、」然ぞおぼゆる、」花をぞ見る、」友ぞ訪ひ來る。」勉めてぞする、」神にぞおはする。」老いてぞ死ぬる、」ひとりぞ往ぬる、」我のみぞある。」家にぞ居る、」今も昔も斯くぞ侍る、」見るぞ善き、」聞くぞ樂しき、」名をぞ取らする、」利をぞ得さする、」人にぞ待たるゝ、」然ぞあらぬ、」焉ぞ取るべき、」名をぞ得つる、」春ぞ過ぎぬる。」十年を(トセ)ぞ歴たる、」今ぞ來(コ)む、」きのふぞ行きし、」鴈ぞ鳴くなる。」緑なる、ひとつ草とぞ、春は見し、」秋はいろ〳〵の、花にぞありける。」(古今、四)近くてぞ、色はまされる、青柳の、絲はよりてぞ、見るべかりける。」(拾遺、一)物も言はで、ながめてぞふる、山吹の花に心ぞ、うつろひぬらむ。」(同、一)今日來ずば、明日は雪とぞ、降りなまし、」(古今、一)雪消(ユキゲ)の水ぞ、今まさるらし。」(同、六)

第三三九節

○「なぞ」ハ、副詞ナレド、「係(カヽリ)」トナリテ、「ぞ」ノ結法ニ從フ、「なに、ぞ、」ノ約(ヅヽ)リナレバナリ、「幾世しも、あらじ我身を、なぞもかく、海人(アマ)の刈藻に、思ひ亂るゝ。」(古今、十八)ことならば、思はずとやは、言ひはてぬ、なぞ世の中の、玉襷(タマダスキ)なる。」(同、十九)

第三四〇節

なむノ結法

○「風になむ散る、」近くなむ見ゆる、」人になむ任する、」身をなむ恨むる、」母をなむ戀ふる、」逢はでなむ往ぬる、」斯くなむある、」冬なむ寒き。」これなむそれなる。」無きなむまされる。」家にな

第三四一節　やノ結法

第三四二節　かノ結法

むありし、」人になむありける。

○「花や咲く。」風や吹く。」斯くや思ふ、」遲しこや待つ、」年や暮るゝ。」敵にや畏るゝ、」身をや恨むる、」恩にや報ゆる、」行きてや見る、」人や來る。」行きやする、」知らずやある、」夜や長き。」年や久しき。」惜しくやあらぬ、」人にや遇はむ、」風や解くらむ、」櫻花、今や散るらし。」思ひやせし、

○「何をか取る、」いかにか思ふ、」花か落つる。」誰にか任する、」何れの時にか忘るゝ、」人か居る。」友か來る。」夫れかある。」誰かおはする。」何れか好き。」何とかすべき、」神代より、幾代か歷にし、」きのふか花の散るを惜みし、」(新古今、五)世の中は、何か常なる。」いづれかまされる。」いづくにかあらむ、」いかにかせまし、」けふ降る雨に、散りか過ぎなむ、」(萬葉、八)まだ見ぬ人の聞きかなやまむ。」(明石)小夜かふけぬる、千鳥鳴くなり。」(千載、六)

第三四三節

○「いかゞ」ハ、副詞ナレド、「係」トナリテ、「か」ノ結法ニ從フ、「いかに、か、」ノ約リナレバナリ、(音便ニテ濁ル、)「いかゞ思へる、」いかゞおぼさるゝ、」いかゞすべき、」いかゞ言ひつる、」

第三四四節　こそノ結法

○こそノ結法。　又、文句中ニ、第二類豆爾波ノ「こそ」ノ加ハレルトキハ、他ニ、「そ、」なむ、」や、」か、」アリトモ、其末ヲ結ブニ、第三活用、即チ、第三終止法ヲ用ヰル、コレヲ「こそノ係、」こそノ結」トイフ。

「我こそ行け。」春をこそ待て、」斯くこそ思へ、」花こそ落つれ。」身をこそ恨むれ、」人にこそ任すれ、」ありとこそ見ゆれ、」父にこそ似れ、」衣をこそ着れ、」冬こそ來れ。」行きこそすれ、」戰ひてこそ死ぬれ、」先きにこそ往ぬれ、」待ちてこそあれ、」家にこそ居れ、」路こそ無けれ。」ちゞに物こそ、悲しけれ。」かくこそあるべけ

れ、」さもこそ思はるれ、」人こそ見えね。」えこそ行かざれ、」花をこそ見つれ、」夜こそ明けぬれ。」日をこそ歴たれ、」名にこそ立てれ、」斯くこそありけれ、」行きてこそ見め、」雪このみこそ、花は散るらめ。」逢ふまでの、形見とてこそ、とゞめけめ、」春行くこゝそ、よそに見ましか、」跡もなくこそ、かき消ちて、失せにしか、」松の音に、風の調を、任せては、立田姫こそ、秋はひくらし。」(後撰、五)

第三四五節 命令、禁止ノ結法

○右ノ外ニ、尚、左ノ數樣ノ結法アリテ、上ニ「ぞ」、「や」、「こそ」、等ノ、アルト無キトニ拘ハラズ、末ヲ結ブ。

○命令、及ビ、禁止、ノ結法。動詞、助動詞ノ、命令法トナレルモノ、又ハ、禁止ノ副詞ニ修飾セラレタルモノモ、文句ノ末ヲ結ブ。

「唐人も、船を浮べて、遊ぶとふ、今日ぞ我が兄子、花鬘せよ。」(萬葉、十九)皆人は、花の衣に、なりぬなり、苔の袂よ、かわきだにせよ。」

第三四六節 呼掛ノ結法

(古今、十六)今更に、山へ歸るな、郭公、聲のかぎりは、我が宿に鳴け。」(古今、三)東風吹かば、匂ひおこせよ、梅の花、あるじなしとて、春を忘るな。」(拾遺、十六)都人、さこそ待つとも、時鳥、同じ深山の、友な忘れそ。」(新拾遺、三)己レガ欲セザル所ヲバ、人ニ施スヿ勿レ。」

○呼掛ノ結法。呼掛クル語意ニテ、文ヲ結ブヿアリ。但シ、上ニ、必ズ、「の」、又ハ「が」アリテ、下ヲ、形容詞ニテ結ブ場合ニ限ル。

「秋萩を、おがらみふせて、鳴く鹿の、目には見えずて、音のさやけさ。」(古今、四)風をだに、待ちてぞ花の、散りなまし、心づからに、うつろふが憂さ。」(後撰、三)絶えはつる、ものとは見つゝ、蜘蛛の、絲をたのめる、(ガ)心細さよ。」(同、九)よのみじかくて、明くる(ガ)わびしさ。」(同、十二)捨てられむ、おとこの、あさましさよ。」思ひ得たる、おとこの、うれしさよ。」

第三四七節　挿入文ノ結法

○挿入文ナルハ、各自ニ結ブ。

「看こそ、無けれ、『人は、をづまりぬらむ、』さりぬべきものや、ある、と、いづくまでも、索めたまへ。」外より來る者なごぞ、『殿は、いかにかならせたまへる、』など問ふ。」經聞きなごするにも、目をくばりながら、見ゐたるゐそ、『罪や、得らむ、』こおぼゆれ。」(枕草子)古里を、出でにし後は、月影(ヲ)ぞ、『昔も見き、』こ思ひやらるゝ。」(榮華)影ゐほる、霜夜の月ぞ、『秋をおきて、時ゐそあれ』こ、さやけかりける。」(新葉、六)

第三四八節　聯構文ノ轉結

○聯構文ノ、數文聯絡スルモノハ、結ヲ轉ズ。

「都人、さこそ待つこも、郭公、同じ深山の、友な忘れそ。」(新拾遺、三)雪かこぞ、よそに見つれど、櫻花、折りては似たる、色なかりけり。」(玉葉、二)郭公、一聲ここそ、思ひしに、待ちえてかはる、我心かな。」(續千載、三)下にこそ、人の心も、うつろふを、色にみせたる、山櫻かな。」(續古今、十七)年頃、善く具しつる人々なむ、別れがたく思ひて、云々、夜深けぬ。」(土佐日記)

第三四九節　言掛ノ轉結

○言掛ナルモ、結ヲ轉ズ。

「小夜千鳥、聲こそ近く、(ナレ)鳴海潟、傾く月に、潮や滿つらむ。」(新古今、六)いづくにか、今宵は宿を、(借ラム)狩衣、(紐結フ)日も夕暮の、峯のあらしに。」(同、十)明け暮れは、昔をのみぞ、(思ブ)忍草、葉末の露に、袖ぬらしつゝ。」(同、十七)

第三五〇節　○呼應

呼應

上下ノ語義ヲ、互ニ相應ズルヤウ、掛ケ合セテ用ヰルヲ、呼應(コカウ)トス。呼應ニ、左ノ數樣ノ法アリ。

第三五二節　自他ノ呼應

○自、他、ノ呼應。　自動詞ハ、自動詞ト相伴ヒ、他動詞ハ、他動詞ト相伴フベク用ヰ別クルヲ、「自他ノ呼應」トス。

「身を立て、道を行ひ、名を後世に揚ぐ。」(孝經)身は立ち、道は行はれ、名は後世に揚がる。「其家を齊へむとする者は、先づ其身を修む。」身修りて、後に、家齊ふ。」(大學)

異事ノ異行ヲ記シ、動作ノ反對ヲ表スルニハ、自、他、ヲ互用ス。

「體操、終らば、(生徒)唱歌を始めむ。」(生徒)唱歌を終へば、體操、始らむ。」視れども見えず、聽けども聞えず、」戰へば勝ち、攻むれば取る、」

第三五三節　所能ノ呼應

○能、所、ノ呼應。　能相、所相、各、相伴ハシムルヲ、「能所ノ呼應」トス。

「我、他を救ふ。」他、我に救はる。」他、我を誡む。」我、他に誡めらる。」日本、支那を攻めて、其地を取りたり。」支那、日本に攻められて、其地を取られたり。」

第三五三節　時ノ呼應

異事ノ異行ヲ記スニハ、能、所、ヲ互用ス。

「賊、人家に入りて、(人家)財物を盜まれたり。」左軍は勝ちたれど、右軍は敗られたり。」

○時ノ呼應。　現在、過去、未來、各、相伴ハシムルヲ、「時ノ呼應」トス。

「國に賢君あるは、人民の慶福なり。」國に賢君ありしは、人民の慶福なりき。」國に賢君あらむは、人民の慶福ならむ。」

第三五四節

且爾波ノ「ば、」「ども、」「ど、」「ども、」ノ未定、既定、ナルモ、時ノ呼應ニ准ズ。

「今日、空、晴れたれば、人々、出で行きたり。」昨日、空、晴れしかば、人々、出で行きき。」明日、空、晴れば、人々、出で行かむ。」學校を建つとも、基本金を備へずば、維持し難からむ。」學校を建てたれど、基本金をも備へたれば、維持し難からず。」

第三五五節

現在、過去、未來、各自ニ、此ノ時ヨリ、彼ノ時ヲイフニハ、互用ス。

「國に賢君あるは、永く、人民の慶福となりなむ。」學校を建てたれども、基本金を備へずば、維持し難からむ。」學校を建て、基本金をも備へたれば、維持し難からざらむ。」

第三五六節

中止法ナルハ、末ノ語ノ「時」ニ從フ。

「身を立て、道を行ひ、名を後世に揚げたり。」身を立て、道を行ひ、名を後世に揚げむ。」小學を終へば、中學を歴て、大學に入らむ。」小學を歴て、中學を終へしかば、大學に入りき。」

第三五七節
反語ノ呼應

○反語ノ呼應。疑ヒノ「や、か、」ヲ用ヰテ、(甲)「世の中は、何か常なる。」(乙)秋の「別れは、惜しくやはあらぬ。」ナドノミイフ文ハ、(甲)「世ノ中ニテハ、何物ガ常住ナルカ。」(乙)秋ノ別レハ、惜シクハアラヌカ。」ト單純ニ疑問スルマデノ意ナリ。然ルニ、(甲)下ニ「飛鳥川、きのふの淵ぞ、けふは瀬となる。」ト「變遷ノ常ナラヌ意」ヲ確言スル

第三五八節

キハ、コレニ呼應シ反動シテ、「何か常なる、」ノ疑問ハ、却テ、打消ニ變ジテ、「何モ常ナラズ、」ノ意トナリ、コレニ反シテ、(乙)上ニ、「もろともに、なきて留めよ、きりぎりす、」ト「別レノ惜シキ意」ヲ確言スルキハ、「惜しくやはあらぬ、」ノ打消ノ疑問ハ、却テ確定ニ變ジテ、「惜シクアラウゾ、」ノ意トナル、コレヲ反語トイフ。單純ノ疑問ナルト、反語ナルトハ、湊合セル他ノ文句ノ意ニ呼應シテ、分ル。

反語ニ用ヰル「や、か、」ニハ、感動詞ノ「は、」又ハ「も」ヲ添ヘテ、「やは、かは、」やも、かも、」トモ用ヰル。(以上、六樣ニ限ル。)

や。　やは。　やも。　か。　かは。　かも。　他語ノ上ニ居ルモノ。

「見てのみや、人に語らむ、見テノミ語ラムカ、見テノミ語ラジ、山櫻、手毎に折りて、家苞にせむ。」(古今、一)植ゑし時、花まちごほに、ありし菊、うつろふ秋

第三五九節

に、あはむこや見し。（ト見シカ、見ザリキ、）（古今、五）

「そこひなき、淵やはさわぐ、（サワグカ、サワガズ、）山川の、淺き瀨にこそ、あだ波は立て。」（古今、十四）郭公、聲も聞えず、山彦は、外（ホカ）に鳴く音を、こたへやはせぬ。（何トテ、答ヘハセヌゾ、答ヘヨカシ、）（古今、三）

○「朝露は、消え殘りても、ありぬべし、誰れかこの世を、賴みはつべき。（賴ミハツベキカ、賴ミハツベカラズ、）（伊勢物語）いつはりと、思ふものから、今更に、誰が誠をか、我は賴まむ。（賴マムカ、賴マジ、）（古今、十四）

「君をのみ、思ひこし路の、あら山は、いつかは雪の、消ゆる時ある。（アルカ、ナシ、）（古今、十八）石見潟、何かはつらき、（何ガツラキカ、ツラカラズ、）つらからば、うらみがてらに、來ても見よかし。」（拾遺、十九）

や。やは。やも。か。かは。かも。他語ノ下ニ居ルモノ。

「咲かざらば、櫻を人の、折らましや、（折ラジ、）櫻の仇は、櫻なりけり。」

（後拾遺、二十）人の上にだに、言ふことなかりし人なり、いはむや、更に、親（オヤ）の上に言ひてむや。（イハジ、）（宇津保、たゞこそ）思はざらむや、（オモハム、）

習（ナラ）はじや、（ナラハム、）亦、悅（シカラズヤ、ヨロコバシ、）我、豈ニ敢テセムヤ、（敢テセズ、）

「散る花の、なくにしとまる、ものならば、我れ鶯に、劣らましや。（オトラジ、）（古今、二）今更に、雪降らめやも、（降ラジ、）かげろふの、燃ゆる春日と、なりにしものを。」（新古今、一）

○「かゝる夜の月に、こゝろやすく夢みる人は、あるもの（ナル）か。（アルモノナラズ、）（横笛）うき世をば、そむかばけふも、そむきなむ、明日（ア）もありとは、賴むべき身（ナル）か。（身ナラズ、）（拾遺、二十）

「悲しさを、かつは思ひも、なぐさめよ、誰もつひには、とまるべきかは。（トマルベカラズ、）（千載、九）かはるは人の、心のみ（ナル）かは、（ノミナラズ、）（詞花、七）

なほ〳〵見とも、飽かむ君（ナル）かも。（君ナラズ、）（万葉、二十）

第三六〇節　○又「なんぞ、驚かざらむ、オドロカム、」いつくんぞ、然らむ、然ラザラム、」いかんぞ、せざる、セヨ、」ナドモ「や、」か、」無ケレモ、上ニ、疑辭アルガ故ニ、反語トナル。（疑辭ノ下ニハ、反語ノ「や」モ付ク「ナシ」）

第三六一節　特性副詞ノ呼應　○特性副詞ノ呼應。副詞ノ中ニハ、一種特性ノモノアリテ、其意義ヲ、下ノ語ニ係ケテ、一定ノ用法ヲ起サシムルモノアリ。コレヲ、「特性副詞ノ呼應」トス。

第三六二節　をさ〳〵。下ハ、必ズ、打消ノ語ニテ承ク。

「をさ〳〵立ちおくれず、」世の中の事、をさ〳〵聞えぬを、」をさ〳〵劣るまじく、」をさ〳〵、出でまじらひ給ふことなし。」

第三六三節　よも。よに。よにも。下ニハ、打消ノ「じ」ト限ル。

「よも知らじ、」よもながらへじ、」今は逃ぐこも、よもにがさじ。」よに逢坂の、關はゆるさじ、」（後拾遺、十六）

第三六四節　○「決して、」絶えて、」少しも、」毫も、」一も、」ナドモ、下ハ、打消ニ限ル。いさ。下ニハ、「知らず、」トイフ語ト限ル。

「人はいさ、心も知らず、」淵瀬こも、いさやこら（言掛）波、立ちさわぐ。」（後撰、九）

第三六五節　え。（得）下ヲ、打消ノ語、又ハ、反語ニテ承ク。

「え言はず、」えぞ知らぬ、」えこそ見わかね、」えあらじ、」

第三六六節　さら〳〵、に。亦、下ヲ、打消、又ハ、禁止ノ語、反語、等ニテ承ク。

「さら〳〵思はず、」さら〳〵、厭ふべきにあらず、」ゆめ、さら〳〵に、人に見せ給ふな、」（宇津保、俊蔭）

第三六七節　ゆめ。（努力）下ニハ、禁止、又ハ、打消ノ語ト限ル。

「ゆめ、見せ給ふな、」ゆめ、な乘りそ、」ゆめ〳〵、疑ふこと勿れ。」ゆめ〳〵、畏るゝことあるべからず。」

第三六八節

たとひ。(縱)　下ニ、必ズ、未定、又ハ、未來ノ語、反語、ヲ置ク。

「かゝる老法師の身には、たとひ、うれへ侍りとも、何の悔か侍らむ。」(薄雲)たとひ、いかなる御物怪なりとも、この老法師が、かくて候むにも、いかでか近づき奉るべき。」(平家、御產ノ卷)

第三六九節

あに。(豈)　必ズ、反語ニ應ズ。

「就中、今あらはるゝ所の怨靈も、我が寵恩を以て、人となりたる者ぞかし、たとひ、報謝の心を存せずとも、いかでか、豈に、障礙をなすべきや。」(御產の卷)豈に他あらむや。「豈に行くべけむや、」我れ豈に敢てせむや。」

第三七〇節

けだし。(蓋)　下ハ、必ズ、疑フ語、或ハ、未定、未來、推量ノ語ニ應ズ。

「けだし門より、かへすらむかも、」(萬葉、四)謂天蓋高不敢不局、謂地蓋厚不敢不蹐。」(詩經)蓋有之我未之見也。」

第三七一節

もし。(若)　亦、未定、未來、ノ語、疑フ語ニ應ズ。

「今日はもし、君もや訪ふと、ながむれむ、まだ跡もなき、庭の雪哉。」(新古今、六)「思ひ出でゝ、もしも尋ぬる、人あらば、ありとな言ひそ、定めなき世に。」(新古今、十八)

第三七二節

○スベテ、疑ヒ、又ハ、豫期スル意ノ副詞ノ、未來、未定、推量ノ語、反語ニ呼應スベキヿ、論ヲ待タズ。

「願はくは、花のもとにて、春死なむ、そのきさらぎの、望月の頃。」(續古今、十七)「疑ふらくは、これならむ。」恐らくは無けむ、願はくは聞かむ、顧ふに、此事ならむ。」いかにとならば、」いかにすとも、」

第三七三節

○過去、又ハ、未來ノ意ヲイフ副詞ノ、過去、未來ノ語ト呼應スベキヿモ、言フヲ待タズ。

「既に成りぬ、夙く學べり、」曩に謀りおきつ、」嘗て見たれば、」豫

て備へば、「昨日行きき、」去年失せてけれども、」

「明日行かば、來年逢はむ、」

略語　略句

○略語略句

第三七四節　略語。略句。一句、一文ノ中ニ、語句ヲ省略スルヿアリ、コレヲ、略語、又ハ、略句、ナドイフ。

語句ヲ省略スルニモ、法アリ、省略ストモ、分明ニ解セラルベキヲ省略ス。例ヘバ、「博愛を仁といふ、」ナドイフ文ニ、主語ハ無ケレ𪜈、「人」トイフ主語ノ、自ラ文外ニ解セラル、ハ、動詞(いふ)ニハ、主語アルベキモノナレバナリ、斯ク、主語ヲ略セル語句、常ニアリ、スベテ、説明語(動詞、形容詞、助動詞)アリテ、主語ナキハ、必ズ、文外ニアルベキモノナリ、ト知ルベシ。他動詞ハ、必ズ、「を」ヲ要ス、

サレバ「筆執りて、字書く、」トイフトモ、「を」ハ、言外ニ聞エ、「そ、」こそ」ハ、必ズ結法ヲ要ス、サレバ、「人々、感じあへりとぞ。」其振舞、實に、勇ましかりしことにこそ。」ナド記シタリトテ、下ニ結法ノ略セラレタルヿ、解セラルベシ。左ニ、成句、成文ノ若干ノ例ヲ示ス。

第三七五節　○「文時、維茂が舟の、おくれたりし(が、)ならし津より、室津に着きぬ。」(土佐日記)ある人の子の、わらはなる(が、)ひそかにいふ、まろ、この歌のかへしせむ、といふ。」(同)

第三七六節　○「夜や暗き、路(に)や惑へる、郭公、我が宿をしも、過ぎがてに鳴く。」(古今、三)古今(に)も、聞かず、和漢(に)も、ためしなし。」(正統記)夏(に)は、麻布を用ゐる、冬(に)は、綿布を用ゐる、

第三七七節　○「花(ヲ)散らす、風の宿り(ヲ)は、誰か知る、我に教へよ、行きて恨みむ。」(古今、二)植ゑし時、花見むとしも、思はぬに、咲き散る(ヲ)見れば、齢老いにけり。」(後撰、二)詩(ヲ)も作り、歌(ヲ)も詠む、」茶(ヲ)は飲めど、酒(ヲ)は飲まず、」

第三七八節　○「この歌は、柿本人麻呂が(歌)なり。」前の守も、今の(守)も、もろともに下りて、今のあるも、前の(アルジ)も、手取りかはして、」(土佐日記)日のうちに、物をふたゝび、思ふかな、疾く明け

第三七九節

ぬる(時)と、遲く暮るゝ(時)と。」(拾遺、十二)長さ(モノ)を取りて、短さ(モノ)を捨つ、」

第三八〇節

○「めぐりあひて、見しやそれ(ナル)とも、わかぬまに、雲がくれにし、夜の月影(ナルカナ。)」(新古今、十六)みだれ降り、曇れる冬の、晴れずのみ、つきせぬものや、まろが身の憂さ(ナルベキ。)」(好忠集)コレコソ、敵ノ運ノ盡クル所ノ死狂ヒ(ナレ)ヨ。」(太平記、七)誰れ聞けと、鳴く雁がね(ナル)など。」再びとだに、來べき春(ナル)かは。」三笠の山に、出でし月(ナル)かも。」峯の花(ナル)かな。」彼れぞ、聟の少將(ナル)な。」ありがたの世(ナリ)や。「讀ムヿ、數回(ナリ。)」今日休業(ス)」

第三八一節

○「人々、感じあへりとぞ(イヘル)」思ひいづるにつけて、かくなむ(詠ミケル)」神の助けあるにや(アラム)」仁政の、民を服するに因るにか(アラム)」人の疑も解けたり、とか(イフ)や、」いと、勇ましきことにこそ(アレ)」常に逢見む、ことをのみこそ(思ヘ)」

第三八二節

○「谷の戸を、閉ぢやはてつる、鶯の、待つに音せで、春も過ぎぬる(ハ。)」(拾遺、十六)吹く風の、さそふものとは、知りながら、散りぬる花の、强ひて戀しさ(カナ。)」(後撰、三)櫻花、散るとも知らで、月影を、(花)ある(コトヨ)とはかなく、思ひける哉。」(躬恒集)いかにして、出でゝは行きし(ダ)と問ふ。」郭公、なぞ(カ)我が宿に、一聲もせぬ。」時しも(コソ)あれ。今日しも(コソ)あれ。」

○「五月來(ツキコ)ば、鳴きも舊(フ)りなむ、郭公、まだしきほどの、聲を聞かば(ヨケム)や。」(古今、三)ひさかたの、月の桂も、秋はなほ、もみぢすれば(然ルニ)や、照りまさるらむ。」(同、四)いざ(出デ)させ給へ、といひて、前に立ちて、導きて行く。」(宇治拾遺、六)

第三八三節

○「老いぬれば、今年ばかりと、思ひこし(モノヲ、)また秋の夜の、月を見る哉。」(新敕撰、十六)人の草假名(サウガナ)かきたる草紙取りいでゝ、御覽ず、誰が(カキタル、)にか、あらむ。」(枕草紙、九)國人の心の常として、今は(カギリナリ、)とて、見えずなるを、」(土佐)かゝるなげきの、世になくやは(アル、)とおぼしなしつゝ、」(蜻)けしうも、思の外にも(アルカナ、)とあされて、」(若菜)露の命、惜しと(イフ)にはあらず、君をまた、見でや(死ナム)と思ふぞ、悲しかりける。」(拾遺、八)人知れず、今や(クル)今や(クル)と、ちはやぶる、神さぶるまで、君をころまて。」(新古今、十九)我が君は、千代に八千代に、さゞれ石の、いはほとなりて、苔のむすまで(マシマセ。)」(古今、七)我が衣手に、雪は降りつゝ(アリ。)」かはるは人の、心のみ(ナル)かは。」唯、歎息するのみ(ナリ。)」ましてこれを(言ハム)や、」

第三八四節

○「昔物語の(如キ)こゝちもするかな。」(手習)御消息も、いかゞ(アラム、)など聞え給へど、」(繪合)いつしか、出でさせ給はゞ(ヨカラム、)などさこえさするに、」(枕草紙)里にまかりいでゝ、まらせ給ひなむに(シカジ、)などさゝめく。」(槇柱)この月は、さりとも(ガハセム、)と宮人も待ちさこえ、」(紅葉賀)劍(ツルギ)を胸におしあて、今はかう(刺サム、)とぞ見えたりける。」(平家)

○解剖

解剖

第三八五節

解剖(カイボウ)。成文成句ヲ解キテ、其組織ヲ講ズルヲ「文章ノ解剖」トス、コレ、前陳ノ構文諸法則ヲ、反覆シ會得セシムル用ナリ。

語脈ノ解剖

先ヅ、文句中ノ單語ヲ、個々ニ解キテ、各語ノ種類、意義、用法、ヲ講ジテ、他語トノ關係ニ及ブ、コレヲ「語脈ノ解剖」トス。

文脈ノ解剖

次ニ、主部、客部、說明部、等ヲ分類シテ、其所屬ヲ講ジ、終ニ、文體(ブンテイ)、(聯構文、挿入文等)句體(クテイ)、(倒置句、言掛等)ニ及ブ、コレヲ「文脈ノ解剖」トス。

第三八六節

年の内に、

- 年 — 名詞、 — 第一類豆爾波、年ト内トヲ承接ス、
- 内 — 名詞、 — 第一類豆爾波、年の内トきにけりトヲ承接ス、
- 來にけりノ修飾語

- 主語 春 — 名詞、 — 第二類豆爾波、春トきにけりトヲ承接ス、
- 說明語 來(キ)に けり。 — 無對自動詞、加變、第五活用、(「に」ニ接スルニ因テ、)半過去ノ助動詞ノぬノ第五活用、(「けり」ニ接スルニ因テ、)過去ノ助動詞、第一活用、第一終止法、尋常ノ結法、(但シ、過去ノ意ナク、念ヲ推シテイフモノ、)

主部

說明部

- 主語 (吾人、) — 人代名詞、自稱、
- 客語 一年を、 — 名詞、 — 第一類豆爾波、一年ト言はむトヲ承接ス、

客部

- 客語 去年と や — 名詞、 — 第一類豆爾波、去年ト言はむトヲ承接ス、第二類豆爾波、言はむノ係、

客部

- 說明語 言は む。 — 複對他動詞、波行四段活用、第四活用、不定法、未來ノ助動詞、第二活用、第二終止法、やノ結法、

說明部

客語　今年　名詞、
　　と　第一類豆爾波、今年ト言はむトヲ承接ス、
　　や　第二類豆爾波、言はむノ係、
　　客部

説明語　言は　複對他動詞、波行四段活用、第四活用、不定法、
　　む。　未來ノ助動詞、第二活用、第二終止法、やノ結法、
　　説明部

右ノ歌ハ、二文ニテ成レリ。初ナルハ、主語、説明語、各、一個アリテ、全キ文ナリ。（内ニ倒置句アリ）末ナルハ、一個ノ主語ニ、二個ノ説明語アリテ、一頭、兩脚ノ聯構文ナリ、若シ、「吾人」（主語）ト、「一年を」（客語）ト、ヲ各自ニ設ケバ「吾人、一年を、去年とや言はむ。」吾人、一年を、今年とや言はむ。」ノ二文ヲ成スベシ。

主語　大日本　固有名詞、
　　は、　第二類豆爾波、大日本トなりトヲ承接ス、
　　主部

客語　神國　名詞、
説明語　なり。　指定ノ助動詞、第一活用、第一終止法、尋常ノ結法、

第三八七節

主語　天祖、名詞、

修飾語　開きノ　はじめて、副詞、「開き」ヲ修飾ス、
　　説明部

客語　基　名詞、
　　を　第一類豆爾波、基ト開きトヲ承接ス、
　　客部

説明語　開き、　單對他動詞、加行四段活用、第五活用、中止法、

主語　日神、名詞、

修飾語　傳へノ　長く、　形容詞、志幾活用、第四活用、副詞法、「傳へ」ヲ修飾ス

客語　統　名詞、
　　を　第一類豆爾波、統ト「傳へ」トヲ承接ス、
　　客部

説明語　傳へ　複對他動詞、波行下二段活用、第五活用、連用法、
　　給ふ。　無對自動詞、波行四段活用、第一活用、第一終止法、尋常ノ結法、
　　説明部

我　人代名詞、自稱、（第一類豆爾波、我ト國トヲ承接ス、）
が　名詞、（第一類豆爾波、國トありトヲ承接ス、）
ありノ修飾語
國　（第二類豆爾波、國にトありトヲ承接ス、）
（よ）
のみ、　指示代名詞、近稱、豆爾波ノのト合シテ、事ヲ指ス、
事ノ修飾語　この　名詞、（無對自動詞、良變、第五活用、中止法、）
主語　事、
説明語　あり、
無しノ修飾語　異朝　名詞、（第一類豆爾波、異朝ト無しトヲ承接ス、）
に　（第二類豆爾波、異朝にト無しトヲ承接ス、）
は、　指示代名詞、中稱、豆爾波ノのト合シテ、たぐひヲ指ス、
たぐひノ修飾語　その
主語　たぐひ、　有對自動詞、波行四段活用、第五活用、名詞法、
説明語　無し。　形容詞、志幾活用、第一活用、第一終止法、尋常ノ結法、

主部　説明部　説明部

この故ぬ、接續詞、
主語　（我）　人代名詞、自稱、（接尾語、名詞ニ接シテ名詞トシ、數アルナイフモノ、）　主部
（等）
客語　（大日本）　固有名詞、（第一類豆爾波、大日本トいふトヲ承接ス、）　客部
（を）
客語　神國　名詞、（第一類豆爾波、神國トいふトヲ承接ス、）　客部
と
説明語　いふ　（變對他動詞、波行四段活用、第二活用、「なり」ニ接スルニ因テ、）　説明部
なり。　（指定ノ助動詞、第一活用、第一終止法、尋常ノ結法、）

右ハ、四個ノ文ニテ成レリ。（主語ト結法トヲ見ヨ。）第一ナルハ、冒頭ニ、大旨ヲ述べ、第二ナルハ、二文ノ聯構文ニテ、第一文ノ理由ヲ解説シ、第三ナルモ、二文ノ聯構文ニテ、倒置句アリ、且、挿入文ニシテ、第二文ノ「長く傳へ給ふ、」ノ意ヲ敷衍シ、而シテ、第二文ト第四文トヲ、「此の故に」ニテ、接續シテ、第四文ハ、第一文ノ旨ヲ確定ス。

第三八八節　○左ノ文ノ語脈ヲ、解剖スベケレバ、文脈ヲ解剖シテ、試ルベシ。

「あはれ、(彼ハ)旅人に(テ)おそあ(ル)なれ、(我、彼ニ)あばし、宿(ヲ)假さむ、かし。」(宇津保、俊蔭)

「あはれ」ハ、感動詞ナリ。「彼」ハ、人代名詞、他稱ナリ。「は」第二類互爾波、「かれ」ト「ある」トヲ承接ス。「旅人」名詞ナリ。「にて」第一類、第三類ノ互爾波ノ合ヒタルニテ、「旅人」ト「ある」トヲ承接ス。「こそ」第二類互爾波、「旅人にて」ト「ある」トヲ承接シテ、「なれ」ノ「かゝり」ナリ。「ある」無對自動詞、良變、第二活用。(なれ」ニ接スルニ因リテ)「なれ」詠歎ノ助動詞、「なり」ノ第三活用、第三終止法、こそノ結法。「我」人代名詞、自稱。「彼」前ナルト同ジ。「に」第二類互爾波、「彼」ト「假さむ」トヲ承接ス。「あばし」副詞、「假さむ」ヲ修飾ス。「宿」名詞。「を」第一類互爾波、「宿」ト「假さむ」トヲ承接ス。「假さ」複對他動詞、佐行四段活用、第四活用、不定法。「む」未來ノ助動詞、第一活用、第一終止法、尋常ノ結法。「かし」感動詞。

第三八九節　○左ノ歌ノ文脈ヲ解剖スベケレバ、語脈ヲ解剖シテ試ルベシ。

「古里を、出でにし後は、月影ぞ、昔も見きと、思ひやらるゝ。」

此ノ如キ交錯セル語句ヲ解剖セムニハ、先ヅ、一首中ノ動詞ヲ求メテ摘ミ出ス。一首中ニ、「出づ」、「見る」、「思ふ」トイフ三個ノ動詞アルヲ認ム。動詞(説明語)ハ、主語ヲ要シ、又、客語ヲ要スルモアリ。因テ、省畧セル語ヲ補ヒテ、解剖スレバ、左ノ三文ヲ形作ル。

(い)　我れ(主)、古里を(客)出でにき(説)。

(は)　我れ(主)、月影をぞ(客)、思ひやらるゝ(説)。

(ろ)　我れ(主)、月影をば(客)、昔も(修)見き(説)。

(い)ノ文ノ末ノ「き」ヲ、其連體法ナル「し」ニ變ジテ、全文ヲ「後」トイフ名詞ノ修飾語トシ、「は」ノ互爾波ヲ添ヘ、全文ヲ句トシ、全句ヲ、更ニ、「思ひやらるゝ」ニ接續セシメテ、其修飾語トス。(ろ)ノ文ハ、元ト挿入文ナルヲ、「と」ノ互爾波ニテ承ケテ、「思ひやらるゝ」ニ接續セシメテ、其修飾語トス。

(は)ノ文ハ、「我」ヲ主語、「月影」ヲ客語、「思ひやらるゝ」ヲ説明語トシテ、主腦ノ文ヲ成シ、而シテ、(い)、(ろ)、ノ二文ヲバ、共ニ、説明語(思ひやらるゝ)ノ修飾語トシ、合シテハ、説明部トス。

我れ(主)、月影をぞ(客)、古里を出でにし後は、昔も(修)、それをば見き、と(説)思ひやらるゝ。
(説明部)

第三九〇節　○左ノ文ニ就キテ、語脈ヲモ文脈ヲモ、解剖シテ試ルベシ。

「父とも、師とも思ふは、養はれ、且、教へられたるに因る。」

○文中符號

第三九一節　談話ニテハ、聲ヲ斷續セシメテ、語意ノ斷續ヲ示スヿヲ得レモ、文ニ書キツヾクルトキハ、語句ノ斷續、識別シ難クシテ、誤解スルヿアリ、因テ、種々ノ符號ヲ付シテ、標識トス。

第三九二節　、文ノ行間、處々、字ノ右脚邊ニ付スルモノ。コレハ、讀ムニ、暫シ、聲ヲ切ルベキヲ示スナリ、コレヲ、讀點、又ハ、「よみ」、トイフ、此ノ點ハ、上下ノ語意ノ相離ルベキ所、又ハ、文、長ク連リテ、誦讀ニ、便好カラヌ所ニ付ス。

第三九三節　。コレモ、字ノ右脚邊ニ付スルモノ。コレハ、文意ノ、一結了

セルヲ示スモノナリ、コレヲ、句點、又ハ、「きり」、トイフ。

第三九四節　」字ノ左脚ニ付スルモノ。(句點ト共ニ付ス。) コレハ、段落ヲ示スモノニテ、勾畫トイフ。段落トハ、一文、或ハ、數文、相連リテ、文意ノ、一層廣ク完結シタル所ヲイフ。

一部ノ書ヲ大別シテ「篇」トシ、篇ヲ大別シテ「章」トシ、章ヲ大別シテ「節」トス。(必シモ、此ノ別ニ據ラザル書モアリ。)「段落」ハ、「節」ニ同ジク、或ハ、節中ノ大別トモス。

第三九五節　「」斯ク、小キ勾畫ヲ、語句ノ右肩ト左脚トニ付スルハ、他書ヨリ引用挿入セル語、句、又ハ、文中ノ人ノ談話ノ語句、ナドヲ示スナリ、或ハ、眼目ノ語句ノ長キモノニモ付ス。

第三九六節　(　)語句ノ上下ニ付ス、コレヲ、括弧トイフ、本文ト註釋文トノ別ヲナリ。

第三九七節　○行頭ニ付スル大圈ナリ、數文、相連ナルトキ、用ヰテ別ツ。

第三九八節　單柱。文中ノ眼目ノ語句ノ右旁ニ付ス。

第三九九節　雙柱。右ニ同ジ。

實尖點。行文ノ右旁ニ付ス、コレヲ、批點トモイフ、文句中ノ注意スベキ所、又ハ、佳境ニ入レル所ヲ示ス。

第四〇〇節　虛尖點。右ニ同ジ。

圈點。右ニ同ジ、但シ、一層重キニ付ス。

第四〇一節　○漢文ニモ、符號アリ。「讀書、得行之、不可不行、」(コレヲ鉤挑(コウテウ)トイフ)未嘗畢其業、有阜越衆人者、ナドナリ、スベテコレヲ反點(カヘリテン)トイフ、又、「上、中、下、」「甲、乙、丙、丁、」等ヲモ用ヰル。

闕字　○文中ニ帝王、朝廷、高貴ノ人ナドニ係ル稱號等ノ出デタルトキニ、敬ヒテ、其上ニ、一字、或ハ、二字ヲ闕キテ明ケオクコトアリ、コレヲ闕字(ケツジ)トイフ。

中等教育
日本文典　大尾

明治三十年一月五日印刷
明治三十年一月九日發行
明治三十一年一月第四版

尋常師範學校
尋常中學校
國語科教科用
明治三十年七月五日
文部省檢定濟

著發兼著者　大槻文彦　東京市下谷區上根岸町百十番地
發行者　野村宗十郎　東京市京橋區築地三丁目十五番地
印刷者　株式會社東京築地活版製造所　東京市京橋區築地二丁目十七番地
印刷所　吉川半七　東京市京橋區南傳馬町壹丁目
關東賣捌所　三木佐助　大坂市心齋橋筋北久寶寺町角
關西賣捌所

中等教育日本文典附
定價金貳拾五錢

版權所有

第七表　助動詞ト助動詞トノ連續

「なり」ノ下ニ＊アルハ、詠歎、無キハ、指定、

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第五活用
所相勢相	(1)る (2)らる	るる らるる	るれ らるれ	れられ	れられ
	(3)る (4)らる	る らる	れ られ	れられ	れられ
使役相	(5)す (6)さす	する さする	すれ さすれ	せさせ	せさせ
	(7)む	むる	むれ	めじまし	めじまし
	らむ めり べし なり＊ まじ らし	なり			
指定	(8)なり	なる	なれ	なら	なり
	(9)たり	たる	たれ	たら	たり
				ねずめじまし	ねずめじまし
打消	(10)ず	ぬ	ね	ず	ず
	なり＊	なり			
過去	(11)つ	つる	つれ	て	て
	(12)ぬ	ぬる	ぬれ	な	に
	らむ めり べし なり＊ まじ らし	なり		むめましな	たりけりけむきしし、しか
	(13)たり	たる	たれ	たら	たり
				ねずめじまし	つけりけむきしし、しか
	(14)せり	せる	せれ	せら	せり
				むめまし	つけりけむきしし、しか
	(15)けり	ける	けれ	けら	けり
				ず	つきしし、しか
未來	(16)む	む	め		
		なり			
推量	(17)けむ	けむ	けめ		
	(18)らむ	らむ	らめ		
	(19)めり	める	めれ		めり
		なり			つきしし、しか
詠歎	(20)なり	なる	なれ		
		なり			

○此表、別ニ、説明ヲ用キズ、前ノ第四表ノ説明ヲ代用シテ、解スベシ、又、第三表ニモ參照スベシ。古書ニ、用例ハアレド、連續ノ希有奇僻ナルハ、省ケルモアリ。

○此表、前ノ第三表ニ比ベテ、(21)以下ノ助動詞ヲ省キタルハ、連續スルモノ、ナケレバナリ。但シ、「べき、ごとき、なじき、し」等ノ、(8)ノ「なり」ニ連ルヿハアリ、又、「べけむ、べかり、まじかり」ナドモアリ、是等ノ事ハ、第三表、第四表、ノ説明ニ準ヘテ知ルベシ。

使役相	指定		打消	過去					未來		推量		詠歎
(5)す (6)さす (7)しむ	(8)なり	(9)たり	(10)ず	(11)つ	(12)ぬ	(13)たり	(14)せり	(15)けり	(16)む	(17)けむ	(18)らむ	(19)めり	(20)なり
べし まじ らし			なり*	らむ めり なり* べし らし									
する さする しむる	なる	たる	ぬ	つる	ぬる	たる	せる	ける	む	けむ	らむ	める	なる
なり	らむ めり べし らし	なり らむ めり べし まじ らし	なり	なり		なり らむ めり べし らし	なり らむ めり らし	なり らむ らし	なり			なり らし	らむ めり らし
すれ さすれ しむれ	なれ	たれ	ね	つれ	ぬれ	たれ	せれ	けれ	め	けめ	らめ	めれ	なれ
せ させ しめ	なら	たら	ず	て	な	たら	せら	けら					
らる ず(ぬ、ね) む(め) まじ まし	ず(ぬ、ね) む(め) まじ まし	しむ ず(ぬ、ね) む(め) まじ まし		む(め) まし		ず(ぬ、ね) む(め) まし	む(め) まし	ず					
せ させ しめ	なり	たり	ず	て	に	たり	せり	けり				めり	
けり けむ き(し、しか)	つ けり けむ き(し、しか)			けり けむ き(し、しか)	たり けり けむ き(し、しか)	つ けり けむ き(し、しか)		つ き(し、しか)				つ き(し、しか)	

○此表、別ニ、說明ヲ用ヰズ、前ノ第四表ノ說明ヲ代用シテ、解スベシ、又、第三表ニモ參照スベシ。古書ニ、用例ハアレド、連續ノ希有奇僻ナルハ、省ケルモアリ。

○此表、前ノ第三表ニ比ベテ、(21)以下ノ助動詞ヲ省キタルハ、連續スルモノ、ナケレバナリ。但シ、「べき」、「ごとき」、「まじき」、「し」等ノ、(8)ノ「なり」ニ連ルヿハアリ、又、「べけむ」、「べかり」、「まじかり」、ナドモアリ、是等ノ事ハ、第三表、第四表、ノ說明ニ準ヘテ知ルベシ。

第六表　動詞ト助動詞トノ連續、其三。

	現在	半過去	過去	大過去
	四段 上二段 下二段 上一段 下一段 加變 佐變 奈變 良變	四段 上二段 下二段 上一段 下一段 加變 佐變 奈變 良變	四段 上二段 下二段 上一段 下一段 加變 佐變 奈變 良變	四段 上二段 下二段 上一段 下一段 加變 佐變 奈變 良變
第一活用	(押)おす (生)いく (受)うく (着)きる (蹴)ける (來)く (爲)す (死)ぬ (有)あり			
第五活用	(押)おし (生)いき (受)うけ (着)き (蹴)け (來)き (爲)し (死)に (有)あり (つて、て) (ぬ、な、に) (たり(たら、たり)	(押)おし (生)いき (受)うけ (着)き (蹴)け (來)き (爲)し (死)に (有)あり (けり) (き、し、しか)	(押)おし (生)いき (受)うけ (着)き (蹴)け (來)き (爲)し (死)に (有)あり (てにたり) (けり) (き)	
第四活用	未來 おさ いき うけ けき しき せ な あら (む(め))			
第五活用	おし いき うけ けき しき に あり (て な ら む(め))	おし いき うけ けき しき に あり (けむ(けめ))	おし いき うけ けき しき に あり (てにたり) (けむ)	

○說明、表中ニ、除却スベキ例、三アリ、其一、奈變ノ「死ぬ」ハ、半過去ノ「死に、ぬ」、其未來ノ「死に、なむ」、其ニ用例ナク、隨テ、大過去ノ「死に、にけり」、死に、にき」、其未來ノ「死に、にけむ」皆、用例ナシ、其二、加變ノ「來ハ」、過去ノ「きし」、「きしか」ノ外ニ「おし」、「おしか」トモ連リテ「おき」、「おき」ノ用例ハナシ、其三、佐變ノ「爲」ハ、過去ノ「しき」ノ外ニ「し」、しか」ニハ「せし」、せしか」トノミ連ル。（第四表、參照）

第六表　動詞ト助動詞トノ連續　其二

未來

	現在	半過去	過去	大過去
	四段 上二段 下二段 上一段 下一段 加變 佐變 奈變 良變	四段 上二段 下二段 上一段 下一段 加變 佐變 奈變 良變	四段 上二段 下二段 上一段 下一段 加變 佐變 奈變 良變	四段 上二段 下二段 上一段 下一段 加變 佐變 奈變 良變
第一活用	(押)おす (生)いく (受)うく (着)きる (蹴)ける (來)く (爲)す (死)ぬ (有)あり			
第五活用		(押)おし (生)いき (受)うけ (着)き (蹴)け (來)き (爲)し (死)に (有)あり (つて、て) (ぬ(なに)) (たり(たら、たり))	(押)おし (生)いき (受)うけ (着)き (蹴)け (來)き (爲)し (死)に (有)あり (けり) (き(し、しか))	(押)おし (生)いき (受)うけ (着)き (蹴)け (來)き (爲)し (死)に (有)あり (てにたり) (けり) (き)
第四活用	おさ いき けき うけ せ な あら (む(め))			
第五活用		おし いき けき しき に あり (てなたら) (む(め))	おし いき けき しき に あり (けむ(けめ))	おし いき けき しき に あり (てにたり) (けむ)

○說明、表中ニ、除却スベキ例、三アリ、其一、奈變ノ「死ぬ」ハ、半過去ノ「死に、ぬ」、其未來ノ「死に、なむ」、其ニ用例ナク、隨テ、大過去ノ「死に、にけり」、死に、にき」、其未來ノ「死に、にけむ」皆、用例ナシ、其二、加變ノ「來ハ」、過去ノ「きし」、きしか」ノ外ニ「おし」、おしか」トモ連リテ「きき」、おき」ノ用例ハナシ、其三、佐變ノ「爲」ハ、過去ノ「しき」ノ外ニ「し」、しか」ニハ「せし」、せしか」トノミ連ル。(第四表、參照)

第五表　動詞ト助動詞トノ連續、其二。

		能相	所相	勢相	敬相（敬語）	使役相
四段	第一活用	（押）おす	おさ	おさ	おさ	おさ
奈變	（死）しぬ	（死）しぬ	しなゝ	しなゝ	しなゝ	しなゝ
良變	（有）あり	（有）あり	あら	あら	あら	あら
上二段	（生）いく	（生）いく	いき	いき	いき	いき
下二段	（受）うく	（受）うく	うけ	うけ	うけ	うけ
上一段	（着）きる	（着）きる	き	き	き	き
下一段	（蹴）ける	（蹴）ける	け	け	け	け
加變	（來）く	（來）く	こ	こ	こ	こ
佐變	（爲）す	（爲）す	せ	せ	せ	せ
			る（れ）	る（れ）	す（せ）	むず（しめ）
			らる（られ）	らる（られ）	さす（させ）	

○說明　自動詞、（死、有、生、來）他動詞、（押、受、着、蹴、爲）共ニ、其本體、即チ、能相ヲ成ス。諸ノ動詞ニ、自動、或ハ、他動ノ性アラヌハナク、而シテ、自動、他動、各自ニ、所相、勢相、使役相、敬相ヲ成サヌハナシ。

第四表　動詞ト助動詞トノ連續、其一。

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第五活用
四段活用	(行)ゆく (押)おす (分)わかつ (飛)とぶ (讀)よむ (去)さる	ゆく おす わかつ とぶ よむ さる	ゆけ おせ わかて とべ よめ され	ゆか おさ わかた とば よま さら	ゆき おし わかち とび よみ さり
上二段活用	(生)いく (落)おつ (強)ふる (恨)うらむ (報)むくゆ (懲)ゐる	いくる おつる ふる うらむる むくゆる ゐる	いくれ おつれ ふれ うらむれ むくゆれ ゐれ	いき おち ふひ うらみ むくい ゐり	いき おち ふひ うらみ むくい ゐり
下二段活用	(得)う (受)うく (任)まかす (立)たつ (兼)かぬ (歷)ふ (勤)つとむ (覺)おぼゆ (恐)おそる (植)う	う うく まかする たつる かぬる ふる つとむる おぼゆる おそる うる	うれ うくれ まかすれ たつれ かぬれ ふれ つとむれ おぼゆれ おそるれ うれ	え うけ まかせ たて かね へ つとめ おぼえ おそれ うゑ	え うけ まかせ たて かね へ つとめ おぼえ おそれ うゑ
上一段活用	(鑄)いる (着)きる (似)にる (乾)ひる (見)みる (居)ゐる	いる きる にる ひる みる ゐる	いれ きれ にれ ひれ みれ ゐれ	い き に ひ み ゐ	い き に ひ み ゐ
下一段活用	(蹴)ける	ける	けれ	け	け
	らむ めり なり* べし まじ らし	なり ごとし		ず(ぬ、ね) む(め) じ まし し、しか	つ(て) ぬ(な、に、ね) たり けり けむ き、し、しか
加行變格	(來)く	くる	くれ	こ	こ
佐行變格	(爲)す (在)おはす	する おはする	すれ おはすれ	せ おはせ	し おはし
奈行變格	(往)いぬ (死)ぬ	いぬる ぬる	いぬれ ぬれ	いな ぬな	いに ぬに
良行變格	(有)あり (居)なり (侍)はべり (在)いまそかり	ある なる はべる いまそかる	あれ なれ はべれ いまそかれ	あら なら はべら いまそから	あり なり はべり いまそかり
	なり ごとし らむ めり なり* べし まじ らし			ず(ぬ、ね) む(め) じ まし	つ(て) ぬ(な、に、ね) たり けり けむ き、し、しか

○第四表ノ說明。

○表中ノ各欄內ノ、上部ニアルハ、動詞ニテ下部ニアルハ、助動詞ナリ。

○表中ノ諸動詞、及ビ、其諸活用ハ、全ク、第一表ノモノニ同ジ。

○此ノ表ノ上ニテハ、動詞ノ法(終止法、連體法、命令法、等)ノ事ヲバ、一切言ハズシテ、只、某ノ助動詞ハ、某ノ動詞ノ第幾活用ニ連續ス、トノミ說ク。

○動詞ノ第三活用ニハ、連續スベキ助動詞ナケレバ、贅物ナレド、活用ノ、中間ニテ脫セムハ、體裁好カラヂバ、存シタリ、但シ、第六活用ハ、全ク不用ナレト先ヅハ心得ベシ。而シテ、變格活用ノ方ニテ、希有ノ異例アル所ニハ、特ニ、● 印ヲシタレバ、心ヲ付クベシ。

然シテ、其異例ハ、唯、左ノ四ナリ。

第一、加行變格ノ第四、第五、ノ欄內ニ於テ、「し、しか」ハ、何レニモ連續シテ、「き」ハ、何レニモ連續セヌ事。

第二、佐行變格ノ第四、第五、ノ欄內ニ於テ、「き、し、か」ノ、別レテ連續スル事。

第三、奈行變格ノ第五ノ欄內ニ於テ、「ぬ、な、に、ね、」ハ、全ク連續セヌ事。

○第三表ニハ、助動詞二十七アルニ、此ノ表ニハ、十八(第一段ニ、六、第二段ニ、二、第四段ニ、四、第五段ニ、六)ナルハ、動詞ニツカヌ「たり、せり、」ノ二ヲ除キ、所相、勢相、使役相、ニ屬スル七ヲ、第五表ニ讓リタレバナリ。○過去、未來、ニ屬スル助動詞ハ、第六表ニモ掲ゲテアリ。○「なり」ノ下ニ、* 印ノツキタルハ、第三表ノ(20)ノ詠歎ノ「なり」ナリ。印ノナキハ、(8)ノ指定ノ「なり」ナリ。○● 印アルモノハ、正格ノ連續ト、異ナルモノナリ。

上一段活用	(鑄)いる	(着)きる	(似)にる	(乾)ひる	(見)みる	(居)ゐる	(蹴)ける		
下一段活用	(鑄)いる	(着)きる	(似)にる	(乾)ひる	(見)みる	(居)ゐる	(蹴)ける		
加行變格	(來)く								
佐行變格	(爲)す	(在)おはす							
奈行變格	(往)いぬ	(死)ぬ							
良行變格	(有)あり	(居)なり	(侍)はべり	(在)いまそかり					
	くる								
	する	おはする							
	いぬる	ぬる							
	ある	なる	はべる	いまそかる					
	くれ								
	すれ	おはすれ							
	いぬれ	ぬれ							
	あれ	なれ	はべれ	いまそかれ					
	こ								
	せ	おはせ							
	な	ぬな							
	あら	なら	はべら	いまそから					
	き								
	し	おはし							
	に	ぬに							
	あり	なり	はべり	いまそかり					

上一段活用	(動)つとむ	(覺)おぼゆ	(恐)おそる	(植)うう	(鑄)いる	(着)きる	(似)にる	(乾)ひる	(見)みる
下一段活用	(動)つとむる	(覺)おぼゆる	(恐)おそる	(植)うう	(鑄)いる	(着)きる	(似)にる	(乾)ひる	(見)みる
加行變格	(來)く								
佐行變格	(爲)す	(在)おはす							
奈行變格	(往)いぬ	(死)ぬ							
良行變格	(有)あり	(居)なり	(侍)はべり	(在)いまそかり					
	くる								
	する	おはする							
	いぬる	ぬる							
	ある	なる	はべる	いまそかる					
	くれ								
	すれ	おはすれ							
	いぬれ	ぬれ							
	あれ	なれ	はべれ	いまそかれ					
	こ								
	せ	おはせ							
	な	ぬな							
	あら	なら	はべら	いまそから					
	き								
	し	おはし							
	に	ぬに							
	あり	なり	はべり	いまそかり					

らし

らむ めり なり* べし まじ らし

なりごとし らむ めり なり* べし まじ らし

ず(ぬ、ね) む(め) じ まし し、しか

ず(ぬ、ね) む(め) じ まし し、しか

つ(て) ぬ(なに、ね) たり けり けむ し、しか

つ(て) ぬ(なに、ね) たり けり けむ き(し、しか)

つ(て) ぬ(なに、ね) たり けり けむ き(し、しか)

○第四表ノ說明。

○表中ノ各欄內ノ、上部ニアルハ、動詞ニテ下部ニアルハ、助動詞ナリ。

○表中ノ諸動詞、及ビ、其諸活用ハ、全ク、第一表ノモノニ同ジ。

○此ノ表ノ上ニテハ、動詞ノ法(終止法、連體法、命令法、等)ノ事ヲバ、一切言ハズシテ、只、某ノ助動詞ハ、某ノ動詞ノ第幾活用ニ連續ス、トノミ說ク。

○動詞ノ第三活用ニハ、連續スベキ助動詞ナケレバ、贅物ナレド、活用ノ、中間ニテ脫セムハ、體裁好カラヂバ、存シタリ、但シ、第六活用ハ、全ク不用ナレバ、省キツ。

○動詞ト、助動詞ト、連續スルヤウハ、例ヘバ、第一段ノ欄內ニテ、「ゆく、らむ、ゆく、めり、」「ゆく、なり、」或ハ、「おす、らむ、」「おす、めり、」「おす、なり、」ナド、何レノ動詞、助動詞、ヲモ、互ニ相連續セシメテ、解スベシ、餘皆、此ノ如シ。

○助動詞ノ下ニ、「ず、(ぬ、ね)」「む、(め)」「つ、(て)」「ぬ、(な、に、ね)」「き、(し、しか)」ナド、括弧中ニ記セルハ、其活用ナリ。但シ、此ノ表中ニハ、其活用ノ、惑ヒ易ク思ハルヽモノノミヲ出セリ、其餘ナルハ、スベテ、其助動詞ノ第一活用ヲノミ擧ゲタレバ、第三表ノ第一ノ段ニ照シテ、求メテ、其各活用ヲ知ルベシ。

○スベテ、動詞ト、助動詞ト、ノ連續ノ通則ハ、正格活用ノ方ノ、各欄內ニ記シタルヲダニ、覺エ得レバ足レリ、變格活用ノ方モ、押シナベテ、コレト同樣ナリ、ト先ヅハ心得ベシ。而シテ、變格活用ノ方ニテ、希有ノ異例アル所ニハ、特ニ、● 印ヲシタレバ、心ヲ付クベシ。

然シテ、其異例ハ、唯、左ノ四ナリ。

第一、加行變格ノ第四、第五、ノ欄內ニテ、「し、しか」ハ、何レニモ連續シテ、「き」ハ、何レニモ連續セヌ事。

第二、佐行變格ノ第四、第五、ノ欄內ニテ、「き、し、か」ノ、別レテ連續スル事。

第三、奈行變格ノ第五ノ欄內ニテ、「ぬ、な、に、ね、」ハ、全ク連續セヌ事。

第四、良行變格ニ於テハ、第一欄ニ於テ連續スベキ助動詞ノ、悉ク、第二欄ニ於テ連續スル事。

○第三表中ノ所相、勢相、使役相、ノ(1)ヨリ(7)マデノ七語ハ、動詞ノ各活用ニ連續スルニ、區々ナルモノ多ケレバ、表ノ混雜セムヿヲ畏レテ、別ニ、第五表ニ揭ゲタリ。

○助動詞ノ、形容詞ニ連續スルモノ一ツアリ、即チ、形容詞ノ第二活用ニ、「善き、なり、惡しき、なり、」ト連ルモノ、是レナリ。(8)ノ「なり」ナリ。サレド、是レハ、其連體法ヲ、名詞ト見テ連ヌルニテ、「月、なり、花、なり、」ナド、名詞ニ連ヌルト同ジ、ト知ルベシ、今、別ニ、表ニ揭ゲズ。

○「善かり、惡しかり、」善けむ、無けむ、」押サざり、受ケざり、」ナドノ「かり、」けむ、」ざり、」等ノ事ニ就キテハ、第三表ノ說明ヲ見ヨ。

○第三表ニハ、助動詞二十七アルニ、此ノ表ニハ、十八(第一段ニ、六、第二段ニ、二、第四段ニ、四、第五段ニ、六)ナルハ、動詞ニツカヌ「たり、」「せり、」ノ二ヲ除キ所相、勢相、使役相、ニ屬スル七ヲ、第五表ニ讓リタレバナリ。○過去、未來、ニ屬スル助動詞ハ、第六表ニモ揭ゲテアリ。○「なり」ノ下ニ、* 印ノツキタルハ、第三表ノ(20)ノ詠歎ノ「なり」ナリ。○● 印アルモノハ、正格ノ連續ト、異ナルモノナリ。